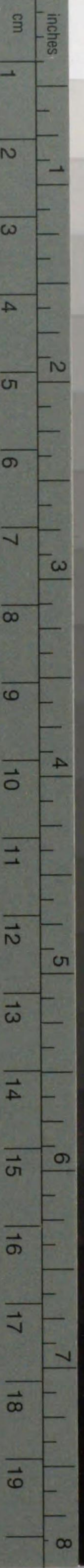


# Kodak Gray Scale



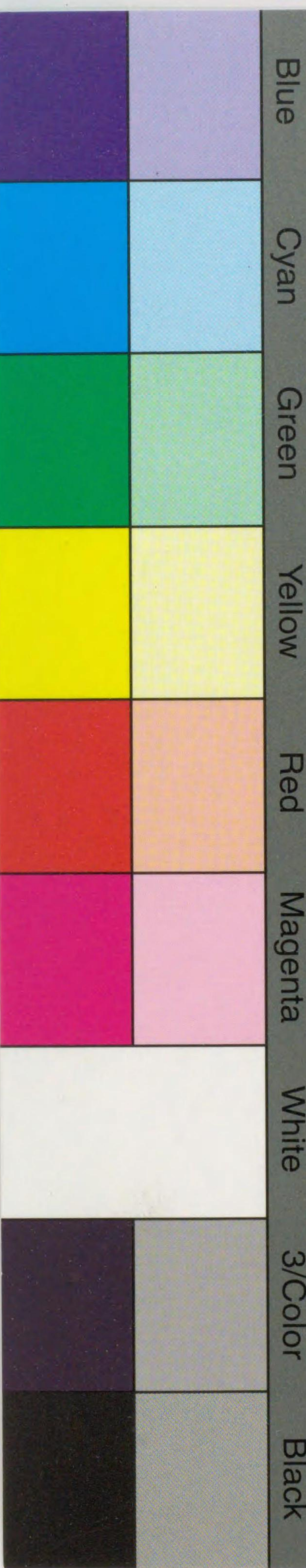
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

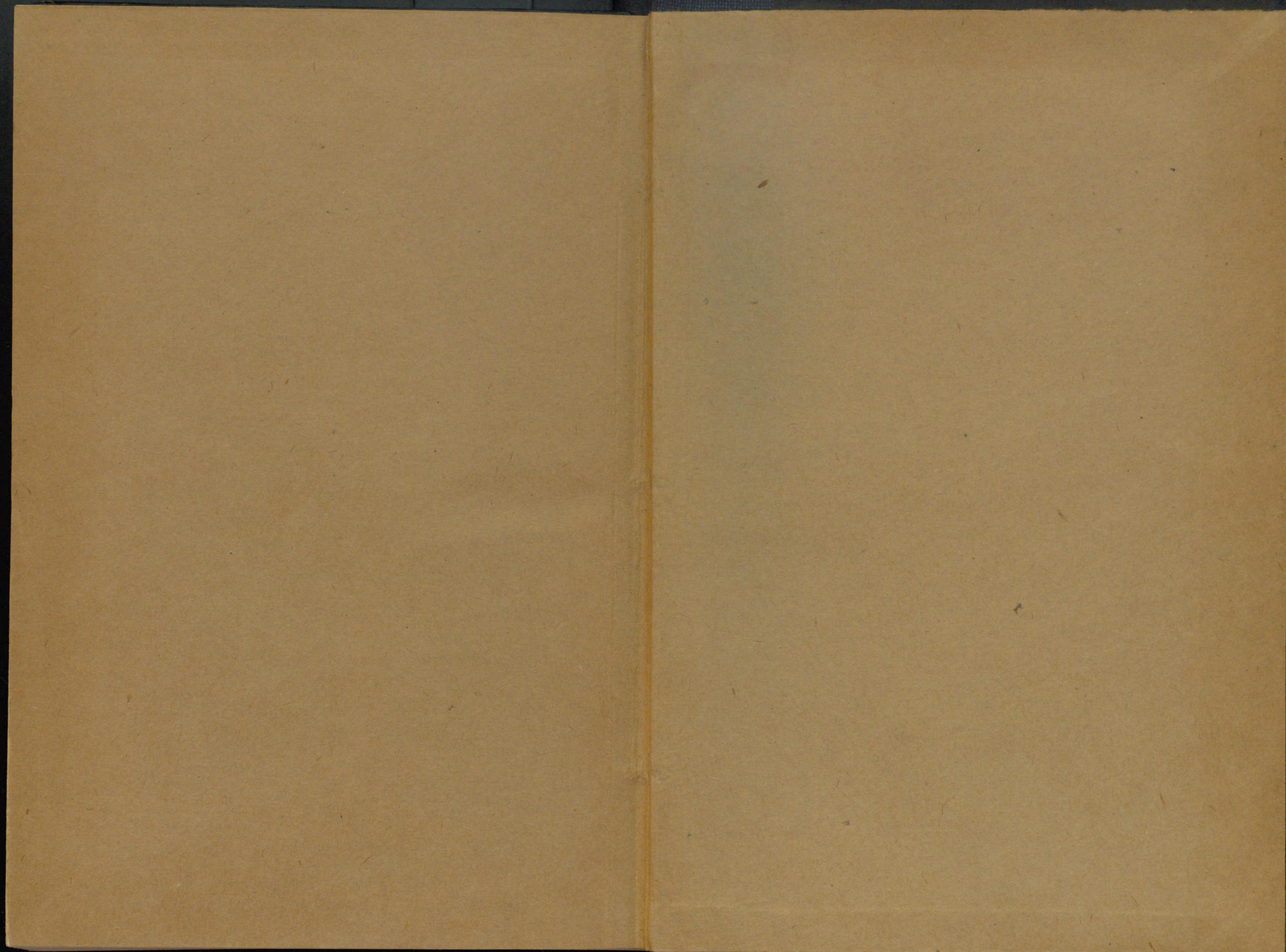
© Kodak, 2007 TM: Kodak



38  
168

588-168  
1200501525054







支那蠶業大觀

蠶業同業組合中央會編纂



三蚕姑

京東

囡田日榮堂





面千

里峯

百家書





面千

百泉書



里漢



蠶絲業同業組合中央會會長 貴族院議員 志村源太郎閣下題辭



## 序

近年我國蠶絲業の發達は頗る顯著にして、之を既往に顧みて隔世の感なきを得ないが、翻つて斯業の前途に想到する時は幾多難關の横はるを思はねばならぬ。而して之が將來を過らざらしめんには、我が生絲が海外消費を主眼として居る刻下の情勢より見て、先づ以て世界に於ける生絲の生産並に消費に關する狀況を明にせねばならぬ。今その消費方面に關しては姑らく之を措き、世界生絲の生産額の方面より之を見るに、我國は全額の約六割を占め、尙ほ益々増産の勢を示して居る。之に亞いで支那は約二割七分を占むると共に、好個の蠶絲國たるべき要件を備へ、將來多大の發展力を藏して居る。斯くて世界生絲の



供給は今や此の極東兩國が主要の地位を占め、之を除いては物の數ではない。

而も一衣帶水日支兩國の關係たるや、政治經濟に將又國民生活の上に、向後益々交錯を極むべきは言ふまでもなく、勢ひ彼我蠶絲業の將來も亦今より一層接觸の度を加ふるであらう。然るに所謂「支那蠶絲業」は多年言ひ古された題目ではあるが、その尨大なる地積に互り複雑なる國情裡にある支那斯業の真相は茫乎として容易に之が要諦を捉へ難く、現にそれが如何に動きつゝあるかを見極めんとするも、隔靴搔痒の感を免れなかつた。されば曩に政府に於て臨時産業調査局の設けらるゝや、支那蠶絲業の調査を以て重要項目の一に加へられ、更に大正十二年蠶絲業同業組合中央會が偶々財源を得たるを機會に、同會の一事

業として之が徹底的調査を企てたるも、此の所以である。

茲に該調査を擔當せられたる上原重美君は、實に數年を費して殆ど支那全土に互り具に實地踏査を遂げ、之が實相の闡明に努力し、今や其の稿成り、之を編纂して「支那蠶絲業大觀」と題し、其の上梓を見るに至りたるは、予の甚だ欣快とする所である。蓋し本書は支那蠶絲業の全局に就き其の真相を捉へたるものと言ふべく、支那蠶絲業に關する幾多の實際問題を研究するに當り無雙の指南車たるを失はぬであらう。尙本書には蠶業の開祖と稱せらるゝ有熊氏の衣鉢を傳へたる「育蠶繰絲」に關する記事が豊富であつて、之を本邦に於ける現代の方法に對比し頗る興味に富んで居る。

要するに支那蠶絲業は世界の生絲供給上輕視すべからざる



地位を占めて居るから、我國蠶絲業の將來に關する幾多の方策を立てる上に極めて密接の關係を有して居る。されば、本書は是等の研究に適切なる材料を供給し、我が蠶絲界を裨益する處頗る大なるものあるを信じて疑はぬのである。

昭和四年二月中浣

蠶絲業同業組合中央  
會副會長 農學博士

加賀山辰四郎

序

生絲、絹布は最も光輝ある歴史を有する國際商品である。太古蠶桑の業が支那に起つた頃よりして、既にその生絲、絹布は天山の南北路を越えて遠く泰西諸國へ運ばれたのであつた。降つて十世紀前後伊佛に移植された蠶絲業は、西歐文明に彩られて新なる發達を遂げたが、時代は更に推移して旺盛なる米國絹業と相俟ち、我國蠶絲業の偉大なる擡頭を見るに至つた。言ひ換れば世界蠶業は支那に起り、伊佛に榮へ、次いで日本に移り、今日我蠶絲業が全世界に於ける獨占的地位を占めつゝあるは、今更ら言ふまでもない。けれども此の繁榮が何時まで持續さるべきか、本邦蠶絲業の將來に關して想到する時は、之が對



象として重要視しせらるゝものは、彼の人造絹絲と共に支那蠶絲業に外ならぬ。而して人造絹絲工業の威大なる發展には、何人も之を疑はぬが、支那蠶絲業に對する觀察に就いては、區々たるを免れない。然共之が將來を靜觀すれば、その紊亂せる國情裡に在りて遅々なながらも進みつゝある支那蠶絲業の現状は、謂はゞ雌伏の状態と觀るべきではあるまいか、之が實相を明にして其の推移を正視することは、我蠶絲界に他山の石として肝要なる事と謂ふべく、曩に蠶絲業同業組合中央會が支那蠶絲業の調査研究を企て、之が徹底に努めたるは、誠に機宜に適したる措置と謂はねばならぬ。

而も其の任に當りたる上原君は、信州製絲業者の家に生れて上海東亞同文書院に學べる秀才にして、曾て予等の經營せる在

上海製絲工場裡に於て君と相見えたのであつた。君は支那及支那蠶絲業に關する豊富なる知識と經驗とを以て其の衝に當り、前後五箇年の日子を費し、南船北馬親しく支那十八省を跋涉踏破して能くその蘊奧を究め、逐次齎せたる報告には驚嘆すべき有益なる事項があつた。

今や此の價值ある先人未發の資料を以て之を編纂し、支那蠶絲業大觀と題し、之が上梓を見るに至つたことは、斯界の爲め大に慶ぶと共に、上原君の勞を多とし、普く之が活用の資に供せられんことは予の希望する所である。

昭和四年二月二十一日

貴族院議員 今井五介



昨秋本稿を脱するや直に之が出版に着手する

を得たるは外務省對支文化事業部の助力に俟つ

ものが甚だ多い。謹て本書を對支文化事業部に

呈し厚く感謝の意を表するものである。

## 自序

中華の偉人孫文の終焉は、實にも英雄的であつた。彼が臨終に際し「革命未成功同志務須努力」と熱烈なる辭を残してから僅に數年ならずして支那の天下は、總理の遺囑を奉ずる國民黨の手に歸し、彼の三民主義は今や澎湃として全國民精神を把握せるものゝ如くである。勿論支那の形勢は、渾沌として且夕を測り難いものにもせよ、現に新政府は諸般施政に互り、所謂國民革命の完成に努めつゝある。而してその産業方面にあつては、先づ第一着に蠶絲業の指導獎勵に手を初めんとするは、その新都南京を控ふる蘇浙地方を始め、革命の發祥地廣東地方が支那主要の蠶業地たるに鑑み、蓋し當然と謂ふべきである。



斯くて隣邦蠶絲業に漸く革新の氣運が動かんとする斯の時、我が蠶絲業同業組合中央會に於て「支那蠶絲業大觀」の編纂を見るに至つたことは、至極機宜に適したる企と云はざるを得ない。乍然不肖非才を以て編成の任に當り、果して能く斯業の實相を傳へ得たるか、固より忸怩たらざるを得ぬ。

顧れば過ぐる數年間、予が生活は沐雨櫛風の旅であつた。縦横蘇浙の山河を跋涉せることは、數ふるに暇ないが、際涯なく丘陵の擴がる巴蜀の高原を黙々として歩き續けたのは、一九二六年の夏である。またその秋は廣東三角洲を彷彿、轉々陋隘なる製絲工場に宿泊し、夜半匪賊の襲來を警戒する銅鑼の音に幾度か故山の夢は破られた。近くは山東の僻陬、驢に跨り、弦月を仰いて目的地に着いたことども回想すれば、支那の山河は走馬燈

の如くである。

而も其間毫も災厄に遭はなかつたことは、一に天の我に惠むもの厚きによると謂ふべき歟。然し乍ら其の勞苦辛酸により得たる收穫に就いては、遺憾乍ら意に満たぬ點が尠くなかつた。斯くて其の資料に據り編纂するに當つては、彼の特殊なる環境に横はる支那蠶絲業の真相を努めて鮮明に描出せんことを期し、成る可く之に卑見を加へることを避けた。蓋し本書の目的は主として支那斯業に關する一般的研究資料を提供することにあるからである。庶幾くは之に依り、幾多専門の士が、更に支那蠶絲業の各部門に就き、深く研究の歩を進めらるゝ階梯たるを得ば、筆者の幸とする所である。

昭和四年榊月

編者識

自序

二



### 凡例

- 一、「中部支那の蠶絲業」は一九二三年より一九二六年迄支那駐在員として専ら蒐集せる資料を骨子とし、「北支那の蠶絲業」は一九二五年六月山東省を一巡し、續いて一九二七年五月より六月迄普く山東省蠶業地を踏査せるものに係はる。
- 一、「四川省の蠶絲業」は遠く一九一七年夏入蜀して重慶地方を視察し、更に一九二六年四月より七月に亘り省内蠶業地を遍歴して得たる資料に據る。
- 一、「南支那の蠶絲業」に就いては一九二〇年春廣東生絲市場を視察し、重ねて一九二六年十月より十一月に亘り三角洲蠶業地帯を踏査した。然し養蠶方面に關して調査を缺けるものは嶺南大學及省立農林試驗場の報告書を參考に供した。
- 一、複雑なる貨幣及度量衡に關しては各編項を設けて説明を加へたが、之を通じて貨幣單位は元 Silver Dollar を標準とし、重量に擔 Picul 及地積に畝 Mou (凡そ我二百坪)を用ひた。
- 一、支那の蠶絲に關する用語、地名其他に附せるルビは北京語によらずして各地實際の發音を以てした。

### 目次

## 緒言

第一編 總論 ..... 九

第一章 産額輸出及國內消費額 ..... 九

- 一 繭絲の生産額 ..... 九
- 二 生絲輸出額 ..... 一八
- 三 國內消費額 ..... 二三

第二章 生産要件 ..... 二七

- 一 栽桑状態 ..... 二七
- 二 養蠶經營 ..... 二九

目次



目次

三 製絲經營……………二

第二編 中部支那の蠶絲業……………三

第一章 蠶業の環境及概況……………三

一 中支蠶業の分野……………三

二 南船北馬……………三

三 錢塘江の南部……………三

四 滬杭鐵路の沿線……………三

五 大運河を傳ふて……………三

六 蘇州と無錫……………三

七 宜興から溧陽……………三

八 鎮江と南京……………三

九 楊子江の北部……………三

一〇 長江を溯る……………五

一一 漢水の流域……………五

一二 蠶業に於ける中支の地位……………五

一三 蠶業の地方色……………五

一四 生産及取引の徑路……………六

第二章 栽桑業……………六

一 盛哉浙西の桑園……………六

二 桑の種類……………六

三 育苗と其產地……………六

四 接木と仕立方……………七

五 桑園の分布……………七

六 桑園の管理と施肥……………七

七 收穫と桑園の收支……………八



八 桑の賣買と桑値段 ..... 八三

九 地價公租及小作料 ..... 九〇

一〇 桑の病蟲害 ..... 九六

第三章 蠶種製造業

..... 九七

一 蠶種の系統及種類 ..... 九七

二 餘杭製種地と生産額 ..... 一〇二

三 餘杭の蠶種製造家 ..... 一〇四

四 高温育と採種法 ..... 一〇七

五 餘杭種の取引 ..... 一一〇

六 餘杭蠶桑研究社 ..... 一一四

七 餘杭種の生産費 ..... 一二六

八 紹興種の産地と産額 ..... 一二七

九 紹興種の製造法 ..... 一二八

第四章 養蠶業

..... 一二七

一〇 紹興種の取引 ..... 一二〇

一一 無錫養蠶家の自家採種 ..... 一二三

一二 各地の護種及貯藏 ..... 一二三

一三 新興の改良種 ..... 一二四

一 養蠶に對する農民の觀念 ..... 一二七

二 養蠶の規模 ..... 一三一

三 蠶室と蠶具 ..... 一三四

四 飼育經過表 ..... 一三八

五 催青と掃立 ..... 一四一

六 稚蠶飼育と稚蠶買賣 ..... 一四四

七 出火からの飼育 ..... 一四六

八 上簇法 ..... 一四九



九 給桑及收繭の標準……………一五二

一〇 夏秋蠶の飼育……………一五五

一一 養蠶の收支……………一五七

一二 蠶の病蟲害……………一六〇

第五章

繭取引

一 繭取引の徑路と出廻額……………一六二

二 繭行の性質及設備……………一六六

三 繭行の分布及設置制限と國民政府の變革……………一七〇

四 繭行貸借の方法……………一七六

五 現銀の輸送と官憲の保護……………一八三

六 繭秤と通貨……………一九〇

七 購繭員の配置と買入の實況……………一九三

八 各地繭市場の特徴……………一九九

九 購繭費……………二二四

一〇 繭の相場……………二二二

一一 上海及無錫の乾繭市場……………二三六

一二 乾繭取引の狀況……………二三〇

第六章

器械製絲業

一 器械製絲業發達の徑路……………二三三

二 上海式製絲業の特色……………二三七

三 工場及繰絲器械の設備……………二四九

四 製絲用水及燃料……………二四七

五 工場の管理……………二五一

六 工場の賃借から開業迄……………二五四

七 工場の或る一日……………二五六

八 原繭の品質……………二六〇



九 剥繭と選繭……………二六五

一〇 煮繭と繰絲……………二六八

一一 絲量と工程……………二七三

一二 生絲の整理及検査……………二七六

一三 屑物の整理……………二八〇

一四 一般労働者の状況……………二八一

一五 製絲工の養成……………二九一

一六 製絲賃銀……………二九三

一七 操業時間と勤惰……………二九六

一八 女工の待遇及生活振……………二九九

一九 労働問題……………三〇三

二〇 製絲業の組織と經營振……………三一〇

二一 製絲家の信用及商標……………三二四

二二 外人關係の製絲工場……………三三二

第七章 座繰製絲及再繰業

二三 一般金融状況……………三三四

二四 製絲家に對する錢莊の放資……………三三八

二五 生絲の生産費……………三四一

二六 繭より絲までの数字的實例……………三四五

二七 製絲業としての上海……………三四七

二八 上海と地方製絲業の得失……………三五二

二九 製絲業地としての地方都市……………三五七

三〇 既往に於ける製絲家の損益……………三六六

一 座繰絲と國內消費……………三七五

二 座繰製絲業の地域及生絲の種類……………三七六

三 座繰製絲器械……………三七九

四 製絲法と副蠶品の利用……………三八一



五 座繰絲の生産費……………三六三

六 座繰絲の取引……………三六六

七 南潯及震澤の再繰業……………三六七

八 再繰加工費……………三九〇

九 座繰及再繰業の改良……………三九一

第八章

蠶絲業の團體……………

三九四

一 江浙絲經同業總公會……………三九四

二 江浙皖絲廠繭業總公所……………三九六

三 上海外人生絲協會……………四〇八

第九章

上海生絲及屑絲貿易……………

四一

一 上海市場の生絲需給……………四一

二 生絲の種類及品質……………四五

三 生絲輸出商……………四二

四 生絲賣込問屋……………四九

五 生絲の商標及格付……………四三

六 生絲取引慣習……………四三六

七 生絲の受渡……………四四四

八 本邦生絲市場との比較……………四四七

九 蠶絲類の輸出税其他課税……………四五〇

一〇 上海屑物市場の集散状況……………四五五

一一 器械絲の屑物……………四五八

一二 座繰絲の屑物……………四六二

一三 屑物の取引状況……………四七四

一四 歐米向及本邦向輸出……………四八〇

一五 精練及絹絲紡績……………四八四



第一〇章 蠶業教育及獎勵機關

- 一 農民の普通教育……………四八六
- 二 蠶業學校及獎勵機關一覽……………四八八
- 三 國立東南大學……………四九一
- 四 金陵大學……………四九七
- 五 江蘇省立女子蠶業學校……………五〇三
- 六 江蘇省の各種施設……………五〇七
- 七 浙江省の各種施設……………五一〇
- 八 中國合衆蠶桑改良會……………五一四
- 九 上海萬國檢驗所……………五三三

第一章 湖北省の蠶絲業

- 一 湖北省の蠶業地……………五四〇

- 二 養蠶業の一斑……………五四一
- 三 繭の種類……………五四四
- 四 購繭機關……………五四六
- 五 通貨と繭秤……………五五一
- 六 繭の取引狀況……………五五二
- 七 繭買入諸掛……………五五三
- 八 座繰製絲業……………五五五
- 九 器械製絲業……………五五六
- 一〇 上海式製絲工場……………五五七
- 一一 日本式中華絲廠……………五六二
- 一二 日本式と上海式繰絲法の比較……………五七四
- 一三 製絲業地としての漢口の價值……………五七五

第三編 北支那の蠶絲業



第一章 北支那蠶業の環境及概況……………五八三

- 一 蠶業地へ向ふ……………五八三
- 二 青州から臨朐縣……………五八六
- 三 張店驛と周村鎮……………五九〇
- 四 博山から萊蕪縣……………五九三
- 五 北支那を代表する山東蠶業……………五九七
- 六 生産要件と一般産業……………六〇〇

第二章 蠶業……………六〇三

- 一 桑の種類と仕立方……………六〇三
- 二 桑樹の分布と新植……………六〇八
- 三 桑園の經濟……………六一〇
- 四 桑葉の賣買……………六一三

第三章 製絲業……………六二九

- 一 器械製絲業の輪廓……………六二九
- 二 製絲業地と用水及燃料……………六三一
- 三 繭の産地と品質……………六三三
- 四 繭買入所と市日取引……………六三七
- 五 繭秤と通貨……………六四〇
- 六 繭取引の實況……………六四三
- 七 繭の相場……………六四五
- 八 上簇……………六四四
- 九 收繭量と農家の經濟……………六二五
- 五 蠶種と蠶の種類……………六二六
- 六 蠶室と蠶具……………六二八
- 七 飼育……………六三一



八	繭の出廻状況	六四八
九	乾繭設備と繭の鹽漬	六五一
一〇	繭の委託買付と上海筋の出動	六五三
一一	繭の課税雜徴及運賃	六五五
一二	一般労働状況	六五九
一三	製絲工の養成	六六二
一四	繰絲時間と勤隋	六六四
一五	賃銀と技倆	六六五
一六	繰絲工の待遇	六六七
一七	日華蠶絲の青島及張店絲廠	六六九
一八	鐘淵絲廠	六七六
一九	周村及青州の製絲業	六七八
二〇	生絲の生産費	六八〇
二一	足踏器械製絲業	六八二

二二	座繰製絲業	六八四
二三	座繰絲の再繰業	六八六
二四	座繰絲及屑物取引	六八七

第四章 北支那蠶業の將來……………六八九

一	山東省の産繭額	六八九
二	蠶業教育及獎勵機關	六九一
三	當業者の蠶業獎勵	六九三
四	關東州の蠶業獎勵狀況	六九六

第四編 四川省の蠶絲業……………六九九

第一章 四川省蠶業の環境及概況……………六九九

一	支那の最大省	六九九
---	--------	-----



第二章 蠶業

- 一 桑の種類と仕立方……………七四三
- 二 巴蜀三峽……………七〇二
- 三 嘉陵江を溯る……………七〇六
- 四 保寧府城……………七一
- 五 綿州より成都に入る……………七五
- 六 蜀の故都……………七八
- 七 峨眉山詣で……………七三三
- 八 産鹽地自流井……………七二八
- 九 一般産業と蠶絲業……………七二九
- 一〇 四川蠶絲業の地位……………七三二
- 一一 斯業の生産要件……………七三四
- 一二 四川省の氣候……………七四〇

第三章 器械製絲業

- 二 桑樹の分布……………七四六
- 三 桑樹の管理と施肥……………七五一
- 四 桑葉の價格……………七五三
- 五 蠶種と其製法……………七五四
- 六 蟻蠶の買賣……………七五五
- 七 蠶の種類……………七五六
- 八 蠶室と蠶具……………七五八
- 九 飼育……………七五九
- 一〇 上簇……………七六一
- 一一 給桑量と收繭量……………七六三
- 一二 桑害と蠶病……………七六四
- 一三 農家の經濟……………七六五



一 沿革……………七六九

二 工場數と其種類……………七七一

三 製絲業地と用水及燃料……………七七五

四 繭の品質と産地……………七七七

五 繭の買入機關……………七七一

六 繭の取引慣習……………七六四

七 殺蛹繭と其方法……………七六八

八 繭の出廻額と其狀況……………七六九

九 繭の相場……………七九二

一〇 繭の買入諸掛……………七九四

一一 繭生絲の厘金税其他雜捐……………七九六

一二 一般勞働狀況と製絲工……………七九八

一三 製絲工の養成……………七九九

一四 操業時間……………八〇一

一五 製絲賃銀と賞罰法……………八〇二

一六 技 倆……………八〇五

一七 年齢及勸惰……………八一

一八 生活狀態……………八二五

一九 日支合辦又新絲廠……………八二六

二〇 支那人經營の日本式工場……………八四

二一 大新鐵工廠……………八七

二二 嘉定の上海式工場……………八九

二三 磁器口の上海式工場……………八三

二四 座繰器械製絲工場……………八三二

二五 生絲荷造と輸出諸掛……………八三八

二六 生絲の生産費……………八四〇

二七 金融と生絲取引……………八四三

二八 製絲家の營業成績……………八四六



第四章 座繰及再繰業

八五〇

一 座繰絲再繰業

八五〇

二 座繰製絲業

八五三

三 屑繭及屑絲

八五四

第五章 四川省蠶業の將來

八五七

一 蠶業教育及獎勵機關

八五七

二 四川省の政情

八六〇

三 交通機關

八六三

四 繭及生絲の生産額

八六六

第五編 南支那の蠶絲業

八六九

第一章 蠶業の環境及概況

八六九

一 香港封鎖

八六九

二 罷業中の生絲貿易

八七一

三 國民政府

八七三

四 民情風物

八七五

五 一般産業と貿易

八七八

六 四水六基

八八〇

七 大造輪月

八八一

八 共撚式繰絲法

八八三

九 原標取引

八八五

第二章 栽桑業

八八八

一 蠶業地域

八八八

二 苗木の産地と作り方

八九五

三 四水六基の制と栽桑法

八九九



四 摘採と施肥……………九〇一

五 魚塘の利用と借地料……………九〇七

六 桑葉賣買と其生産費……………九〇九

七 桑の病蟲害……………九一一

第三章 蠶種製造業

……………九一四

一 廣東蠶の特性……………九一四

二 蠶種製造法と浴種……………九一七

三 蠶種家と蠶種の生産費……………九三三

四 蠶種の賣買……………九三六

第四章 養蠶業

……………九三八

一 蠶室と蠶具……………九三八

二 掃立と給桑除沙……………九三二

三 上簇と殺蛹……………九三四

四 養蠶經濟……………九三六

五 蠶病害と氣象狀態……………九三八

第五章 製絲業

……………九四三

一 器械製絲業の沿革……………九四三

二 工場設備一式……………九四六

三 燃料と製絲用水……………九四九

四 繰絲作業の全班……………九五〇

五 繰絲法の得失及工程……………九五六

六 原料繭の品質及價格……………九六〇

七 繭市場……………九六四

八 繭棧と躉繭棧……………九六九

九 工女の養成と賞罰法……………九七六



一〇	繰絲時間と賃銀	九七九
一一	製絲工女の特色	九八〇
一二	製絲金融	九八三
一三	生産費と原價の採算	九八六
一四	製絲家の資力と營業成績	九九〇
一五	手繰及足踏製絲業	九九三
一六	座繰絲の取引	九九五

第六章 生絲及屑物貿易 ..... 九九八

一	廣東絲の需給	九九八
二	輸出商館	一〇〇〇
三	問屋及ブロカー	一〇〇四
四	生絲の品位及格付	一〇〇六
五	生絲取引慣習	一〇〇八

第七章 南支那蠶業の將來 ..... 一〇二五

六	屑物の整理及種類	一〇二五
七	屑物問屋と輸出商館	一〇二九
八	屑物取引慣習	一〇三二
九	屑物の需要	一〇三三
一	斯業の缺陷	一〇三五
二	嶺南大學蠶桑科及全省改良蠶絲局	一〇三九
三	國立中山大學其他諸機關	一〇四一
四	再繰式の採用	一〇四四
五	廣東絲の生額	一〇三五

第六編 結論 ..... 一〇四一

第一章 支那蠶絲業の現況 ..... 一〇四一



第二章 繭絲價と銀塊相場

一四六

一 支那生絲相場の變動

一四六

二 繭價の騰落

一四八

三 銀相場と絲價

一四八

第三章 日支兩國蠶絲業の關係

一五三

一 日本絲の厭迫

一五三

二 邦人の對支蠶業發展問題

一五三

三 東亞蠶絲組合

一五六

四 生絲輸入稅撤廢問題

一五九

第四章 支那蠶絲業と歐米の關係

一六五

第五章 支那蠶絲業の將來

一六九

附錄

一 上海範圍內器械製絲工場一覽

一七四

二 上海玉絲製絲工場一覽

一八四

三 廣東地方製絲工場一覽表

一八四

四 支那各種生絲相場表

一八九

五 支那外國貿易額と蠶絲類輸出價額

一九三

六 支那蠶絲類と重要輸出品の比較

一九四

七 最近十年各種生絲輸出額

一九五

八 最近十年各種副蠶品輸出額

一九六

九 一九二七年支那生絲開港場別輸出高表

一九七

一〇 一九二七年柞蠶及副蠶品開港場別輸出高表

一九八

一一 支那蠶絲業大觀索引

二〇一



地圖

目次

- 一 蘇浙皖蠶業地圖
- 二 山東省蠶業地圖
- 三 四川省蠶業地圖
- 四 廣東省蠶業地圖

# 支那蠶絲業大觀

上原重美

## 緒言



夙にそが將來を唱へられて來た支那蠶絲業は之を現状から言へば聊か世人の豫測に反して今尙ほ半歩的な動きを見せて居るに過ぎない。けれども依然として天恵に富む支那蠶業は恰も好箇の環境裡に巨體を横へて悠々その將來を語るものゝ如くである。蓋し支那が蠶業の開祖として三千年來の歴史を有するは言ふまでもなく、一方世界に於ける生絲の供給は今日主産國たる日本を除き其の國土の尨大なる或は人口多く勞銀の低廉なる支那を措いて他に求むるを得ない。近時支那蠶絲業が本邦斯業の偉大なる發展に遇ふて遙か後に蹉若たる現状にあるにしても將來此の兩者の距離が如何様に變化すべきやは輕々に豫斷を許さぬであらう。之を既往に於ける斯業の停止的狀態を看て以て簡單に其の將來も亦た爾のみとか或は豊富なる生産條件のみを捉へ、徒に彼の將來懼るべしと言ふが如き對支蠶業觀は固より淺薄皮相の見たるを免れぬ。而かも斯業の將來が世界絹業の消長に關はるからには具に支那各地に互る生産



狀況を究めて能くその真相を闡明し、今よりして斯業の迎るべき歸趨を洞察する事は當然斯界の根本問題であらねばならぬ。

同時に茫乎たる支那蠶絲業の調査研究は蠶業に關し最も堪能にして、且つ一衣帶水の關係に於て文字章句を同うし、思想感情の相通ふ邦人の手に俟つべきである。然しながら調査上に於ける此の便益は動もすれば支那斯業を付度するに自國の尺度を以てするの弊なしとせぬが、特異なる國情風土乃至國民性の基礎に立つ支那蠶絲業と本邦斯業の内容及周境との間に相違點の多々あるは言を俟たぬ。試みに支那史上に言ふ天下統一の如きも畢竟それは王畿に對し地方が貢賦を以てする從屬關係を示すに止まり、所謂眞の和平統一を見たることなく、又た將來之れが實現も容易ではない。斯くて國家と社會とが全然別物に考へられるのが支那の國情である。而かも廣大の版圖に互つて各地諸般の事情を異にし、之を蠶業に關し例へば自然的な氣象に於て南溟廣東地方は全年の雨量三千耗を示すに、北支山東省は僅々四五百耗に過ぎないし、或はまた勞働事情に於て屋外勞働に殆ど男子を凌ぐ廣東婦人と北方の嫗々たる纏足婦人との間に著敷懸隔を見るが如く、個々の生産條件は各地一様に之を律することが出来ない。斯くて各般事物が非統一的にして秩序を缺き、表裏相反する現象を以て錯雜極りないのが支那の現状である。之が爲めに蠶業と言はず一般支那に關する研究は其の度を進む程真相の那邊にあるかを知るに苦しみ、往々不可解の嘆を發するは、要するに微を穿ち細に入るに従ひ、謂はゞ千百個々の枝葉に眩はされて遂に根幹の歸一を見紛ふからである。自然支那蠶業の真相を究むるこ

とは固より容易ではないが、其の調査研究は先づ以て一般産業から政治教育乃至國民の性能等に關する所謂支那の常識を基礎とし、努めて蠶業に關する諸種資料を蒐集し、且つ之を處理解決するに這箇の常識を以てしたならば、誤なきに庶幾からむか、編者の微意も亦た之を努むるに外ならぬ。

## 二

支那に於ける育蠶の行はるゝは各省各縣を通じ之を絶無とは言はぬが、廣大なる版圖に點々極めて濃厚なる栽桑地帯の現出を見る一方、此の地帯を離れては遽かに稀薄となり、殆ど蠶業として特に言ふべきものがない。現時蠶業主要地を挙げれば先づ特色ある廣東絲は密集的なる廣東三角洲を地域とし、蘇洲の蠶業は太湖を中心とする一圓に纏まり、湖北省に至つては漢水流域にその發達を見る。更に四川省の蠶業と言ふも、それは嘉陵江及岷江の流域に限られ、北支那は山東省に於て瀾河の流域に集中するといふが如く、多少共世界生絲の需給に關係ある蠶業地は上記數指を屈するに過ぎない。此の現象は支那蠶絲業の看過すべからざる特徴といふべく、之を本邦斯業の殆ど津々浦々まで普遍的なるとは大にその撰を異にし、詰りこれまで支那蠶絲業が短期間に急激の發達を遂げ得なかつた一因は這裡の事情に胚胎するものである。蓋日支兩國蠶絲業の發達徑路を見るに、言ふまでもなく我國蠶業は既に舊幕各藩に於て夫々産業の自足策として育蠶の業を認められて居たことが一躍國を擧げて今日の繁榮を見るに至つた前提



である。然るに地大物博を唱ふる支那は古くより交通よく開け、所謂南船北馬を以て交易繁く、各地互に有無相通するに缺く所がなかつた。自然各地産業は古來夫々その適する特産の業を以て發達を遂げた。蘇綢杭緞といひ、浙茶といひ、蜀の藥材といひ、或は廣貨といふが如く、其の特産品は支那全土何處の店舗にも之を求め得る。されば此間蠶業の如きも數十年の間に江山の爲す自然の環境其他條件が育蠶に最も適當なる地方を選びて特産的發達を告げたのである。即ちこれが點々濃厚なる蠶業地帯の横はる所以であつて、子々孫々傳來の衣鉢を繼ぎ、其の術は粗笨ながらも後年生絲輸出貿易の發展に伴ふて座繰絲より器械製絲業へと進みつゝある。けれども未だ此の地帯を離れては假令蠶業の好條件を備ふるにしたところで、特に力を加へざる限りは假りに無經驗者に蠶種と桑を與ふるも、彼等の技能は直ちに繭を作り得ないのが現状である。畢竟支那蠶業は未だ局部的な謂はば特産的産業の域を脱しない。

## 三

支那蠶業が新なる躍進を期するには所謂特産的蠶業より轉じて普遍的に國民産業の域に進まねばならぬが、之か爲めにはその恵まれたる土地勞力及氣候の自然的生産要件と之を利用厚生すべき政治經濟及國民性等の人爲的要件とが良く整調を保たねばならぬ。然るにこの兩者の要件は寧ろ相背馳するのが支那現下の状態である。段、曹、張、吳の争から引續き殆ど寧日なき動亂は假令其の直接的被害が戦線區域に限るとしても、之より起る苛斂誅求、制度の紊亂が斯業

の發達に多大の障害を與へつゝあるは今更ら言ふまでもなく、況や教育といひ交通といひ金融といひ一つとして悲觀的材料たらざるを得ぬ。同時に國民性の改善も容易ではない。故に是を以て論ずれば支那斯業は目覺しい活躍を近き將來に期し難いであらう。然しながら考慮すべきは支那全土に蠶業が普及して所謂國民産業にまでに到らなくとも、其の前提として現存數個所の蠶業地帯か面目を一新するのみでも生絲産額は今より之を倍蓰するに敢て困難ではない。その遠く由來する現存地帯の蠶業が業態の古臭紛々たるにも拘らず、動亂を始め幾多の障害に抗して尙且つ緩慢乍ら進展しつゝあるは反面斯業が極めて確實なる基礎に立つを語るものである。試に現時繭絲の生産狀況に於て、例ば蠶種一枚に對する收繭量は我國の殆ど一半にも満たぬし、また繭より得る生絲量に於て優に一二割方は劣る。斯く育蠶製絲の技術は甚だ低率なるに尙よく日本絲に伍して銷路を争ひ得る所以のものは畢竟生産要件が頗る潤澤なからである。故に若しも前者の生産率が多少共向上するに於ては斯業の發展は期して俟つべきものがある。勿論之には曩に數ふる幾多の條件や主産國日本及歐米市場の關係に因るべきであるが、假りに政情其他條件には頓着なく唯近時漸く曙光を認めむとする蠶品種の改良、夏秋蠶の勃興を始め其他一般技術の改良進歩が相當の効果を擧ぐる曉には顯著なる増産を期待し得るであらう。

## 四



要するに支那蠶絲業に對する觀察は現時の蠶業地帯に於ける改良と、此地帯より全土への普及状況の如何を主眼に諸般生産状況を明にすべきである。而して之れが調査研究に當つては複雑極りなき各地の千態百狀を斷面的に集むるのみで、各地帯個々の一貫せる業態に就いて見る所がなければ、所謂群盲象を摸するの類を免れぬ。それは支那蠶業が前述の如く數個所の蠶業地帯に分たれ、夫々獨異の基礎に立脚して特色ある發達を遂げ、その間毫も聯絡がないからである。即ち支那斯業は之を(一)上海を中心とする蘇浙皖三省(二)漢口を中心とする湖北省(三)重慶を中心とする四川省(四)青島を中心とする山東省及(五)廣東を中心とする廣東廣西兩省等に於ける各地方蠶業の集合體と言ふべきである。而して廣東絲は品質劣惡にして世界生絲の最低位にあるも、その弾力性と廉價を以て特色とするに反し、上海絲は世界生絲の最高級たる地位を占め、それから湖北四川及山東省は黃繭絲を主とし、是等後者三省の蠶業はその起源最も古く、所謂黃河文明期に胚胎して諸般事情に幾多の共通點を認むるが故に、之を一系統と看做して差支ない。即ち支那蠶業は大體上記の三系統鼎立の姿にあつて、各その適從する所を異にするを以て之を中部支那、北支那、西部支那(四川省及南支那の各編に分ち、以下各地帯の生産状況を詳述すべし)も、試みに卷頭各地蠶業の特色を明にすれば次のやうである。

上海地方

蠶業範圍 江蘇浙江安徽三省、面積十三萬方哩、人口五千一百萬人

黃繭を主とする地方

四川山東湖北三省、面積三十四萬五千方哩、人口七千六百萬人

廣東地方

廣東廣西兩省、面積十七萬七千方哩、人口三千四百萬人

蠶業規模

農家の主業の一にして養蠶は大部分春蠶とす。

純然たる副業にして女子之に當り春蠶一期に限らる。

專業的にして男子の本業、年七八回に互り飼育行はる。

栽桑狀況

高刈又は中刈仕立にて純桑園

純桑園なし、畑に間作或は畦畔路傍の利用による立木通し

根刈にして純桑園

蠶品種

春蠶は白繭一化性四眠蠶を主とし夏蠶は二化性三眠蠶を用ふ

黃繭一化性にして、湖北は四眠蠶、四川山東は三眠蠶なり

白繭多化性、四眠蠶なるも飼育日數十六日に過ぎず

繭取引

繭行なる特設機關により養蠶家は搔放しの儘賣却する故玉蠶及屑繭一割五分乃至三割を混入す

市日による露天取引多し、上海地方と共に養蠶家は繭を賣るものと自ら座繰するものとあり

買賣口錢を目的とする繭市場に於てし養蠶家は自ら殺蛹して賣却す。その乾燥程度五七分乾見當

器械製絲業の起源

明治十一年佛人ブルウナ氏相傳の製絲法を踏襲す

上海式製絲法及日本式製絲法の兩者を移植す

佛人製絲法を利用し、之に支那人の獨創を加へたるもの

製絲工場及釜數

昭和二年度一、二八箇工場、三三、六六〇釜

大正十五年度三二箇工場、七、五二六釜

大正十五年度二〇二箇工場、九五、二一五釜

製絲法及能率

直繰式、索繰分業、ケンネル、六口繰、一釜繰目平均一日百匁見當、製絲工は女工

上海式三口繰及日本式、一日繰目六七十匁、男工及女工併用

直繰(歐州向)再繰(米國向)煮繰同一釜を兼用、共撚式二口繰、一日繰目四五十匁、女工を用ふ



生絲品位及需要先

普通細十止より二十五中位までの間に各種隨意、歐米向相半す

殆と十四中、稀に十二中もあり大部分歐州向とす

歐州向十四中に少許十二中を加ふ米國向十五中を主とし廿一中及廿四中を加ふ、歐米向相半す

生絲價格

日本絲最優價格より普通百圓高前後のもの多し

多くは日本絲黃石最優三四十圓高のものに相當す

普通日本絲最優格より百圓乃至百五十圓安のもの

第一編 總論

第一章 產額、輸出及國內消費額

一 繭絲の生産額

苟且にも世界第二位の蠶絲國たる支那の生産額を確むるは斯業調査の一目的にして且つ世界に於ける生絲の需給狀況を明にする爲めには必要なことであるが、果して其の産額の實數が幾何あるか恐らく何人と雖も確信ある統計を擧げ得ないであらう。それは支那の人口を今も昔も四億と唱ふると同様に漠然として居る。從來産繭額に就いて暫々引用さるゝ彼のジルベルマン氏の推定の如き今を去る約三十年前の發表に係はり、而かもどの程度の踏査を遂げ、如何なる推定法を採りたるかは之を知るに由なく、今日その推定數に幾何の價値を伴ふかは甚だ疑なきを得ぬ。然し之を除いては支那官府の調査の如き是ありとするも多くは空虚なる數字の羅列に過ぎぬし、或又民間支那當業者の所説も往々多年の經驗よりして價値ある數字を聞くことあるも、兎もすれば支那流の無稽なる説に誤られ易い。其他年により地方により豊凶の差甚しく、或は動亂匪賊による變化等が其の推定を困難ならしめて居る。其間支那海關のみは輸出



品に對し悉く課税する關係からその發表する蠶絲輸出統計は唯一つ相當信據するに足る材料である。故に海關統計を根據に各地生産狀況を按配して難解なる生産額に推定を試みる外はない。就中副産品たる屑絲屑繭は國內に消費さるゝ道に乏しく、其の大部分は海外に輸出され、上海屑物市況は遠く千數百哩を離れて四川の山奥にも直接反響を與へ、或はまた生絲の輸出を見ない地方からも屑絲は出廻る狀況に見て此の輸出額より繭絲の生産額を推定するは確かに有力なる一方法たるを失はぬ。然し一概に屑絲といふも廣東から輸出するは大部分水結といふ生皮苧を以て占むるに反し、四川産の繭巴と唱ふものゝ如きは蛹から揚繭、生皮苧等一切の殘物を含むやうに、各地方によりその内容を異にするを以て屑物量より生絲量を算出すべき換算率も當然之を斟酌せねばならぬ。要するに支那繭絲の産額推定に當つては適宜地方の事情によりその最も妥當とする方法を探り、斯くて之を綜合することが、確數を期するに近いであらう。即ち此方法に従ひ各省産額の推定を試むるに次のやうである。

一 浙江省 生繭一、一四〇、〇〇〇擔 生絲八九、〇〇〇擔 浙江省は所謂七里絲を以て座繰製絲業の本場にして且つ上海器械製絲業の繭市場なるか故に、その産額は此の兩方面より觀察すべきである。

イ 絲繭公會調査による浙江省乾繭出廻額は一九二五年五八、〇〇〇擔、一九二六年九四、五〇〇擔及一九二七年一一、〇〇〇擔を示し、其平均額は八七、八三三擔である。

ロ 一九二五年浙江省財政廳の繭稅實額は七九二、五〇〇元を示し、繭稅は乾繭百斤に付十二元なれば、之に對する、乾繭出廻額は六六、〇〇〇擔なるを知る。

ハ 前二者より見て最近繭出廻額は乾繭八〇、〇〇〇擔生繭二四〇、〇〇〇擔と推算すべく絲量は生絲百斤に乾繭折頭五百七十斤の換算を採る時は器械絲は一四、〇〇〇擔となる。

ニ 座繰絲産額に就き座繰生皮苧(蠶吐)年産額は九、〇〇〇擔を示し、其の生産率は湖州七里絲百斤に對し蠶吐七斤半、海苧絲十斤及一般肥絲(粗絲)十五斤の割合にして、其の平均率を十二斤と看做せば座繰絲産額は七五、〇〇〇擔の推算を得、之に對する生繭量は座繰絲一斤に對し十二斤の割合と見て其の換算生繭量は九〇〇、〇〇〇擔となる。

一 江蘇省 繭五四五、〇〇〇擔 生絲三〇、五〇〇擔 近時江蘇省は無錫製絲業の發展に伴ひ繭市場は年々發達しつゝあるが、尙ほ南京及江北地方に座繰業の行はるゝを見る。

イ 絲繭公會調査による乾繭出廻額は一九二五年一一三、〇〇〇擔、一九二六年一三六、五〇〇擔及一九二七年一八一、五〇〇擔にして其平均額は一四四、〇〇〇擔(生繭四三二、〇〇〇擔)を示し、之に對する絲量は折頭六百斤として換算器械絲産額は二四、〇〇〇擔である。

ロ 無錫を中心とする地方の夏秋繭産額は乾繭二二、五〇〇擔(生繭六七、五〇〇擔)と推定し、絲量は折頭七百五十斤として換算器械絲産額は三、〇〇〇擔となる。

ハ 座繰絲産額を屑物より推定するに無錫宣興地方の座繰生皮苧(零巾)出廻額は一、〇〇〇擔、江北地方に於ける巾子及大尾等三、二〇〇擔、計四、二〇〇擔にして此の生絲百斤に對する生産率を百二十斤と看做す時は座繰絲は三、五〇〇擔の推定である。之れか生繭量は座繰絲一斤に對し生繭十三斤として生繭額四五、五〇〇擔となる。

一 安徽省 繭 九七、一〇〇擔 生絲五、七〇〇擔 安徽省は近年繭市の新場所として發達著し



く、且又反車絲を始め座繰絲の生産を見る。

イ 最近安徽省の乾繭移出高は蕪湖口より一、二、〇〇〇擔、大通口より一、三、〇〇〇擔の割合を以て計乾繭二五、〇〇〇擔(生繭七五、〇〇〇擔)を示し、絲量は折頭六百二十斤として其の換算器械絲は四、〇〇〇擔に達す。

ロ 座繰絲に對しては其の屑物移出高は涇縣狗尾を始め屑絲屑繭約二千擔を示し、之を生絲百斤に屑物一一五斤の割合を以てすれば座繰絲推定額は、一、七〇〇擔(生繭二二、一〇〇擔)である。

一 湖北省

繭 一、二、九〇〇擔 生絲九、二〇〇擔 湖北省漢水流域は繭市として開拓されて年々活氣を呈すに至れるも、今尙ほ印度向座繰絲の生産は旺盛である。

イ 漢水流域に於ける繭出廻額は年により乾繭四、〇〇〇乃至六、〇〇〇擔の間にあり、其の平均額乾繭五、〇〇〇擔(生繭一五、〇〇〇擔)と看做し、絲量を折頭五百五十斤とすれば換算器械絲九〇〇擔である。

ロ 漢口港より輸出する座繰絲の最近五箇年平均輸出額は七、一六〇擔を示し地方消費を二割と看做す時は座繰絲産額は九、〇〇〇擔である。

二 漢口港より輸出する屑絲及屑繭平均輸出額は一、三、〇〇〇擔にして此の七割九、一〇〇擔を湖北省産と看做し、之に對し生絲百斤より屑物生産量を百二十斤と見る時は座繰絲産額は七、五〇〇擔の推算となる、仍つて之を前項口の數字と平均を採れば座繰絲産額は八、三〇〇擔(生繭一〇七、九〇〇擔)である。

一 河南省

繭 四、二、九〇〇擔 生絲三、三〇〇擔 河南省は殆ど全部座繰絲を産し、其の過半は地方消費となるも其の屑物のみは漢口に仕向けられて輸出さるゝか故に、之より推算する外はない。

當業者の見る所によれば漢口屑物輸出額一三、〇〇〇擔の内その三割三、九〇〇擔は河南産に係るといふ。故に之に對する生絲百斤の屑物生産量を百二十斤として換算すれば座繰絲産額は三、三〇〇擔(生繭四二、九〇〇擔)となる。

一 山東省

繭 一、〇、〇〇〇擔 生絲七、五〇〇擔 近時山東省に於ける器械製絲業の發達は漸次座繰絲の生産を減少せしめつつあるが、今尙ほ周村機業を中心に座繰絲業は若干對抗の勢を示して居る。

イ 一九二五年山東省當局調査の各縣産繭額は生繭一一六、二四〇擔を示し、また民間當業者の看る所によるも全省産繭額は一千萬斤を若干も出でぬといふが故に、之を生繭一一〇、〇〇〇擔と看做して大過ない。

ロ 前項産繭額の内繭出廻額は例年六五、〇〇〇擔(乾繭二一、六六〇擔)を示し、其の絲量を折頭五百四十斤と看做せば換算器械絲(小錠絲を含む)は四、〇〇〇擔である。

ハ 前項繭出廻額を差引ける四五、〇〇〇擔は當然座繰絲なるを以て生絲一斤に生繭十三斤を要するものとすれば座繰絲三、五〇〇擔の推定となる。

一 山西省

繭 六、五〇〇擔 生絲五〇〇擔 山西省よりは生絲の輸出を見ざるも先年踏査せるに省内到る所に育蠶を實見しその南部高平縣の如き座繰絲の市場である。故に其の生産額を前記の如くに推定した。

一 四川省

繭 四六八、〇〇〇擔 生絲三五、〇〇〇擔 四川省は支那の主要蠶業地にして近時器械製絲業の發達は顯著なるものあり、一面廣汎な地積に互つて座繰絲の生産があり、その一半は成都及嘉定の機業地に消費されて居る。



イ 四川省重慶及萬縣の生絲輸出額は平均器械絲六、五〇〇擔、座繰再繰絲一、五〇〇擔及座繰絲七〇〇〇擔合計一五、〇〇〇擔を示し、之に對し一般にいふ四割五分輸出説を採れば生絲産額は三三、三三三擔の數字となる。

ロ 重慶萬縣より輸出さるゝ屑物は屑絲一五、〇〇〇擔、屑繭二〇、〇〇〇擔合計三五、〇〇〇擔にして更に同省は棉花に乏しきを以て省内眞綿原料に消費さるるものを前者の一割五分と看做して之に加算すれば屑物總産額は四〇、二五〇擔となり、之より生絲百斤に對する屑物生産量を器械絲共平均一一五斤として換算すれば生絲産額は三五、〇〇〇擔となる。

ハ 前項生絲産額三五、〇〇〇擔の内器械絲六、五〇〇擔に對する原繭量を折頭五百斤と看做す時は乾繭三二、五〇〇擔(生繭九七、五〇〇擔)にして殘餘の座繰絲二八、五〇〇擔に要する生繭量を生絲一斤に對し十三斤とすれば其の生繭額は三七〇、五〇〇擔となり、此の兩者を合せて産繭額は四六八、〇〇〇擔と見らる。

一 廣東省 繭一、〇五七、四〇〇擔 生絲六六、五〇〇擔  
 一 廣西省 五五、六〇〇擔 三、五〇〇擔

廣東三角洲を中心とする蠶業は西江を傳ふて廣西省に延長し産繭は殆ど皆器械生絲の原料に充てられ、座繰絲は言ふに足らぬ。而して廣西省の産額は總額の百分の五と看做しこの割合により兩廣の産額を分つを至當とするであらう。

イ 廣東港より輸出する生皮苧(水結)の最近五箇年平均輸出額は四五、六六〇擔にして之に水結布其他用途に消費さるるもの前者の一割と看做して加算する時は生皮苧總産額は五〇、二二六擔となる、而して生絲百斤當り生皮苧の生産割合は平均七十斤なるを以て、之より換算する生絲は七一、七

五〇擔を得。

ロ 最近五箇年間に於ける廣東輸出額は四九、二〇〇擔(八十斤入六一、五〇〇擔)依産額の七割が輸出さるものとすれば産絲額は七〇、〇〇〇擔である。

ハ 蠶業關係機關の調査に係る桑園面積は一二八千畝にして之より生産する殺蛹繭は四二一、五〇〇擔といふ故に生絲百斤に要する殺蛹繭を六百斤とすれば換算生絲産額は七〇、二五〇擔を得。  
 ニ 前三項を綜合して生絲産額は七〇、〇〇〇擔と看做すを近似數といふべく、之に對する繭量を折頭五百三十斤とすれば其の生繭量は一、一三、〇〇〇擔を示す。

一 福建省 繭三、九〇〇擔 生絲三〇〇擔 福建省は將來蠶業地として見込ある一省にして最近福州より僅少乍ら上海へ乾繭の移出さるるあり、又廣東省に接壤する地方は廣東市場の範内に入るべき傾向を持つて居る。

イ 福州より上海に送らる乾繭の最近平均年額は年三〇〇擔(生繭九〇〇擔)その換算器械絲は五〇擔である。

ロ 福州より輸出する福建蠶吐を始め屑絲輸出額は一五〇擔その生産率を生絲百斤に對し六〇斤と看做す時は座繰絲二五〇擔(生繭三、〇〇〇擔)である。

一 其他諸省 繭一三、〇〇〇擔 生絲一、〇〇〇擔 前記各省を除く地方には若干養蠶は行はれて居るが、然し千里の曠野に零碎なる生産があるにしても、それは空しく地方に消費されて商業的に何等見るべきものがない。是等諸省としては江西、湖南、貴州、雲南、直隸、陝西及滿洲等を擧ぐべく、其の産額は一省多くとも二百擔を超ゆるものなきか故に、之を大輪に生絲一千擔と看做し斯くて各省産額を綜合すれば左表の通りである。



各省繭及生絲推定産額

單位「擔」

省名	生繭産額	生絲産額	氏の産繭額
浙江	一、一四〇、〇〇〇	八九、〇〇〇	一、〇一七、〇〇〇
江蘇	五四五、〇〇〇	三〇、五〇〇	三五〇、〇〇〇
安徽	九七、一〇〇	五、七〇〇	三〇、〇〇〇
湖北	一二二、九〇〇	九、二〇〇	一〇二、〇〇〇
湖南	四二、九〇〇	三、三〇〇	二五、〇〇〇
河南	一一〇、〇〇〇	七、五〇〇	一四二、〇〇〇
山東	六、五〇〇	五〇〇	四五、〇〇〇
山西	四六八、〇〇〇	三五、〇〇〇	三一七、〇〇〇
福建	三、九〇〇	三〇〇	—
廣東	一、〇五七、四〇〇	六六、五〇〇	七一七、〇〇〇
廣西	五五、六〇〇	三、五〇〇	—
其他	一、三〇〇〇	一、〇〇〇	七二、〇〇〇
合計	三、六六二、三〇〇	二五二、〇〇〇	二、八一七、〇〇〇
和貫換算	五八、五九六、八〇〇貫	四、〇三二、〇〇〇	四五、〇七二、〇〇〇
昭和二年日本産額	九一、一一九、二〇七	九、一五九、六四八	—

(註) 支那生絲産額か其の繭産額に比し過少なるは繭の絲量と製絲法によるものにして、生繭百匁當りの生絲量は之を平均座繰絲に於て凡そ七匁七分、器械絲は僅に五匁七分五厘に過ぎぬからである。

而して之を前表に就いて生絲が輸出向として世界生絲の需給に關係ある廣東、上海及黃繭地方を數量別に見ると左表のやうである。

産繭額 (千擔)	生絲産額 (千擔)	生絲に對する割合 %
上海 圈内 (蘇浙皖)	一、七八二、一	一二五、二
廣東 圈内 (廣東廣西)	一、一一三、〇	七〇、〇
黃繭 絲圈内 (四川山東湖北)	七〇〇、九	五一、七
其他 地方	六六、三	五、一

更に前記支那生絲推定額を世界産額に對比するに左表の如く第二位にあつて總額の二割七分を占めて居る。

世界生絲産額 (千擔)	百分比 %	
歐洲	七八、八	八・五
近東諸國	一五、二	一・六
印度	九、七	一・二
支那	二五二、〇	二七・一
第一章 産額、輸出及國內消費額	—	—



(註) 農林省統計及蠶絲中央會統計に據る。

### 一一 生絲輸出額

古來絲茶は支那貿易品として知られ近時滿洲其他より荳類の輸出が擡頭せるも今尙ほ生絲は支那輸出品の第一位に在り、之を一九二七年支那輸出貨品金額九億千八百六十一萬兩に對し蠶絲類輸出品金額は一億四千十六萬兩を示して總額の一五・二六「パーセント」を占め、生絲が輸出の大宗たるは本邦と同様である。而して生絲輸出額は日清戰役前後に於て既に九萬六千擔を示せるに拘らず、最近に至るも依然十萬乃至十三萬擔の間に彷徨して居るに過ぎない。けれども其の内容を見る時は器械絲輸出額は健實なる發達を示し、之れが増加は販路の歐米市場に集中する傾向を語るものにして、矢張り支那斯業は進みつゝあるものと見るべきである。

#### 支那生絲輸出の趨勢

年次	座繰絲	器械絲	計	總額に對する器械絲の割合	日本絲輸出額擔
自明治一三年至一七年平均	五八、七九四	三、七二一	九六、〇〇七	三五、〇一	五四、八六九
自一八年至二二年平均	四五、〇〇五	四五、四〇七	九〇、四一二	五〇、二一	七六、七六一
自二三年至二七年平均	四一、一七〇	四八、四八九	八九、六五九	五四、〇八	一〇三、九四二
自明治四三年至四四年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	一四八、四六一
同 四三年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	一四四、五六〇
同 四四年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	一七一、〇二五
同 四五年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二〇二、二八六
同 四六年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	一七一、四八七
同 四七年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	一六七、五六三
同 四八年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	一七八、一四一
同 四九年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二一七、四一九
同 五〇年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二五八、二八九
同 五一年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二四三、四四四
同 五二年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 五三年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 五四年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 五五年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 五六年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 五七年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 五八年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 五九年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 六〇年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 六一年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 六二年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 六三年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 六四年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 六五年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 六六年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 六七年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 六八年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 六九年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 七〇年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 七一年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 七二年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 七三年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 七四年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 七五年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 七六年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 七七年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 七八年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 七九年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 八〇年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 八一年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 八二年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 八三年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 八四年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 八五年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 八六年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 八七年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 八八年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 八九年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 九〇年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 九一年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 九二年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 九三年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 九四年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四
同 九五年	四四、〇三三	六〇、九七〇	一〇七、〇〇三	...	二八六、二二四
同 九六年	四五、九五四	六三、一三九	一〇九、〇九三	...	二八六、二二四
同 九七年	三五、二七五	六八、二八六	一〇三、五六一	...	二八六、二二四
同 九八年	三四、四八一	七三、一〇三	一〇七、五八四	...	二八六、二二四
同 九九年	三二、一七九	六四、一八七	九六、三六六	...	二八六、二二四
同 一〇〇年	四一、四六八	九〇、〇三八	一三一、五〇六	...	二八六、二二四

#### 第一章 産額、輸出及國內消費額



同	十	二	年	二九、七五七	七七、四七〇	一〇七、二二七	……	二六三、二八〇
同	十	三	年	二七、六五六	八一、〇四七	一〇八、七〇三	……	三七二、九六四
自大正	九年	五ヶ年平均		二八、一七七	七八、二五八	一〇六、四三五	……	二八三、三八六
至	一三年	五ヶ年平均		三〇、一四	一〇三、二八九	一三三、四〇三	……	四三八、四四九
大正	十	四	年	二八、二五七	一〇七、二七九	一三五、五三六	……	四四二、九七八
同	十	五	年	三〇、七六七	一〇一、八八九	一三二、六五六	……	五二一、七七三
昭	和	二	年					

即ち支那絲輸出額は依然一高一低を繰返し乍らも器械製絲業の發展により年々其の内容を改めつゝあるが、更に斯業が孰れの地方に於て最も發達せるかを窺ふに世界大戰に伴ひ廣東絲の進出は相當見るべきものあり、同時に四川、山東省等の新場所に於ては稍急進的に座繰絲より器械絲に轉換しつゝある。加ふるに最近上海絲が一躍せむとするの趨勢にあるは左記統計の示す通りである。

各地方器械絲増加の趨勢

大	正	六	年	二九、六一八	五、八四九	三八、九五一	……	七四、四一六
同	七	年		二七、三六一	四、六一四	三三、四五七	……	六五、四三二
同	八	年		三七、四五二	四、三八八	四四、九九二	……	八六、八三二
同	九	年		二一、五九〇	四、九四二	三二、一六四	……	五八、六九六
同	一〇	年		二九、三一二	六、七六八	四八、七九四	……	八四、八七四

轉じて支那生絲の輸出先を見るに日本絲がその九割五分を米國に輸出する狀況に反し、支那絲は廣く各地に販路を持ち、之を歐洲米國及近東向の三者に分つに世界大戰後對米輸出の進出を見るも、支那絲需要の自然的傾向は歐洲向を主眼とするものゝ如くである。

支那生絲歐米及近東向輸出比較表

同	一	年	三〇、三六六	六、六五〇	五二、九六九	……	八九、九八五	
同	一	年	二五、三八〇	九、六三八	四三、一五三	……	七八、一七一	
同	一	年	二八、〇三二	九、四五七	四五、七四六	……	八三、二三五	
同	一	年	四〇、八七五	一〇、八二九	五三、四八二	……	一〇五、一八六	
同	一	年	四〇、七九五	一二、四〇三	五二、〇八八	……	一〇五、二八六	
至	自	明治四二年	三箇年平均	六四、二二二	三〇、七六〇	一五、四三三	……	一一〇、四〇五
至	自	大正四年	五年平均	五六、一六五	四一、〇四五	一九、〇一〇	……	一一六、二二〇
大	正	六	年	五八、八一三	三八、八二八	一四、〇三一	……	一一一、六七二
同	七	年		四八、六一五	四〇、五一五	一三、四四〇	……	一〇二、五七〇
同	八	年		五一、〇七八	七五、二四五	二六、三八三	……	一四二、七〇六
同	九	年		二七、五八五	四七、一六八	一三、六三四	……	八八、三八七



同	一〇一一年	三五、一五八	五七、四九二	一三、五六〇	一〇六、二一〇
同	一一一二年	四六、一九五	六九、九〇八	一四、七〇八	一三〇、八一
同	一二一三年	四七、八五九	五九、七六九	一四、〇一八	一二一、六四六
同	一三一四年	六二、七七二	五二、五〇一	一二、二六九	一二七、五三二
同	一四一五年	六九、五一六	五八、二八五	一五、四〇六	一四三、二〇七
同	一五一二年	六三、八七六	六九、三八七	一四、四九五	一四七、七五八
昭和	二一三年	七二、二六八	五六、七九二	一九、四七〇	一四八、五三〇

(註) 海關統計は廣東絲の輸出先を香港に一括し内容不明なれば本表は廣東及上海外人生絲協會の報告に據り廣東絲は一俵八十斤入とす。

前表歐洲向は英佛伊瑞及西班牙諸國に分たれ更に近東向に至つては英領印度、土斯古、エジプト、ペルシヤ及海峽植民地等に互つて居る。這は一面支那生絲が多種多様なからで、試に生絲種別による各輸出先の情勢を窺ふに左表を以てするであらう。

支那各種生絲歐米及近東向比較

大	年	廣 東 絲		上 海 器 械 絲		七 里 絲		黃 浦 器 械 絲		黃 浦 座 線 絲	
		歐洲米國向	近東向	歐洲米國向	近東向	歐洲米國向	近東向	歐洲米國向	近東向	歐洲米國向	近東向
同	七一年	一七、四七三	一六、〇九七	一〇、〇九一	一四、〇七〇	一五、五〇九	八、八三二	三、三〇二	四、九	二、〇九	
同	八一年	二四、七六四	二、五八	一一、七二七	三、七二二	七、五二九	六、八二二	三、三六	五、〇四	一、〇〇二	
同	九一年	三〇、三六八	一七、〇三二	一七、七四七	一〇、八八三	七、六五九	九、八七二	二、三七五	四、〇二六	一、九六八	
同	一〇一一年	二二、九八四	八、三	二二、九九六	一一、〇四六	六、二五三	三、九四一	八、八九	一、四六四	二、一、四八一	
同	一一一二年	一八、五八四	三、三	一五、三四七	二、五五一	五、八五九	五、八二二	五、五二	二、五二	一、〇〇	
同	一二一三年	一八、五八	三、六	一六、七〇三	一四、三四八	四、五五三	六、七二	三、五五四	六、八四三	九、三三	
同	一三一四年	三〇、五二	三、〇、四二	一七、五〇九	一五、七三	三、〇	六、三四八	五、〇八三	一、四〇	七、三九	
同	一四一五年	三三、四〇三	三、八〇三	一九、九一五	一七、七三	一、四	四、二六三	六、七四	二、八九	八、三九	
同	一五一二年	二八、八三三	三、七	三〇	三二、四四三	三、三七	二、六二	四、九五	六、三	三、三五	
昭和	二一三年	二六、六三	三、四〇	二八、三三四	三、七五八	九、九三	五、五八〇	五、七	一、八、五五	九、六九	

三 國內消費額

前項支那生絲推定産額二十五萬二千擔に對し最近輸出額は十二萬二三千擔なるを以て差引殘額凡そ十二萬擔は當然國內消費と見るべきである。左すれば支那生絲輸出額は全産額の五割五分に當り、此の比率は從來唱ふる所の四割五分輸出説を破つて幾分とも輸出額が其の國內消費の上にあるを語るが、此點に關しては現時の蠶業地が孰れも輸出向を主眼に動いて居る状況に見ても、之を肯定し得るであらう。蓋綢緞は國人の衣服に對する欲求の標的たるが故に、生絲消費額の甚だ大にして且つ將來に旺盛なる消費力を持つべきは察するまでもない。けれども從來國內消費に對する觀察は之を過大視する嫌がなかつたであらうか、其の主要都市を覗くものは上下を通じ廣く絹物を着服せるに驚くであらう。然しながら絹物の需要は主として都



會地に限られ其の消費者は上中流を始め商人階級に止まり、未だ人口の八割を占むるといふ農民階級が柔かい一張羅を持つやうになる迄にさへ前途甚だ遠しと言はねばならぬ。中には廣東及四川省から生産される絹布に塗料を以て雨衣の如くせる油布は夏季長江及南支一帶の苦力船夫等労働者の間に廣く着用されるを見て、生絲の消費は労働者に及ぶといふものもあるも油布は主として廢絲及屑絲等を利用せる特殊品に過ぎない。要するに人口多くして且つ國人の絹物に對する愛好は甚だ深きものがあるが、一般經濟狀態よりして其の消費は未だ本邦の如くに普遍的ではない。是を以て支那に於ける生絲國內消費は假りに我國消費量を超ゆるとしても多くを出でないであらう。

而して國內消費に對する推定を試むるに、之れが根據を缺くも全數の過半が蘇浙兩省に於て消費されることは疑ひない。即ち寧綢杭緞は蘇浙隨一の特産品にして古來その杭州蘇州及南京は歷朝宮庭の御用達を受け所謂官織を以て有名であるが、就中最近杭州は近世機業の體を整ふるに至り、舊式手織器千臺及力織器ジャカート六千臺を算し、緞子熟貨の製造を主として年額生絲二萬擔の消費は確かである。之に次いで最近勃興せる盛澤の機業は盛綢生貨を以て聞え、また湖州は古來湖縐縮緬の名高く、最近此の兩地方には本邦より輸入に係る提花器と呼ぶ織機の運轉多く、其の數は盛澤の八千臺、及湖州一帶一萬數千臺を算し生絲消費年額は概算二萬擔を下るまい。之を浙江省財政廳の省内消費生絲に對する徵稅額から見ると、同省生絲消費額は約四萬擔に當るといふ。轉じて江蘇省に於て蘇州を始め南京其他の機業は浙江省の如く著しく近代化せざ

るも上海又は蘇州には物絲葛羽二重其他を製造する新式工場の設定するあつて、之を江蘇省の消費額は二萬擔と看做して大差なかるべく、蘇浙を通じて生絲消費額は大約六萬擔を下らないであらう。斯くして蘇浙の綢緞は長江流域を始め南北支那一帶に之を供給し、支那絹物界を風靡して居るのである。蘇浙に次いで古來蜀錦を以て聞ゆる四川省の機業は成都及嘉定を主要地として其他順慶璧山各地に製織を見るが、依然舊來の方法により其の製品は下流筋には出ない。然し絹物は廉價を以て省内需要を満たすのみならず、之を雲南甘肅其他隣省に移出し、四川省に於て生絲消費は同省輸出量を除く概算二萬擔と見らる。それから魯縞の名ある山東省の機業は周村鎮に於て手織器約三千臺、その全運轉を見たならば一日生絲消費は二十餘擔を算し北支一帶を販路として居る。大體支那に於ける機業地と言へば上記數省を擧ぐべく、其他廣東省の佛山鎮、湖北省の荊州及河南山西省其他に家內的機業を見るも、是等は僅に地方の需要を満たすに過ぎぬ。隨つて支那生絲國內消費額は前述の如く之を十二萬擔と見て大過ない數字であらう。

畢竟國內消費に對する觀察は將來に旺盛なる消費力を擁するが故に、是が生絲輸出の將來に如何なる影響を及ぼすかにある。此の點に關し或者は假令將來支那産絲額が増加しても、國內消費の増進を來すから輸出額はそう殖えまいと看るものがある。然しながら茲に考慮すべきは先づ第一に支那機業の命脈は低廉なる座繰絲に糧道を求むる點にして其の最も優良なる七里絲と雖も之を本邦の玉絲値段と殆ど大差はない。延いて絹物の廉價なるは論を俟たぬ。そ



して之が爲めに例へば蘇浙地方に於ては繭相場と座繰絲相場との間に劇甚なる接觸を見るが、大勢から見ても座繰絲は器械絲に蠶食さるゝ運命にある。否らざるとするも座繰絲の相場は漸次器械絲の爲めに釣上げられて絹物の價格を高め、延いて之が直接その需要に影響するものを見るべきである。斯くて此間支那に人造絹絲の侵入し得る餘地は甚だ多い。それは支那人の絹物に對する趣味が絹らしく光澤あるものを嗜好し、或は綢緞を始め洗濯のきかぬ織物が尠くない。更に又た絹物の古着が上流より下級者へと轉々する事情等を考察し、將來支那は人絹に對する好個の市場たるべくして一面生絲の消費量が増加を告ぐるにしても、之が爲めに著敷生絲輸出の増進力を殺ぐものとは考へられなう。

## 第二章 生産要件

### 一 栽桑状態

試みに廣漠たる版圖に割據する支那蠶業地を本邦に求むるならば、亞熱帶圈内の廣東蠶業は之を臺灣に比すべく、蘇浙蠶業に至つては我が九州を想像して略ぼ當るであらう。殊に晩春より比較的高温にして濕度高きに反し、秋日和の甚だ永き氣象状態は熊本縣のそれに彷彿たるものがある。更に乾燥地帯の北支山東省の蠶業が東北地方のそれに當らざるとするも、朝鮮半島の状態には酷似するを見る。或はまた四川省が海岸線を離るゝ千數百哩なるに拘らず不思議にも蜀犬日に吠ゆる多濕の氣候は我が氣象状態に似通ふと言ふが如く強いて求むれば眇たりと雖も延々たる我版圖内に之を比すべき地方がある。けれども奥行の深くして各蠶業地を通じて帶ぶるところの大陸性に至つては到底本邦に求むるを得ない。斯くして支那蠶業の幾多生産條件は本邦と違ふばかりでなく、各地方によつて斯業の基礎的條件が著敷相違することは既述の通りである。先づ之を土地に就いて南支及中支の蠶業は西江及長江流域の所謂沖積土の上に立つに反し、北支蠶業は風に運ばれた黄土の堆積による沙泥の地帯を基礎とし、更に四川省は赤質土の丘陵地帯に横はつて居る。之に夫々温濕度の高低を加へて各生産物を異にし、延



いて一般經濟狀態に高低あるは言ふまでもない。随つて例へば勞銀に於て一般農業労働者の日備賃を比較するに、大體廣東地方は一日五十仙、蘇浙地方四十仙、山東省三十仙、及四川省二十仙と高低を見る。それ故に各編に入るに先だち、各地方の栽桑、育蠶及製絲の三項に互る基礎的條件を彼此對照して其間の事情を明にする必要があるであらう。

即ち先づ自然的條件の影響を最も受くる栽桑狀況に於て廣東斯業にありてはデルタの沃土と熱帶的氣候により殆ど四時常綠を湛ふる桑園は其の生産力最も旺盛なると同時に普通年七回に互つて收穫を爲すが故に、之に肥料其他相當の投資を要して居る。次いで天惠の肥料とも言ふべき河泥の便益によつて發達せる蘇浙桑園は前者と等しく純桑園なるに、收穫は殆ど春蠶一期を目的とする。それにも拘らず他の栽植物と殆ど同等の生産價値を擧げて居るを看過することが出来ない。更に四川山東及湖北省の如くに栽桑は人家の周圍、畦畔、路傍を利用し或は畑地に間作して殆ど純桑園を見ることなく、一般農民は「樹木たる桑に肥料は要らぬ」との觀念を抱く地方にあつては桑葉生産費の極めて低廉なるべきは言を俟たぬ。随つて此點に關し精確なる數字を以て比較することは困難であるが、其の概數を示すと左表の如くである。

桑の生産費

地方別項目	一貫平均		一反歩		一反歩		一反歩		對桑拾貫摘葉費
	桑相場	對桑一貫	收葉量	地價	小作料	肥料	勞力	合計	
上海地方	一八・五 <sub>仙</sub>	一二・五 <sub>仙</sub>	二八八 <sub>圓</sub>	八〇 <sub>元</sub>	一〇、五〇 <sub>仙</sub>	一一、一〇	一四、四〇	三六〇、〇 <sub>仙</sub>	一 <sub>仙</sub>

地方別項目	一貫平均		一反歩		一反歩		一反歩		對桑拾貫摘葉費
	桑相場	對桑一貫	收葉量	地價	小作料	肥料	勞力	合計	
山東地方	九・五	五・七	一〇〇	四五	九五	三、七五	一、〇〇	五、七〇	一〇・六
四川地方	一一・三	—	—	七〇	七、〇〇	—	—	—	—
廣東地方	二一・九	一七・二	四八〇	二五〇	三七、五〇	三〇、〇〇	一五、〇〇	八二、五〇	三一・三

(註) 桑は葉桑を以て計算す。山東省間作桑園は總費用の三分の一を桑に割宛てたものである。

一 養蠶經營

養蠶家が桑葉の一部を買桑に仰ぐものが尠くないと共に育蠶技術の拙劣は收繭を確實に期すること能はずして養蠶經營を不安定ならしめ、之を養蠶經濟から見るに桑相場の變動及天候の兩者は繭價の騰落と相俟つて養蠶家の損得を左右すべき三要素たるは看過すべからざる事實である。此點に關し四川、山東省の如く育蠶が純然たる副業として經營さるゝ地方にあつては業態の頗る健實なるものあるべきに反し、養蠶を以て專業とする廣東蠶業を始め規模の大きな蘇浙蠶業にあつては業界の浮沈及蠶作の豊凶等が農家の經濟に密接なる關係を有して居る。今其の業勢に就き繭の生産費を見るに收繭は豊凶の差甚しく到底精確を期し難きも、平準を推し一九二六及二七年各地に調査せるものを基礎として見積るに左表の通りである。

繭の經營費



地方別	生繭一貫匁		平均相場	生産費	飼育日數	一日養蠶人夫賃	對蠶量一匁桑量	對蠶量一匁收繭量	生繭一貫匁費用		
	代	勞力							雜費		
上海地方	四、〇〇	三、三八	四、〇〇	二、二四	三〇日	五〇	三七、五	二、〇八	二、三〇	七二	三六
山東地方	三、七五	二、二四	三、七五	二、二四	三五	三〇	三〇、〇	二、〇〇	一、一八	八八	一八
四川地方	三、三〇	二、六五	三、三〇	四〇	三〇	三〇	二八、八	一九、二〇	二、〇三	六二	一
廣東地方	四、二五	三、八〇	四、二五	一六	七〇	七〇	二四、〇	一、二〇〇	二、八〇	五六	四四

(註) 上海及山東地方に於ては桑量の四割を買桑により計算し、四川及廣東地方は桑及勞力を全部他に仰ぐものとしての計算なり。

即ち蠶量一匁當りの收繭量は之を本邦の半にも満たぬに、繭生産費は尙ほ本邦より低位にあるは勞力を始め經營費の低廉なるを如實に語るものであり、同時に將來蠶業の改良、技術の向上を見ることあらば斯業の經營が一層有利なるべきは明かである。然し養蠶改良の必要なるは單に此點のみからではない。之を繭の品質に就いて育蠶技術の拙劣なる爲めに甚しく屑繭を多からしめ、絲量及解舒を不良ならしめて居る。随つて繭一貫匁の價格が低位にしても之を生絲の原料價值即ち繭の掛目から言へば割高に付かざるを得ない。換言すれば養蠶經營に於てその改良が適當に講ぜられたならば、其の利潤は敷著増進を來すと共に製絲經營に裨益することの多かるべきを看遁してはならぬ。

### 三 製絲經營

器械製絲業に於ては歐式繰絲法を踏襲せる上海製絲法と歐式共撚式の轉化せる廣東製絲法、それに日本式を採用せるものを加へて興味ある對照を示して居る。是等の利害得失に至つては原料繭に密接なる關係を有するが故に一概に之を論ずるを許さないが、此の點に關し一九二六及二七年に於ける生絲原價を構成する諸種資料を掲げやう。

#### 生絲の經營費

(第一表)

地方別	工		百釜に要する人員	繰絲工の日給	石炭一噸の値段	乾繭百斤の工場着値	乾繭百斤の乾燥費	生絲百斤の繭代金
	生絲百斤の原繭量	一釜繰目						
上海地方	五八〇	一〇〇	二〇〇	五五	一三	一七〇	三五	九八六
漢口地方	五五〇	九〇	二〇〇	三二	一五	一三二	二〇	七二六
山東地方	五〇〇	六〇	一一〇	三二	一〇	一四〇	二五	七〇〇
四川地方	四五〇	六五	一一五	二二	八	一三五	二八	六〇八
廣東地方	五二〇	四〇	一〇五	五八	二五	一六五	二三	八五八



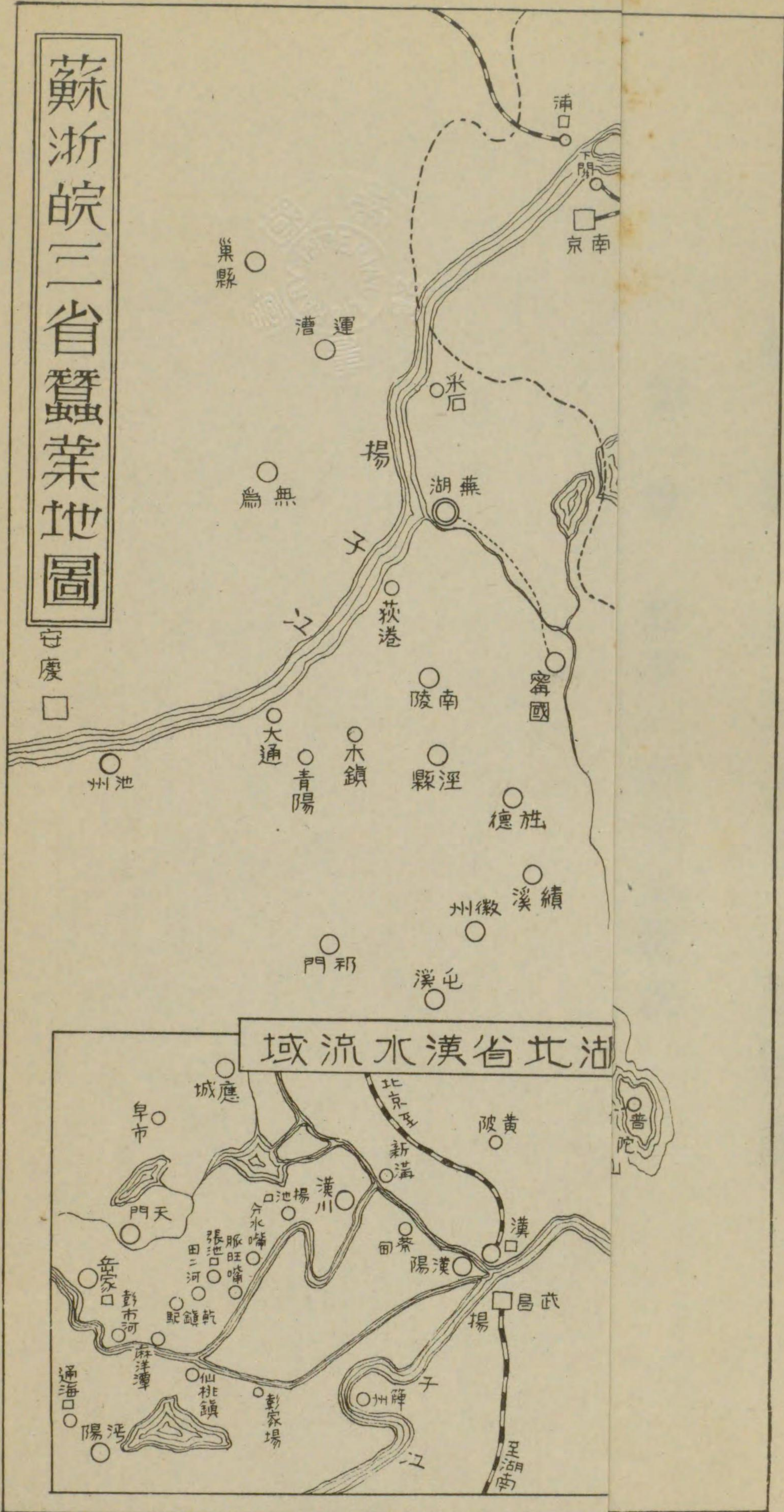
(第二表)

地方別	項目		生絲	燃料	斤製	造工	諸雜費	合計	輸出稅其他	收入	上海絲を百割するの割合
	工賃	場工									
上海地方	一一五	二八	五六	三〇	二八	七一	三〇〇	四〇	一二五	一〇〇	一〇〇
漢口地方	九六	一六	六一	四四	一六	五三	二七〇	四八	一〇五	九〇	九〇
山東地方	一九二	一	三八	七〇	一	一七〇	四七〇	三〇	一五〇	一一〇	一一〇
四川地方	一〇五	一三	四二	七五	一三	一二五	三六〇	六五	一〇〇	九〇	九〇
廣東地方	二三二	二四	六三	二〇	二四	三七	三七六	八四	一〇八	八〇	八〇

(註) 輸出税には生絲に對する附加税を含む、山東省は邦人經營青島絲廠を採る。

即ち生絲の原價は原料繭の關係により各地方毎に著しく異同あるは言を俟たない。之を前に於て上海製絲法は絲量を損すること多くして所謂繭元は最も多額を占むるが、絲質の優良且つ優等絲を目的とするから生産費は最低位を示すに反し、山東省は能率低く機關不備の爲めに多大の金利を要し、廣東省は繭質不良の爲めに製造費に多額を要すると言ふが如く其の經營は各地方の事情により區々たるを免れない。

### 蘇浙皖三省蠶業地圖



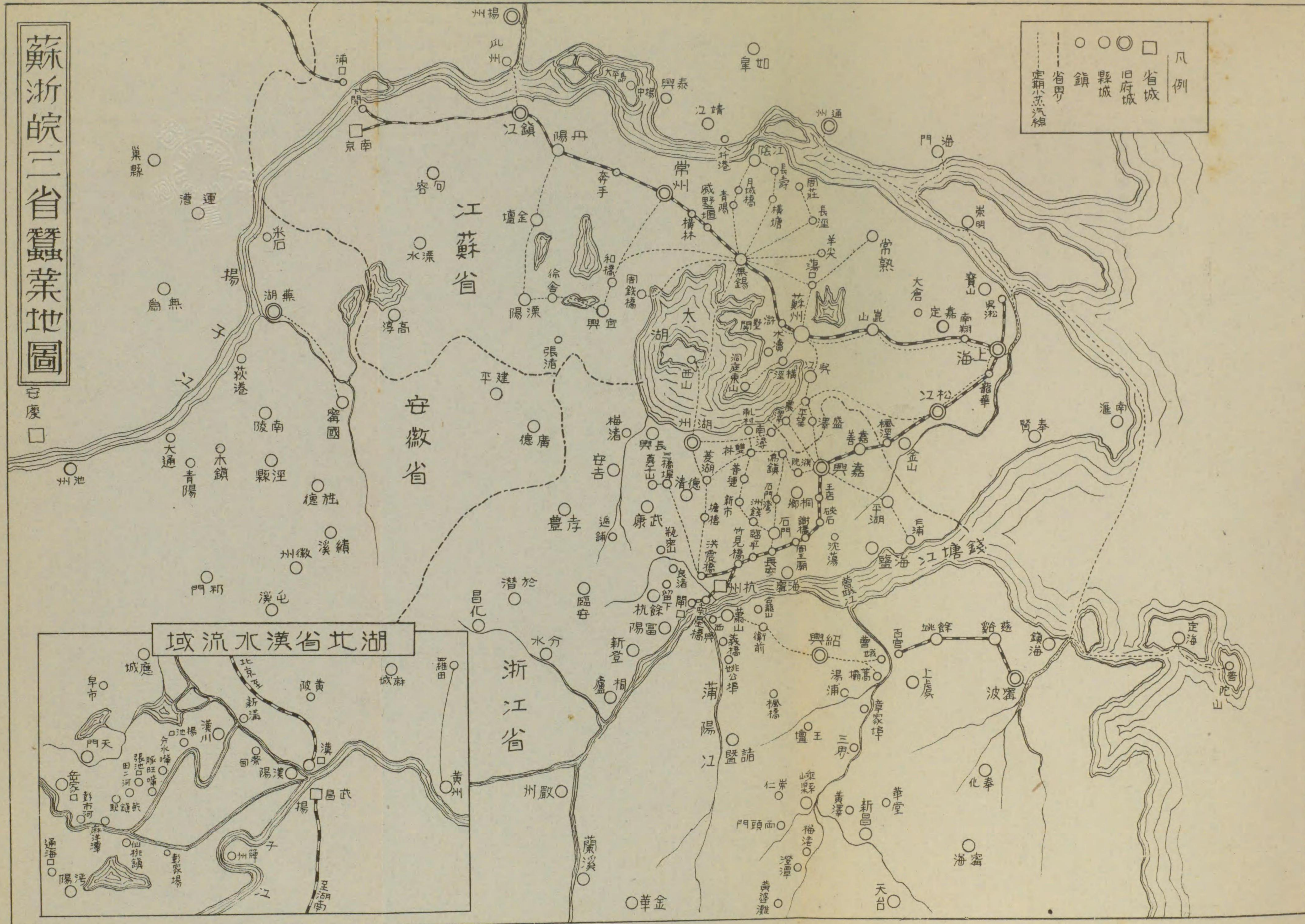


蘇浙皖三省蠶業地圖

守慶

凡例

- 省城
- 旧府城
- 縣城
- 鎮
- 省界
- 定期小汽線



域流水漢省北湖

か如く其の經營は各地方の事情により區々たるを免れない。



## 第二編 中部支那の蠶絲業

### 第一章 蠶業の環境及概況

#### 一 中支蠶業の分野

日支聯絡船による僅に二十六時間、長崎から海の彼方支那大陸に渡れば、大空をひたす長江一帯の景趣は黄濁の水に浮ぶ戒克や水汀の楊柳或は隴畝に飛ぶ鳥鵲を見る等流石にのんびりとして居る。だがまた上海の熱鬧には新參者は大抵面喰つて終ふ。碼頭に逼る苦力の群やら舗装の道路に織るが如き黄跑車や大厦高樓の間を行き交ふ中國人、外國人、抹帽の印度人等その騷然たる賑ひに支那人も茲處を五方雜處の地と唱へて居る。この大埠頭は商工業に貿易業に活氣横溢せるは言ふまでもないが、同時に支那蠶絲業の中心市場として生絲取引は勿論製絲工場も約二萬釜を算へ、謂はば横濱生絲市場に岡谷の製絲業地を併せたやうである。従つて生絲商館や問屋を訪へば優良な上海器械絲を始め各地から集る色々珍奇な座繰絲が見られるし、製絲工場に至つて支那女工が特徴ある支那繭を繰る實況も視察し得るであらう。或はまた米人經營の生絲検査所や蠶業改良機關としての中國合衆蠶業改良會を訪問し、更に養蠶の實況を知りたくば、フランス租界に接壤する徐家涯龍華の村落に互つて養蠶をやつて居る有様で、支那斯業に關する概念は大體上海



て得られる。そして上海の背後に横はる此處江南と呼ばれる蘇浙の平野は支那でも古來天下の倉廩と呼ばれ、最も物資に富める地方である。「江浙豊らば天下足る」と言ふが如く昔は兩省の産米が最も重きを爲したことは、杭州から鎮江を経て天津に至る大運河が運米の爲めに開けたに見ても察せられる。殊にその蘇州米や松江米になると我が上等米に匹敵するであらう。この米に次いで蠶絲、茶、棉花、雜穀、麻等の産物を擧げ、此地方の田舎は本邦の農村に比べてもそう遜色はあるまい。

殊に蠶絲業は農家にとつて最も重要な産業である。だから一般に蠶のことを實寶と呼び、この田舎に這入つて蠶とか養蠶と言つても通じない場合は稀ではないが、實寶と言へばどんな小供にも直ぐ解る。即ち蠶はお寶であつて、此の地方の農民經濟を構成するに如何に重要なかが何はれやう。従つてその蠶業状態は支那に於て最も發達して居る。勿論發達といつても、今日本邦に見るやうな科學的經營法ではないが、例へば桑苗に就ては浙江省海寧縣下の周王廟を中心として專業に大規模な生産が行はれ、また蠶種と言へば餘杭及紹興の二地が製造地として名高く、製絲工場は上海及無錫に略ぼ集中して居る。それからまた湖州を中心とする廣汎な範圍に互つての所謂七里絲は我が座繰の達磨物に相當し、この豊富なる原料で杭州を始め盛澤、湖州、蘇州及南京等の機業地に製織される綢緞は之を廣く各地に需要されて、支那絹織物の大半を占めて居る。そこでこの蠶業といふのは即ち江蘇、浙江の省境に跨つて太湖といふ我が琵琶湖の數倍ぐらいある湖水が横つて居るが、この湖を中心として兩省に擴がる沃野千里の平野に育立つたもので、南は錢塘江を越へて紹興地方の山間に入り、それから北は揚子江を渡つて江北地方に侵出して居る。所謂上海圍内の中部支那蠶絲業は濃厚なる江浙の蠶業密度を中心として隣省安徽省に延び、更に長江を

溯つて湖北省蠶業も亦たその勢力圍内と看做して差支ない。

## 二 南 船 北 馬

元來中部支那の地勢は揚子江に沿つてその南部を走る山脈は浙江省から海に入つて舟山列島となり、飛んで我が九州に連るといふ關係から、氣候や地勢に於ても日本と略ぼその状態を同うして居る。殊に寧波から錢塘江以南は山は松林竹叢に蔽はれ、溪澗清冽の流など日本の景色その儘である。錢塘江の北から長江にかけて太湖を中心とする江浙平野は南船北馬の謂に違はず、運河が恰も蜘蛛の網のやうに四通八達して居る。この運河といふのは特に掘つた水路もあるが之を廣く貨物の運搬し得らる水道の意味で殆ど水の流がない。この地方では斯様な水路を内河と言ひ、錢塘江其他水流のあるものを外江と呼んで居る。そこで一つの村から隣村へ行くにも船によるといふ有様で所謂「夜半の鐘聲客船に到る」といふ、あの有名な詩が此邊の情景を最もよく表して居る。私などもこの田舎に出掛ける時は大抵船を一日若干といふ値段で借入れ、之に寢具や食糧品を積込んで、數日間あちこちを巡るのが例であつた。船は小傳馬船に似て、竹で編める家根を付け、船の中央には三四疊の客房があり、卓几を据へ割合に小奇麗である。鱸の方は臺所に充てられ、船頭は大抵夫婦者で夜になると鱸の舷に幕を下ろし、之を家とする水上生活者が多い。江浙平野に於ける田舎の景趣を最も味ひ得るものはこの舟の旅である。櫓の音に和して船頭(老大と呼ぶ)の節面白い歌聲を聞きつつ、居ながらにして水村汀蘆桑圃の去來する様が見られる。そして季節によつて情趣も變つて来る。若しも晩秋の頃なれば、水上に穢い糞船を浮べて、長い竹竿の先に笮を付け、之を水中に立てて河泥を採取して居る光景が到る處に見られる。船に採取し



た河泥は之を肥桶に移して忙し相に岸に横がる桑畑に擔つて行くが、之が桑に對する最も有效な肥料とされ、桑園の殆ど例外なく運河の兩岸に發達したのも此の便宜からで、船は全く桑畑の中を進んで行く有様である。次いで春の頃は河底に生ずる長い水草を採つて稻の緑肥に充てるなど運河は此邊の交通上必要なばかりでなく、農民生活にとつて離るべからざる關係を持つて居る。詩でお馴染の松江の鱸を始め魚も澤山獲れる、鮫に拾數羽の鵜を綱につけて水上に放ち、長い竹竿を握つて之を追ひながら進んで来る鵜飼の様子は殊に悠長な圖である、だが此處で味の美なるは魚よりも「ホニ」である。之を蝦と呼び水色をした長さ一二寸の種類で、その扱身は蝦ホニと言はれ、その青豆蝦ホニの如きは支那料理でも大いに賞味されて居る。また支那人もこのえびだけは生きた儘の蝦を直に醬油の中に入れて好んで口にすることが、船中之を味ふのも樂みの一つである。村や鎮も大抵この運河の兩岸に集まつて居るが、此處を離れて處處水路の交叉點は寺や庵、觀音を祀る尼寺、或は菩薩と言つて神様を祀る廟が建ち、傍には椎槐等の大樹が茂り、是等の建物は庵の壁色が赤寺廟が黄色、それから一般人家は色物を遠慮して白壁といつた色別けて、一層田園の趣を添えて居る。船がこの田園から鎮に入ると、直ぐ兩岸に並立つ人家から鎮の賑ひが聞えて來て、遽かに氣分が變つて來る。殊に恍惚たるは此邊の新春の景色である。新柳、菜種の花、蓮華草等が一面の田野を彩り、此時期は未だ農家も忙はしくないから廟には祭があつて、田圃に小屋掛けの芝居が立ち、此處へ澤山の村人が船を漕寄せて來るなど、その光景は未だに忘れ得ない印象である。そして太湖の附近を除いては旅行も不安は殆どなく、洋服姿の私を捉へては煙草會社の者かとか、耶蘇堂の宣傳員か等と聞く有様で、人氣も悪くはない。日が暮れかかると、處かまはず岸に船を繋ぎ、夜を明かすことも暫々あつた。斯くて春も耽けると鎮の鍛冶屋が鋤鉄の手に村落に出張し、畑に小屋を掛

けて夜遅くまで鍛鐵をやつて居る。その音が聞えて來ると、如何にも農事繁忙期の近けるを思はしめるのである。兎に角此蘇浙蠶業地は私が拾餘年來殆ど縦横無盡に歩き廻つた地方であるから、過去の記憶を辿つて先づ概略各地の状況を述べて見たい。

### 三 錢塘江の南部

通例浙江省は錢塘江を中心にしてその北岸から太湖に互る地方を浙西と呼び、その以南を浙東と言ひ後者の主なる蠶業地が早場の紹興蘭を以て有名な縣新昌地方である。此方面へは杭州から行つてもよいが、順序として寧波通の汽船で夕刻上海を發ち早朝錢塘江を溯つて寧波に着く、その昔我が遣唐使僧侶等が支那海を渡つて上陸したこの寧波は今も變らぬ股賑な土地で、上海の如きも寧波人が最も優勢を示し殆どその商權を掌握して居る有様である。急がぬ旅次ならば、二三日此の附近に散在する青玉山を始め名刹の寺廻りをやるのは信者ならずとも興味があるし、道に横はる並木の老松を眺め往時太刀を提げ胡蝶の陣で入冠した和冠の跡を憶ふもよからう。更に小蒸汽で一日半、舟山列島の中に立てる一孤島普陀山の靈域を訪ふのも楽しい旅である。島内を廻つて數寺を算へ、我が瀬戸内海の島嶼に彷彿たるべく、寺は金比羅様と同様に、支那の船夫にとつては崇信の的である。寧波から汽車で西へ約二時間、王陽明の故郷で知られた餘姚を過ぎて百官驛に着くと、驛は曹娥江の直ぐ岸に立つて居る。江には工事半ばの橋臺が立ち腐れて居る。今から約二十數年前滬杭通鐵路公司は上海杭州及寧波の三地を聯絡する鐵道の布設に着手し、前段は開通を見たが、後段は寧波からこの百官鎮まで工を進めて資金を使ひ果して終ひ、未だに其儘になつて居るのである。百官驛から渡江して辻輪で、曹娥鎮に行くといふ運送問屋がある。こ



れは曹娥から杭州に至る運河と外江たる曹娥江とは水準が違ふから茲處で貨物の積換を要するのである。陳正和行といふのが、私のゆきつけの間屋で、茲處に旅装を改めて嵒邑行の船を仕立て紹興蘭の産地へと向ふのである。

曹娥江を溯る船は皆貨物船で、前述の趣味豊かな内河の舟行と違ひ、南支那特有の民船旅行を味ひ得るであらう。江浙平野の水郷と變つて雑木林の山が幾重にも折重り、江は其の溪間を蜿蜒と流れて居る。この流に逆らつて數人の曳夫が綱で船を曳いて行くに、その山姿水色の眺めは亦た爽快である。山間の江村たる章家埠、上浦等を過ぎ、六十華里三界鎮に至つて漸く嵒縣管内に入り、翌日の午後曹娥から百三十六華里にして嵒縣城に着けば、此處を中心として嵒縣新昌の兩縣に互り、相當廣い平野が展開して居る。

この平野に於て曹娥江は縣城で數派の支流に分れ、どの支流を辿つて溯るも潺々たる溪流となり鮎さへ獲れる。殊に南郷と言つて、縣城から南下して梅渚より黃婆灘に至る七八哩の間は溪流に沿つて帶のやうな「たいら」となり、十二峰と呼ばれる秀峰が並立し、この仙境が有名な紹興種の蠶種製造地である。私は大正七年の夏出穀蘭の買入に暫く此處に滞在したことがあるが、其の山姿水明の郷土は未だ忘れ得ない。それから東郷と言つて嵒邑から東へ黃擇鎮を過ぎて新昌縣城に至る地方は殊に優良蘭の産地であり、新昌縣城を過ぎて大佛寺には奈良の大佛にも劣らぬ巨像を見る。更に此處から東方二日路、有名な天台山の靈域に入れば二十餘華里に互つて樹木は繁茂し緩かな坂道を進むに連れて、溪流飛瀑があり、寺があり、その山頂からは指呼の間に杭州を望むと聞いたが、私の登つた日は漠々たる白雲に防げられ、唯頻りに野鷄の驚いで飛立つのを見た。更にまた西郷方面は崇仁鎮から遠く王壇鎮を迂回して陸路曹娥に至るが、此の溪間も山青く水清い風光

は我が中仙道筋にそつくりである。私が數年を置いて去る大正十三年に此地方にやつて來た時には嵒邑の町に電燈が付くやうになり、電報局が開設せられ、また嵒縣新昌の兩縣城間に自働車路(馬路)の築造中であつた。將來この道路は温州に通じて福州に至る幹線を爲すものと聞いたが、然し其の完成は尙ほ遠い將來であらう。殊に此地方はその前年未曾有の大洪水に見舞はれ、七月中に九回に互つて氾濫し、流失家屋や田畑桑園の慘憺たる被害を受けて今尙ほ土匪の出沒に最近稍物騒である。然し元來物資の豊富な地方で、煙草、蘭、蠶種、茶及藥材等を主要物産とするが、米麥はその産出のみでは不足を告げ、年々消費量の約三割を他地方に仰ぐに見ても、蠶業が地方經濟に重を爲して居ることが窺はれやう。

夕刻嵒邑を發つて再び曹娥江の流に乗じ江を下れば、早曉蒿壩若くは更に下江の曹娥鎮に着くと、直に此の兩地から杭州の對岸西興行の乗合船が仕立てられ、間もなく東關に至つてこの兩者は合體し、之を長く連ねて小蒸汽船で曳き、運河を進んで行くのである。視野は一變して長堤弓橋の水郷となり、船は晝近くに紹興府城の長い城壁の下をいつまでも走つて居る。若しそれ越王勾踐が吳に敗れた會稽山や流觴の雅宴を催した王羲之の蘭亭に詩趣を味ふとなれば此處で下船すべきである。左なくとも芳醇な紹興酒の産地として酒槽の香紛々たる茲處に、酒客として花彫の味に浸るのも悪くはない。府城から長堤に立つ澤山な簷表門や、水に遊ぶ家鴨の群や或は往き交ふ船に倦むことを忘れ、午後三時頃衙前鎮に下船して、脚で櫓をこぐ脚下船に轉じ數華里行くと、そこが蕭山縣蠶業の中心地たる龜山鎮である。その養蠶地は錢塘江に面したる坦々たる沙地の一帯で、茲處は舟行の便を缺くから、蘭の出廻期特に用ふる四人附の早轎で飛ぶが如くに蘭市を見廻るのも一興である。次いで龜山鎮から蕭山縣城に至り更に諸桂種で知られた諸暨縣の蠶業地を視



察するには臨浦から蒲陽江を溯らなくてはならない。諸暨縣は嵊縣と山を挟んだ隣合せて、蒲陽江が曹娥江に並行し、水は後者よりも悠々と流れて居る。夏季は諸暨縣城近くまで小蒸汽を通じ、縣城から楓橋を中心とする大東郷地方へと一巡するに廣く平野が展けて秋の頃は蕎麥の花が四邊を彩つて居る。再び蒲陽江を下つて錢塘江との會流點義橋に至れば茲處には紹興蕭山を始め浙東地方の産繭は悉く集まつて、錢塘江を横ぎり、對岸の開口から汽車で上海に輸送されて居る。然し杭州に入る一般旅客は紹興運河の終點西興に至り、錢塘江の廣漠たる河原を横ぎり、小蒸汽の曳く渡船によつて對岸南星橋に行くのが順路である。この錢塘江の渡場は直ぐ下手は遠く杭州灣に連り、上流には山陰地方の翠巒重疊たる山脈を控へて雄大な氣象に溢れて居る。それに浙東と浙西地方を通ずる要路として往來繁く、天秤棒を擔いた商人や百姓やら様々な旅客が乗合つて所謂吳越同舟の氣分に、恐らく此處程趣のある渡場は他に見られないであらう。更に錢塘江を溯れば、上流は山迫り兩岸に奇岩の横はる奇勝に所謂「山陰陽道應接に違あらず」の句を生んだ景勝地で、その富陽桐廬及蘭溪の諸縣も蠶業の新場所として將來を嚆望さるゝ地方である。

#### 四 滬杭鐵路の沿線

紹興の田舎を巡つて南宗の故都杭州に入り、西湖の畔に立並ぶ洋式の新々旅館や或は清泰其他割合に奇麗な支那式旅館に客となり、支那の墨客遊士に混つて靜かな湖面と之を圍む吳山第一峰を始め諸峰の連る優雅な西湖の眺望に接すれば旅の疲も慰ゆるであらう。宿を出で、先づ保叔塔下の我が領事館を訪問し、此處から楊柳の並ぶ蘇公堤を傳つて「平湖秋月」から支那の嗚呼忠臣岳王廟に詣ふで、次いで直ぐ近くの省立蠶業學校を參觀し、茲處から舟を浮べて「三潭印月」に立寄り歸

れば大體西湖八景の見物を兼ねての用務は足るであらう。残るは精巧な緞子の製織狀況を見ることであるが、その有力なる緯成及虎林公司の如きは日本式製絲工場をも經營し、其の製織及製絲法は孰れも邦人指導の下に範を本邦に採つたものである。それにも拘らず、概ね邦人の參觀を拒絶するから、前以つて交渉許可を得ねば門前拂を喰はされる。然し強いて見る價值もあるまじく、天章公司邊に至つてシャガードの運轉する狀況を見ればその概要を窺ひ得るであらう。

杭州から汽車で一路上海まで素通りにしても、車窓から眼界の限り一望桑園の横はる狀況には斯業の旺盛を領かれるが、然し支那の代表的蠶業地とも言ふべき地方なれば、途中下車、親しく其の實況を視察する所がなくてはならないであらう。先づ杭州から長安若しくは周王廟驛に下車すれば、海寧縣下の桑苗産地として農家は米と桑苗の輪作を營み、途すがらどんな農夫を捉へて桑に關する質問を試みても、皆一かどの大家である。人家は殆ど一望桑の中に立つて居るが、二階建の木造といひ、窓に障子紙を使ふなど、故郷その儘の景趣である。のどかな春周王廟から運河の畔を辿つて田舎道を歩くのも盡きぬ趣があるが、次の驛たる斜橋附近から硤石驛を経て玉店驛に至る間は純然たる座繰業地で、繭を賣るものは殆ど無い。その時期になると農家は軒下に大きな坩堝の焔爐を据へ日蔽に葦子帳をかけて、到る所から絲を繰る音が聞えて来る。硤石鎮は其の座繰絲の集散市場として生絲問屋が軒を連ねて賑つて居る。海寧縣城へは杭州よりすれば長安驛、上海からならば斜橋驛に下車し、其處から船で二十華里位ある。錢塘江灣に臨みその城壁近くに波が押寄せて居る。海からの満潮は灣内に入つて縮めらるゝ従つて高まり、殊に仲秋十五夜の月には潮は丈餘の高きに達し風を呼び、うなりを立て、押寄せて来る壯觀は所謂「瀧を地上に横へたるが如し」の言を欺かない。仲秋の節には上海杭州方面から看潮に夥しい人間がやつて来る。



硤石鎮から嘉興まで二時間足らずであるが、蘭の出廻期海鹽平湖地方を迂回して見るのも一興である。變つた綠色蘭の多い海鹽地方へは硤石鎮より小蒸汽が通じ、縣城からは支那海の大觀さに接し得べく、また鹽の産地である。海鹽から戒克に乗つて三四十華里乍浦に入港すれば、茲處は上海よりもズット古い貿易港で今尙ほ戒克貿易が盛である。乍浦から小蒸汽で、平湖を経て嘉興に至る一日行程、此の一帶の運河は水は洋々と溢れて居る。

嘉興府城は浙西地方に於ける定期小蒸汽航路の中心地として、先づ湖州に至るには烏鎮双林經由と震澤南潯經由の二班があり、其他盛澤蘇州等各地に通じて居るから、茲處を出發點として色々な田舎旅行が計劃される。然し嘉興で見ると見るべきものは緯成公司經營の製絲及絹絲紡績工場と蠶桑改良會の分場位のものである。特に絹業に關してならば、茲處から小蒸汽で約四時間行程、杭州に次ぐ主要機業地たる盛澤を見なくてはなるまい。茲處で製織さるゝ綢子は盛綢と呼ばれ、其他華絲葛、華絲布等上海の呉服店に幅を巾かして居る。然し最近急激なる膨脹を來した鎮だけに幾つもの水路を夾む陋巷は濕氣と臭氣に充ち、私は或る年の冬此處で漸く一等の旅館を探したものの、その臭穢に堪えず逃げ出して、已むなく夕刻船を傭ひ、寒月を仰いで夜遅く輸出向七里絲の産地震澤鎮に着いたことがあつた。

### 五 大運河を傳ふて

上海への歸路を急がねば杭州から大運河に船を仕立て、湖州に赴き、湖州から南潯震澤と七里絲の産地を覗きつゝ、水郷から水郷へと渡つて蘇州に向ふのも面白い旅である。更に又杭州より有名な蠶種製造地餘杭を経て有名な莫干山の避暑地に清遊してから湖州へと迂回するのも亦興味

がある。

借て此方面への發足點は大運河の終點にして且つ杭州の開港場たる洪震橋で、今でも相當に賑はつて居る。然しその賑ひは經濟的よりも寧ろ杭州の遊里として、紅黛脂粉の横行に、之を避けるには唯一つ大方旅館といふのがあつた。此の洪震橋に接する杭州の租界は共同租界に税關が立ち、日本租界に蘭買入所が十數戸散在して居る位のもので、折角下關係によつて設定された總面積三十二萬餘坪の我が租界も既借地は僅に三割見當に過ぎず、徒らに雜草茫茫狐狸の棲息に放任されて居る状態である。洪震橋は船の中心地として船賃は安い。民船を一日二元の賃銀で雇ひ、西方六十華里餘杭へと向ふに、西湖の裏に聳ゆる天竺山に連る山脈は巒々錢塘江の奥へと走つて居る眺望は近くの水郷と照らしてまたなく美しい。船は兩岸高刈の桑樹が立並ぶ靜な水面にギギー櫓の音を立て、留下鎮、倉前鎮を過ぎて夕刻餘杭に入る。だが最近杭州の松木站より餘杭まで立派な馬路が出來上り、乗合自動車で僅に一時間で到達するやうになつた。その沿道は山際に沿ひ、その赤い砂路や人家や丘陵などの景趣は悉く故國に彷彿たるものがある。

更に餘杭の西門から前方は一望の桑畑に立つ森の彼方には、數千尺位ある安徽境の翠巒が巒々と走つて居る。この清々しい眺望に自動車走らせて北進八十華里にして武康縣城に著き、茲處から轎子で莫干山に行けば、竹林の蔽ふ治外法權の園内に夏の頃は洋人の逍遙を見る。この別天地に英氣を養ふて再び湖州方面へと田舎旅行を續けるのも亦た樂しみの一つである。蠶種に名高い餘杭縣城は西南に俊岳を負ひ、此處から流れて來る大溪といふ河の畔に臨める細長い町で、頗る景勝に富んで居る。大溪には筏を通し、瓶窖方面に流れて錢塘江に注ぐが、内河の氾濫を防ぐ爲めに長い堤が続いて居る。或る年の春私は船で餘杭から瓶窖良渚方面へと渡り歩いたが、雨に祟



られて苦の中に終日身をひそめざるを得なかつた。江南に於ける民船の旅も雨天の日だけは憐目である。

杭州から湖州に至る間一日行程で、定期小蒸汽に或は民船によつて何處まで行つても、一望桑園の展開には驚かされる。湖州は太湖の南西隅に臨む主要都市で、湖筆によつて著名な筆の産地である。この筆に就いて軸は餘杭から産し、毛は無錫方面から來り、また双林鎮に近い善璉市には全村残らず筆の製造に當つて居る所があり、斯くて湖州に集るといふやうに此の地方に於ける各種生産業は分業的に行はれて居るのが特徴である。それから湖州は蘇杭と並ぶ古都であるが、最近市街の一部は市區改正され、そこに洋式數層樓の旅館や洋品店が並ぶなど、漸次上海の文化は地方都市に浸みつゝある。更にまた最近湖州より對岸無錫に至る太湖横斷の航路が開通して一層便利が良くなつた。何しる湖州から上海に出るには最も早い嘉興經由でも一日半を要するに、太湖の横斷は約四時間、無錫から鐵路上海迄三時間と僅に七時間で足りる。しかも設備の良い數百噸の汽船で、湖州の座繰絲中心地から器械製絲業地たる無錫に渡るのに雄大なる太湖の大觀を恣にすべく、江浙蠶業視察者に推奨したいコースである。

湖州から大運河を進みて、輸出七里絲の集散地たる南潯及震澤鎮に至る間は立派な防岸工事が長距離に互つて施されて居る。此地方一帯は浙江省に於ても、とりわけ蠶業の本場と言ふべき地方であるから、道を迂回して菱湖、双林及新市から石門を経て滬杭鐵路の長安驛に出て、或は新市から烏鎮を経て南潯鎮へと舟行して、晝は具さに栽桑育蠶の状況を研究し、夜は鎮の人家の下に繋いで、岸に登り茶館に豊富な魚肉や老酒を味ふことは興趣のみでなく、其の旅行は恐らく江浙蠶業の核心に觸れたものであらう。南潯ナインと震澤ツエンとは僅に十二華里を距て、船の往來は繁く、この間が江

蘇浙江の省界である。兩鎮とも繁華な町であるが、殊に江蘇の震澤鎮は富豪の多いところで七里絲の間屋が大きな家を構へて居る。震澤から平望鎮を過ぎれば桑樹を見ることが稀に大運河は地平線よりも高く、長い堤を築いて水を湛へて居る個所が続いて居る。斯くて吳江も過ぎ、長い寶帶橋が現れ、ば、間もなく蘇州で、邦人の旅館に足を洗ひ得る楽しみは亦格別である。實際江浙の田舎に一週間か十日間を過して上海のやうな文明都市に著き、電燈の光や街路の往來に接する刹那は何時乍ら全く別世界に入つたかの如き、涙ぐましい歡喜の情に躍動を覺える。

## 六 蘇州と無錫

上海から南京に至る滬寧鐵路方面は先きの滬杭鐵路の沿線と其間若干異つた氣分を感知される。それは恰度後者の東京から近畿地方に至る東海道線に比べて前者は東北線と言つたやうな氣分の相違である。即ち滬寧鐵道は南京から北京に連続することによつて多少北支那の氣分が流込んで來るからであらう。上海から鐵路二時間の蘇州は杭州と共に古來「天に天壇あり、地に蘇杭あり」と唱はれ或は蘇州に育ち……蘭州に死す」と言ふか如く落付のある美都である。殊に最近の杭州に見るやうな俗悪はなく、如何にも古都らしい氣分が漲つて居る。鈴をつけた驢に跨り或は艚を漕いで有名な寒山寺を始め虎邱、天平山、上方山及靈巖山等清遊に適はしい名所が多い。また最近日本租界も上海の延長として事業家に着目されて來た。そして外務省が拾數萬圓を投じて長江第一と言はる領事館の新設と相俟つて日華蠶絲株式會社の瑞豐絲廠を始め貝鉦工場や東洋燐寸會社の工場等か設立せられ、草茫々たる租界も聽ては煤煙の天に沖する日があるであらう。



處で蘇州地方の蠶業に就いて見るならば、一步蘇州から踏み出して西方七十華里太湖に突出した洞庭山地方を窺ふべきである。定期小蒸汽で洞庭東山に向ふに蘇州の田舎は優等米の産地として農家は裕富さうに見えるし、家並も概ね立派である。一半路を進みて横溼から先きは湖中に突出した低地の半島となり、水路はその間を通じて居る。人家は漸次疎らとなるが、地平線上にはかや葦の農家の傍に巨大な風車が立つて水田の灌漑に使用されて居る所は恰度和蘭の風景圖を見るやうである。この水田を通り抜けて東山に近づくに従つて一望の桑園となり、しかも茲處は氾濫を防ぐ爲めに桑園内に池を掘つて地面を盛上げて居るのは偶然にも廣東三角洲の桑園とその軌を一にして居る。斯くて洞庭東山に着けば、山麓に互つて立派な家構への村落が數箇所集團し、靜かな趣のある部落である。更に茲處から太湖を渡る三十華里にして湖中に洞庭西山といふ島があり、此の島には相當繭も獲れる。この西山から順風に帆を擧げれば、僅に一時間で無錫に着くのである。洞庭山地方は人氣も甚だ良い處であるが、惜むらくは昔から支那の小説によく出る太湖船といふ匪賊で名高く、暫々之に脅かされて居る。過る年私はこの洞庭東山から夕刻民船で太湖を横斷し、その南岸湖州府の南潯へ向つたが、薄暮茫洋たる湖の眞中に出てから帆は強風を孕み、船は傾いて矢の如くに迅走し、聊か心細かつたが、何時ともなく疲れた儘に眠に入つて、翌朝醒覺めた時は船は已に南岸の水郷札村に着いて居た。そして茲處から先に述べた震澤南潯鎮を経て蘇州に戻つたことがあつた。

轉じて蘇州から北西へ三十六華里を船又は驢により、或は汽車なれば蘇州の直ぐ次の驛か滄墅關で、茲處に省立女子蠶業學校がある。この校はその設備内容と言ひ或は又蠶業改良の實際に關し、最も有力な機關として看過せぬ處である。此邊から桑園は無錫に近づくに従つて濃厚となり、愈々江蘇省蠶業の中心圏内に這入るのである。

汽車が無錫驛に着けば、城壁をはみだして人家や工場が水路に沿ふ郊外に發展し、林立の煙突からは煤煙の天に沖する工業地の展開は聊か意外とする所であらう。何しろ茲處の工業は紡績の六社約十四萬錘と製絲業の二十二工場約七千釜を双壁とし、次いで製粉業は五工場その製粉年額は約六百五十萬包を算し、榨油業の主要工場十數箇、その生産高は一日荳油四百擔及荳餅四千擔見當を示して居る。其他綿織業に於て手織機の約二千八百臺を始め石鹼、洋炭及清涼水等各種新式工業の擡頭に無錫は謂はゞ江南のシカゴと言ふべきであらう。またその商業に就いて春季の繭出廻期江蘇省産繭額の過半は茲處に集散するし、秋季は米麥其他雜穀の出廻りに、上海の需要する粳米の如きもその大半は無錫に仰ぐ状況で、貨物の輻輳する光景と言ひ、或は商人が新世界旅社や無錫飯店に陣取り、此時期には上海から支那の紅裙が出張するといふ景氣である。斯様な繁榮に關して無錫の人士は言ふ「上海の繁榮は外人の活動に倚るものであるが、無錫今日の隆盛は無錫人自らの努力によつて築いたものだ」と威張つて居るが、實際無錫は彼の有名な通州と並び、支那人の代表的工業地として誇るに足るであらう。抑々無錫は古誌によると、往昔錫山と言へるを漢の高祖五年無錫と改稱された。それは城外に聳ゆる錫山には錫鑛を産出し、住民は争つて之を採掘の爲に常に紛糾が絶えなかつた。處が錫鑛が盡きてから安寧になつたのに因んで、無錫と名づくに至つた。之を新莽時代に一旦有錫と改めたが、更に後漢時代に再び無錫の名に復したと傳へられて居る。この錫山の前には之より低い惠泉山が立ち、その下に無錫の市街が展開し、其處を中心に水路は四通八達して居る。

そして城外には立派な道路が通じて居るから、無錫の視察には北門外の驛から人力車を驅つて



西郊を進み、先づ惠山に行くのがよからう。此處の寺は燒香で賑ひ、名物泥人形の賣店が軒を連ねて居る。寺を出て、山頂に登れば、城壁の周圍に散在する工場や、市街から遠く擴がる沃野には美しい水路が輝き、また西方には海のやうな太湖が現はれ、頗る雄大なる鳥瞰である。茲處を下りて西門外から更に西へ十二華里に車を走せて、棗園に行けば、園は太湖に臨む丘上にあつて、明媚な湖景を一望に收め、特に梅花の頃は幽境たるを失はぬ。

西門から城内に進入つて無錫公園には今から約二十年前時の知事が日本から移植した櫻樹は今や全園に繁茂し、花の頃は蘇州日本租界の櫻と共に一名所たるを失はぬが、邦人にして茲處の花見をしたものが幾人あるであらうか。城内から北門に出て驛に歸れば一通りの無錫見物は足りる。そして製絲工場は隨所に見られるし、養蠶も茶館と言はず、小賣店と言はず、殆ど戸毎に蠶を飼つて居る狀況に途すがら容易に視察し得るであらう。

然し無錫を中心として四方に放射する水路網を辿つて田舎の蠶業地を巡るのは一仕事である。それは豊かな浙西平野のやうに繁華な鎮の點在する水郷を渡り歩くのと異つて、此の地方の田舎は殆ど皆無錫を中心として居るからである。それで此の方面を東奔西走するにはモーターボートによるを理想とするが、その備船料は一日二十元見當を要する點に稍難色があり、先づ鐵路や定期小蒸汽船の利用に、その便を得ない所は脚下船フタオシゼによるのが便利であらう。此の船は細長いボート形で、之に竹を編める幾枚かの圓い篷を船全體に覆せてある。船の重心は動搖し易いから乗客は精々二人で、細長いトンネルのやうな篷の中に横臥せねばならぬ。船は「とも」と「へさき」で櫓をこぐ、そしてその櫓は足でこぎ、腕わきに梶をとるといふ變つた船であるが、その速力に至つてはモーターで四時間を要する位の距離を五時間で突破するといふ迅さである。無錫からどちらへ足

を向けても、廣茫たる平野を縦横に走る水路の兩岸は殆ど皆桑園で、村落も亦水路に面した便ある箇所を集團して居るから、此邊の村名は某々橋といふやうに橋名を以て現はして居る。大抵の村落には一二白壁の繭行が存在して繭の出廻期には大に賑つて居る。そして其の範圍は無錫、常州、江陰及常熟の四縣に續く廣汎な地域に互つて居る。

## 七 宜興から溧陽

更に江蘇省の西南隅太湖に面する宜興、溧陽及金壇地方は之を略して宜溧金地方といふが、また一つの獨立蠶業區を爲して居る。無錫の北門外から此の地方へ向けて毎朝十時に發つ小蒸汽によつて所謂無錫の西路を進むに、この太湖に沿ふ一帯は一望の平野で、兩岸濃厚なる桑園は進むに連れて漸次薄らぎ、晩春の候には見渡す限りの麥隴である。百五十華里を進んで宜興縣城へ着くのは夜半の十二時頃であるが、此處を過ぎて徐舍鎮に近付くと、夜陰到る所に火焰の天に沖するのが見える。これは此の地方が有名な宜興燒の産地なからで、その火鉢の如きは本邦で支那火鉢として珍重されて居る。最近では煉瓦の製造も盛になつて蠶業で金を儲けたものが尠くないと言ふ。私は夜半の二時に徐舍鎮で小蒸汽を捨て、此處から南へ三十華里張渚鎮へと船を漕いだ。夜が明けると安徽境の山は手近に現はれ、山丘には樹齡は若い、が珍らしくも植林が良く行はれて居るのを見て清々しく感じた、そして四邊の畑には農夫が全裸の儘で耕して居る光景は如何にも原始的であつた。張渚鎮はもう山際に在つて、之より山路を辿れば四十華里で、浙江及安徽の省界に達し、浙江の長興、安徽の建平縣に通ずる要地である。自然景物は浙江方面の影響を受けて居る。張渚鎮から溧陽縣城へは幅廣い水路を漕いで數時間で到着する。此の縣城は宜溧金地方の商業



中心地であり、安徽省との交易も盛である。曾て此の地方一帯の座繰絲は此處に集まつて所謂溧陽絲として相當數量の出廻があつた。従つて縣城は活氣があり、私が行つたのは當時軍隊の大掠奪を蒙つたついで半月後の頃であつたにも拘らず、町は相當賑はつて居た。

溧陽邊に來ては大分江蘇省の奥に入つた感を催すが、事實此處から鐵道沿線に出るには眞直ぐ北へ金壇縣城を経て丹陽驛まで百八十華里の道程である。この一帯は山も丘も見えない平坦地で、見渡す限りの麥畑である。當時軍隊の引揚げに民船は徴發され、私は穢い江北船カボゼに乗つて朝の九時に溧陽を發ち夕刻金壇に着いたが、其處は平坦地に立つ單なる縣城で、蠶業上にも見るべきものがなく、其の夜に船を仕立て、翌朝丹陽驛へと着いた。

## 八 鎮江と南京

南京指して溧陽方面から丹陽驛に出て、西北に進めば、漸く平野も盡きて鎮江驛へ着く。鎮江の町は山丘を負ふて長江に面し、大運河の接續地として往時繁盛を極めたが、滬甯及津浦線の開通以來その經濟的地位を殺がれて英租界の如きも昔日の面影はない。然し江北地方との頻繁なる往來に今も賑つて居る。江畔に立つ有名な金山寺の高塔からは長江の大觀を恣にすべく、其他名所古蹟に乏しくない。更に美人で鳴る揚州に行くには、この鎮江から長江を渡つて小蒸汽により、或は對岸から乗合自動車を通つて居る。揚州には省立蠶桑模範場があり、この視察を兼ねて有名な揚州に畫舫を浮べるのも趣味多い旅行である。鎮江から汽車で更に西進すれば、一時間にして獅子山に沿ふて甍々たる城壁が現はれて來る。これが王氣の粹る金陵城であるが、滬甯鐵路の終點は下關で江を隔て、津浦線の浦口と對峙して居る。下關からは城内鐵道が通じ、或は馬車を驅

つて巨大の北門から城内に入れば流石は明の故都として北京城の壯觀と並稱するに足るであらう。

抑々南京は周廻百八十華里といふ壯大なる城壁に圍繞せられ、その城内には丘陵があり、野原があり、畑があつて世にも稀な田園都市の形態を爲して居る。北門から大道を進んで鼓樓公園に至れば、右側に我が領事館が形勝の位地に立つて居る。その直ぐ背後には頗る宏大な地積を占めて米人經營金陵大學の立派な校舎が散在して居る。この中には先年米國絹業視察團の寄附金によつて、四層煉瓦建の蠶業記念館とも言ふべきものが設けられて、蠶桑科で蠶種の製造をやつて居るが、將來米人が中支蠶業の開發に着手することあれば、先づ此處を基礎に始まるであらう。それから之と程遠からぬ所にある東南大學は北京及廣東大學と共に國立大學として規模の宏大は稍見るべきものがあり、其の農科蠶桑系は支那の蠶業教育に於て最も程度の高いものである。更に此處から大平門外に出て、中國合衆蠶桑改良會の分場は同會が此處に最も力を入れて居るといふやうに、此種機關の活動によつて蠶業開發の聲は南京より起りつゝある。即ち南京は中支蠶業教育の中心地たらむとして居るが、其の地理的關係と言ひ、政治教育の都として之に相應しく、南京の滯在には異つた氣分を味はれる。そして此處に明の孝陵を始め莫愁湖に遊び、奏准の氣分に浸るのも興味がある。

## 九 楊子江と北部

長江を渡つて江蘇省の北部は勞働者の出場所として名高い所謂江北地方で、其の地域は廣汎に互るも、主要蠶業地は靖江通州及海門地方に過ぎない。蠶業中心の無錫から小蒸汽で北へ江陰水



道を進み、中間の大青陽鎮を過ぎると、これから先き江陰縣城に至る間の水道は特に開鑿せるもので、兩岸は二三十尺の高さに掘り上げられ、そこに一面桑が長く兩岸に連り、水は縣城に近づくに従つて黄濁の色を増して居る。

江陰縣城は直ぐ前に悠々たる長江を控え、後ろの山に立つ所謂江陰砲臺が江口を扼する要地として相當繁華な町である。此處から長江を横ぎつて對岸の八圩港に渡るに、流石に楊子江は此邊でも江幅十華里に互り、渡船といつても内河の航船とは全然比較にならぬ巨大の民船で、長江の雄大闊達なる氣分は亦格別である。八圩港は江に面した淋しい渡場に過ぎないが、此處から靖江縣城に至る十八華里である。この北岸へ來ては風物は一變して江南に於ける水郷の舟行と違ひ、一輪車が音を立て、田舎道を往來して居るし、あちこちの村落には農家を繞つて楊樹が繁茂し、坦々たる平野の上に空高く聳え、その田園には北支那の氣分を加へ、南岸に對照して尠からず趣味を覺える。

靖江縣から通州に赴くには長江通の汽船に乗つて數時間江を下るのであるか、其の下航は大抵夜半であるから、電燈の輝く浮城のやうな汽船が八圩港の前を徐航するのを待受けて民船から之に乗り移れば早曉通州に到着するのである。抑々通州及海門地方は張騫王國と言はれ前農商部長の肩書と、巨萬の富を擁する張騫が、その郷土に於て紡績工場を設けてから今や二十餘萬錘を算ふる旺盛な紡績業を始めとして其他製油、製粉業等の發展に一大工業地を形造つて居る。従つて古物の城壁の如きは夙に取拂つて立派な道路を敷き、その坦々たる大道は更に四方の村落に通じて乗合自動車の往來を見て居る。そして相當な村落には電話の架設を見るなど、支那の田舎には一寸見られない施設が行はれて居る。私は通州から八十華里を自動車で疾走して海門に至つた

が、此處にも紡績工場が存在して活氣を呈して居た。自然通海地方は上海方面との交通も頻繁であるが、この一帯は船着きの悪い爲めに上海通の汽船は遠く海門沖に碇泊し、そこまで民船をやらねばならぬ。通例汽船は夕刻海門を發つて崇明島に立寄り、拂曉上海に入港するのである。斯様に江北地方は古來有名な揚州や工業地の通州を持つが、然しこの地方は概ね地味の瘦せた處で、大多數は赤貧洗ふが如き窮民である。それと言ふのはこの一帯が排水の悪い爲めに降雨が長引くと忽ち栽植物は水中に埋没して慘憺たる飢饉となるのは稀ではないからである。之を荒年といつて普通の年が三年續けば、荒年が三年あるといふこと程左様に洪水に悩まされ、流民となつて江南に流込む状況である。

## 一〇 長江を溯る

江南運河の小舟の旅から轉じて長江通の汽船で大江を溯る時は旅行氣分も一變して寛濶となり、居乍らにして支那大陸の心髓を窺ひ得るであらう。何しろ楊子江は源を海拔一萬六千呎崑崙の高原に發し、岷江嘉陵江の諸流を合せて巴蜀三峽を渦流し、愈々兩湖の平野に出てからは洞庭の水、漢水、潯陽江等を入れて悠々と流れて居る。されば上海から漢口に至る六百哩は増水の夏季に一萬噸の船を通じ、更に上流の宜昌航路三八〇哩、重慶航路三五〇哩と延長實に千三百三十哩には年間常に汽船の往來があり、尙又最近重慶より叙州を経て嘉定に至る三百餘哩の間は夏季C型(五百噸)汽船の運航を見る有様である。この上流航路の發達によつて今や上海から奥深く叙州嘉定に至るには溯航十四日歸航九日を算へ、僅に月餘を以て充分に視察が出来るのである。しかも長江の旅は宛然船は湖中を行くが如く、身は殆どホテルにあると異らぬ有様で、寛衣甲板から雄大



なる長江の景物に接し得らるゝのである。其の風物も季節によつて變化一様ではない。若しそれ陽春三月流水、鰕魚肥ゆる頃、江岸の新緑は黄濁なる江水に却て一層のうつりを見せて長江の景趣は此の季を以つて最も佳とされて居る。だがまた眞夏の候日盛の暑さも過ぎて黒煙が遠く田園に消え、夕照の江面を照らす頃から燈光魚火の點在を見る夏の夜には萬斛の涼味を覺えるし、大弧去つて小弧出づ月は照らす洞庭の秋と歌はるゝ仲秋も良い。それから江水の低く落ちて、江邊の蘆草空しく枯れ、萬物靜寂といつたやうな冬の長江にも野鴨や海豚の群が趣を添へて居る。野鴨は數限りなく群を爲して江面に浮び、船が近づいても飛ばうともしないし、また澤山の海豚が靜な江面に片鱗を現はしては波紋を残して消えて行くのも面白い。この海豚は上流八百哩宜昌に至るまで棲息し、之の現はれる時には天候が變ると聞くが蓋し長江の一神祕であらう。

偕て南京から船上の客となつて數時間溯航すれば、安慶府城も過ぎて蕪湖に着くが、安徽省寧國涇縣方面の蠶業地へは此處から道入るのである。この蕪湖の下流采石磯には捉月亭といふがあつて、これは李太白が酒を飲みて醉眼朦朧、湖中に映る月を捉へむとして溺れた所と傳へられて居る。更に蕪湖から數十華里を溯り大通口に下船すれば最近發展せる蠶業の中心たる青陽及木鎮へは半日程である。長江の山は南京の獅子山に始まつて北岸には殆どなく、南岸に沿ふて起伏し、或は遠く或は近く江流に直面して山骨を洗ひ大冶附近に終るが、就中九江の背後に聳ゆる廬山は群巒を抜き鬱然たる名山である。香廬峰を以て聞え、海拔六千餘尺、頂上に葛嶺クリリの避暑地があつて、その曲折せる登山道には溪流があり飛瀑があり南畫そのものである。しかも頂上からの展望は平野に曳く長江を始め潘陽湖を收めて眼界の潤達は言ふばかりでなく雄大である。九江から湖北省内に入つて江岸に溶鐵爐の巨體を表はすのが有名な大冶鐵山である。大冶を過ぎてからは

兩湖の平野が廣く展開して長江はうねつて居る。蘇子客と船を浮べて遊べる赤壁も詩では有名であるが、一寒村に過ぎず、特に指示を受けねば之を知らずに過ぎて數時間の後には武漢に到着するであらう。

## 一一 漢水の流域

抑々武漢の地は長江漢水の會流點に位し、之を挾んで漢口武昌及漢陽の三都市を併せた雄大な氣分を持つ珍らしい大都である。長江は尙ほ洋々として湖水のやうであるが、その水は季節によつて増減の差が甚しく冬の頃船はバンドを遠く去つて繫船するが、増水期には水標四十八呎に達してバンドに浸水することは稀ではない。數年前小川愛次郎氏の經營せる漢口中華絲廠は大水巷にあつて漢水の岸に立ち、漢陽製鐵所と對峙して居るが、漢水の水が増すと、工場に侵入して休止する有様であつたが、冬の頃に行つて見ると、漢水は岸から四十餘呎も下の方に細く流れて居た。私は一日茲處から小舟で漢水を下つて租界に行つたことがあるが、漢水は恰も谷底を流るゝやうで、江岸高く町並みを眺めながら、聽て長江に出ると、武昌城の彼方に高く黃鶴樓を望み、右手には漢陽の大別山が指呼の間にあつて、その偉觀は他に見るべからざるものがあつた。言ふまでもなく武漢は古來九省の會と呼ばれ、中部支那の中心市場である。その武昌省城は前清張之洞が治政十年の地として蠶業に對しても奨勵が加へられ、練絲官局を始め蠶業學校試驗場等の施設があり、現に製絲工場も數箇所を算へて居る。そして廣汎なる漢水流域の蠶業地を控へる湖北省の蠶業は蘇浙地方の斯業とはその系統を異にする一獨立蠶業地帯を爲して居るのである。然し最近此處へは上海當業者の勢力が著しく加はつて來て、その勢力圏内と見られるやうになつた。



漢水流域の蠶業は沔陽府一帯に互つて仙桃鎮を中心地とし、漢口から漢水を溯つて仙桃鎮に至る三百五十華里の間には數十噸の小蒸汽船が通つて居る。早曉漢口を發つて漢水を溯るに長い漢口市街を抜けて、郊外橋口には我が泰安紡績を始め工業地帯の現出を見るが、此處を過ぎれば漸く水牛や掘井戸の立つ兩湖平野が展開して來る。五十華里を進み蔡甸に至つて養蠶地帯が始まる。此邊農家の周圍には立木の桑樹が高く立ち、殊に春先の頃桑樹は發芽前に澤山の花を付けて楊樹と見紛ふばかりである。漢水を溯るに従つて江岸は黄土の肌を現はし、江南の水郷と變つて雄大且つ殺風景な支那大陸の氣分が横溢して居る。仙桃鎮に着くのは夜に入つてからであるが、鎮の家作も大抵石造で、北支那の色彩を加へて居る。それは遙に漢水を溯つて老河口から陸路を進み雲横はる秦嶺を越へれば、西安の古都に達するからである。

### 一一一 蠶業に於ける中支の地位

所謂天下十八省を遍歴して見てその富や文化乃至生活の最も豊富なる中部支那の環境に發達せる蠶業が支那斯業に占むる地位は固より重要である。之を數量に見ても江浙及皖の三省で生絲總輸出額の約四割五分を占めて居る。同時にその國內消費量の如きも蘇杭の綢緞を以て優に全支消費額の一半を超ゆるであらう。而かも産絲の殆ど悉くが白繭絲にして絲質優良なるは遙に本邦絲の上位にある。されば古來育蠶絲の法に特色ある發達を遂げ、之を支那全體の上から見れば上海を中心とする江浙の兩省は蠶業の本場であり、その核心を把持するものと謂ふべきである。斯く中支に於ける蠶業の旺盛なる現狀は最早之を北支那を始め四川其他諸省に見るやうな綽々たる餘地を残さぬ域にまで到達して居る。然しながら其の發達といふも、それは所謂

支那文明の型を踏む、謂はゞ迷信祈禱的育蠶法を脱し得ないのである。故に舊來の面目を改め、之に近世育蠶法を採り、例へば蠶種及養蠶の改良による收繭量の増加とか、或は夏秋蠶飼育の發達等を見るに至らば産繭額の如きも今よりして恐らく倍加するであらう。而して此種蠶業の改良は言ふまでもなく、農民の智能に俟たねばならぬが、江浙地方は比較的教育の普及、交通機關の發達等により人智や生活の程度の最も進みつゝある地方である。現に近年中國合衆蠶業改良會や各蠶業學校等の機關を中心として蠶業改良の機運は大に擡頭し、今や其の一部には實際運動に入つて相當効果を擧げて居るものがある。即ち最近江浙兩省に於ける蠶業の黎明的運動は支那斯業の將來に關し最も注目すべきものゝ一つであるが、更に加へて此の地方は我が九州とは一衣帶水の間にあつて氣候に於ても或は吳山越嶺の地勢から言ふも、其の環境は前述の如く本邦の狀態に彷彿たるものがある。故に優秀なる本邦の育蠶製絲の法は直に之を江浙地方に用ひて良好な成績を擧げ得ることは言を俟たない。隨つて假りに將來本邦斯業の支那への移動を想像すれば、先づ江浙地方に傳はり、此處を先驅として然る後支那全般に及ぶであらう。斯る關係よりして支那蠶絲業に對する調査研究は先づ第一着に上海を中心とする江浙地方に於ける斯業の狀態を明かにする所がなくてはならない。

### 一一三 蠶業の地方色

支那蠶業に最も重きを爲す中部支那の蠶業に就いて先づ言ふべきは其の業態が著しく地方色を帯びて居ることである。例へば江蘇省蠶業の中心地たる無錫地方と浙江省の代表的蠶業地とも見るべき湖州地方とを比較しても育蠶狀況は随分變つて居る。無錫地方の粗放簡易なる飼育



法に對し湖州地方の養蠶はその慎重なること信仰的とも言ふべきである。元來無錫の養蠶は近時器械製絲業の發達に刺戟を受けて遽に盛となつたものであるから、此の地方の養蠶家は優繭を得るに努むるよりも寧ろ多獲を望む傾向がある。之に反して座繰絲の産地たる湖州地方にあつては蠶種一枚より生絲若干量を收め得るかに目標を置くが故にその育蠶も自ら慎重なる次第である。大體に於て無錫及湖州の育蠶状況は各々江蘇浙江のそれを代表する傾向を認められる。だが然し各地を通じて更に仔細に觀察すれば、地方により諸般の事情は必らずしも一様でなく、之を栽桑に就いて或は育蠶乃至上簇法に於て地方毎に著しい異同があり、就中繭に至つては夫々地方に共通する特徴を持つて居る。それといふのは支那の養蠶が其の起源遠く、長い年月の間に各地その周境に適應する育蠶法を採つて居ること、其の方法が餘りに人為を加へず、天然育に近いものであるから勢ひ自然に支配されること強く、延いて各地に特徴ある地方色を呈するに至つたものである。仍て之に就き大要左記の地方別を列挙して見よう。

各蠶業地の特徴

地方別	栽桑	蠶種	飼育	上簇	摘要
紹興地方	高刈又は立木、間作桑園多し	紹興種にして大圓中圓及榿種	飼育丁寧、蠶室を他人に見せず	藁にて鼓狀の簇を土間に敷き上部に熟蠶を放つ	優繭にして全部器械絲原料に出廻る
蕭山地方	低い高刈仕立多し	紹興産の中圓榿種の二を用ふ	大量飼育者多し、蠶室重地	段架を組立て之に上簇す	繭には玉繭の混入甚し、産繭の一半は座繰粗絲となる
諸暨地方	略ぼ紹興に同じ	諸桂種	普通	同上	産繭は大部分繭として出廻る

餘杭地方	拳式、高刈、火桑家桑及野桑	餘杭種	飼育丁寧、蠶室重地	段架、藁にて鼓狀又は傘狀の簇を用ふ	産繭の過半は座繰粗絲となる
海寧地方	大圓桑紅皮種、火桑、苗木の産地	餘杭産の純白皮種最も多し	稚蠶に補温、絶對他人に見せず	段架を組立て必らず補温す	産繭の大部分は座繰粗絲となる、繭は綠色を帯ぶ
湖州地方	火桑及家桑の白皮種	湖州産、一部に紹興産を用ゆ、榿種多し	眠蠶に石灰を散布す、稚蠶の買賣もあり	前者に同じきも補温せず	産繭の大部分は優良な座繰絲となる
嘉興地方	大圓桑紅皮種	紹興種の大圓種多し、一部餘杭種	一部に箱飼式を行ふものあり	前者に同じ	近時座繰絲を減じ有力なる繭市場となる
楓涇地方	前者に同じ	湖州産	普通	同上	全部繭として出廻る
龍華地方	前者に同じ	紹興及湖州産	蠶網を用ふ	前者に同じ	同 上
洞庭山地方及蘇州地方	桑園は廣東式の四水六基の制による、苗木は歴條法によるものあり	湖州産の榿種多し、改良種も稍普及せんとす	湖州方面と同じ	同 上	殆ど皆繭として出廻る
無錫地方	中刈仕立、苗木は海寧産白皮種及歴條法による	自家採種の桂圓種改良種も普及せんとす	飼育粗放簡易にして開放的なり、蠶架(檯)を飼育の標準とす	藁にて鼓狀又は百足簇を作る	全部繭として出廻り中支最大の繭市場なり
宜興地方	湖州方面に同じ	自家採種の蓮心種	飼育前者よりも丁寧、石灰を用ふ	鼓狀及百足簇を用ふ	近時座繰絲を減じ有力なる繭市場となる
漂陽地方	同上	同上	同上	同上	同上
鎮江地方	桑は海寧産、仕立は無錫に同じ	近時改良種の飼育普及せんとす	普通	前者に同じ	繭市としては新場所なり



通州地方 前者に同じ 餘杭種 普通 麥稈を用ふ 繭市として新場所

安徽省地方 立木、純桑園抄し 餘杭種其他江浙より移入 飼育は原始的なり 麥稈樹枝等を用ふ 繭市として有力なる新場所となれり

湖北省地方 喬木仕立、純桑園抄し 四眠蠶、黃繭種 段飼による 前者に同じ 産繭の大半は座繰絲となる

即ち中支蠶業の生産状況は各地方により甚だ區々たるを免れないから、以下項を分つて其の内容に入るに當り、先づ以て此の地方色を念頭に入れて置かねばならぬのである。

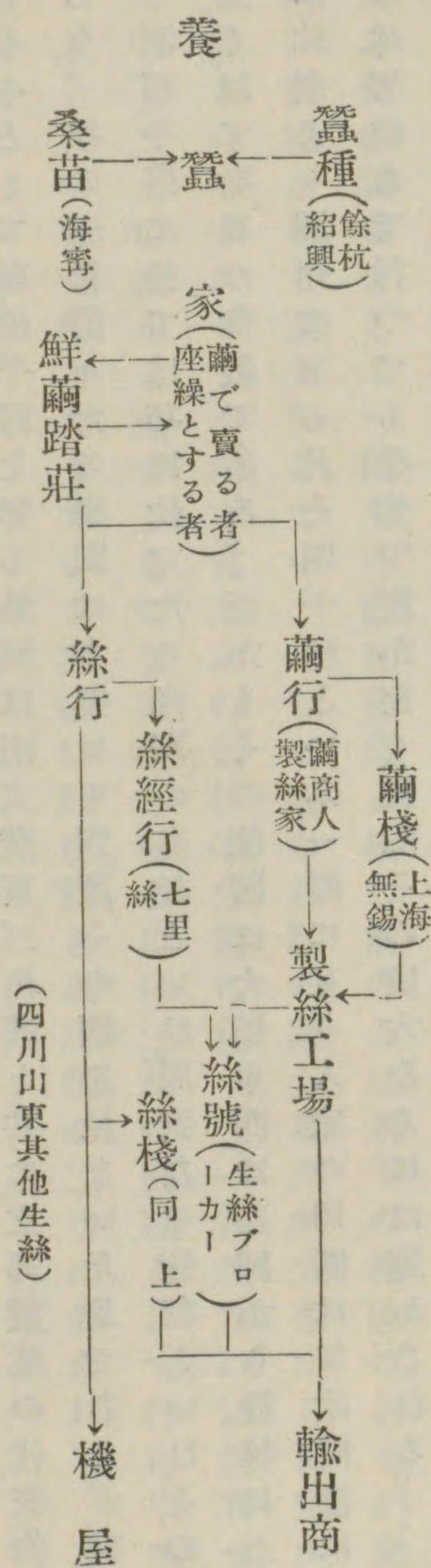
### 一四 生産及取引の徑路

抑々江浙の蠶業は幾千年の昔より鮮麗なる吳綾杭緞を以て聞え、歷朝宮廷の用命を受けて蘇杭の絹業は天下に冠たるものゝあつたことは言ふまでもない。そして蘇杭を中心とする杭州湖州嘉興松江及蘇州等各府下に亘る農民の育蠶は收購より進みて自ら繰絲に當り生絲を機業家に賣却し、即ち彼等の養蠶は生絲を作るのが目的であつた。此の徑路は今日に至つても變りなく殊に最近發達せる杭州及盛澤等機業地の旺盛なる需要に伴ふて今尙ほ座繰絲の生産は遽に衰へる模様もなく、座繰製絲業が器械製絲業に嚴然對抗し湖州を中心として其の牙城を擁して居る觀を呈して居る。

而して一方歐人の東漸に連れて其の座繰絲の一部は歐洲に輸出の道が拓かれて所謂七里絲 Tsatlee として需要さるゝに至つた。更に近世上海及無錫に器械製絲工場の設置を見るに及んで器械製絲業は年と共に發達を來し、從來の座繰業地は方向を轉換し、繭市場として開拓され或は無錫地方の如き俄然蠶業の勃興を見るに至つた。そして器械製絲業は將來益々座繰絲の領域に喰

ひ込んで行く勢にあるが、それにも拘らず現在座繰絲の生産額は器械絲の産額を遙に超過し、中支蠶業はこの兩者が依然兩々對立の勢を示して居ることは興味ある事實である。

同時に斯業の生産組織が分業的に發達して居ることは特徴の一つであらう。それは勿論生産能率の上から來た分業ではないが、例へば桑葉買賣の頗る盛なことや稚蠶買賣が行はれ或は桑苗及蠶種製造地が發達して居るといふやうに各地特色を以て有無を相通ずるといふ狀況を示して居る。此の傾向は察するに蠶業が古くより發達をして居ることや此處の國民性の然らしむる所であらうが、今是等の生産組織及取引の徑路を一目明瞭たらしめる爲めに左圖を掲げよう。





## 第一章 栽桑業

## 一 盛哉浙西の桑園

太湖を中心として蘇浙平野を彩る桑園は南支廣東三角洲と共に支那蠶業の代表物と言ふべきであらう。彼の滿目鬱々たる桑園は本邦にも到底その類を見ない光景であるが、就中太湖の南に續く浙西平野に於ては巧に仕立たる高刈の整枝といひ、周到なる管理といひ、その美事なる桑園は全く以て斯界の偉觀である。而かもその範圍は大體東西は嘉興から餘杭に至る凡そ百哩、南北は杭州より湖州に至る凡そ四十哩といふ一圓に互り、人家の周圍は勿論縱横に走れる運河の兩岸は何處まで行つても桑畑で涯がなく、實際その廣大なるには驚かされる。

所謂江南の沃野に限つて、斯くも濃厚な桑園が何故に現出したかに就いては、先づ此地方が古來蘇杭絹業地を控へて自然蠶業が農家の主要な生業を爲すに至つたことは擧げるまでもないが、更に地勢上千里の沃野に蜘蛛の網を張るが如き運河に就き、その兩岸幾分高地を爲す一帯が栽桑に甚だ良く、殊に此處は天與の肥料とも言ふべき河泥を得るに便なることが、即ち桑園の發達を促した主要原因として之を看逃し難い。此の施肥—沖積土—水邊等に恵まれて桑樹の發育が良好なるは言ふまでもないが、同時に桑園の管理もほど良く手入され、此邊の農家は蠶を飼ふよりも寧ろ桑を作ることを得意とするものゝ如くである。思ふに此地方の育蠶法を看て以

つて幼稚と爲す蠶業視察者と雖も恐らく栽桑法に對しては聊か驚嘆を禁じ得ないであらう。畢竟這は悠長なる此處の國民性が斯様な自然物の取扱に特技を持つによるべき歟。

## 一一 桑の種類

そが旺盛なる栽桑に就いて、先づ桑が如何なる品種かと言ふに一括之を魯桑と答ふる外はないが、この魯桑も永年蘇浙の環境に入つてから一段の向上を來し、湖州を中心とする蠶業の所謂本場物になつて一般に湖桑と呼ばれて居る。此の湖桑に對し浙江の産苗地より特に江蘇省の無錫常州方面に需要さるゝ一種を一般に魯桑と稱し、前者とは若干の相違はあるが、然し湖桑も魯桑も同一系統と見て差支あるまい。そして此の品種に關し専門的立場から研究すれば、幾通りにも分類されるであらうが、地方當業者の通俗的分類に従へば、(一)實生苗の儘發育せしめる桑を野桑と唱へ、(二)之に接木を施せるものを家桑と稱し、更に(三)此の別種として特に早生稚蠶用の火桑といふを加へて三種となり、次いで家桑は紅皮種と白皮種の二つに分たれる。之に就き左に少しく説明を加へやう。

(一)野桑 一名荊桑とも言ひ、實生苗の儘接木を加へないものゝ總稱と言ふべく、特に杭州餘杭方面に互つて相當多く見受けられる。野桑は桑園の一部に混植されて居るし、或また人家の周圍にも巨姿を現はして居る。加へて野桑も亦た拳式高刈に仕立てるが、新梢は冬季拳の箇所より一尺位の長さに剪つて芽を止める。それは之を家桑のやうに新梢を伸ばすと、花ばかり吹い



て葉が付かぬからである。何故に杭州餘杭地方に互つて比較的多くこの不經濟な野桑を栽植するかに就いては夏蠶用に使ふからでもあらうし、また農民のいふのには川に面せる傾斜地や桑畑の周端等肥料の届かぬ場所に之を植ゆることとなるが、其の主要なる原因は桑樹の造成法から來て居る。即ち此の地方は土質の關係から接木類は移植に適せず、之を栽植するも樹勢劣弱であるといふ。そこで實生苗を桑園に植付けてから除々に二年目或は數年目、遅きは樹齡十數年のものに對しても据接をやるからである。野桑は發芽最も遅く、壯蠶用に充て、繭に光澤を増すと云ふ。尙ほ野桑は毛桑とも呼び、或又鳥桑と呼んで居る。それは鳥類が黒熟の桑椹を啄み、其の糞中より生ずるといふが如きは支那人らしい話である。

(二)家桑 家桑は一名接桑オエサツと呼び、發芽稍遅く壯蠶用として最も多く栽植されて居る。之に白皮と紅皮の二種がある。前者は葉形に於て立派な大圓形を爲し、樹皮赤褐色を呈するにより一に大圓桑紅皮種と呼ばれ、海甯嘉興一帯を始め紹興地方に最も多く栽植され且又外省に移出さるゝ數量も尠くはない。後者の白皮種に至つては先づ樹勢に於て前者は眞直に伸長するも、白皮種は彎曲する癖があり、節間も多少長く、葉着は疎らにして樹皮の白いところから尖葉桑白皮種と唱へられ、湖州方面に廣く栽植されて居る。その葉質及收穫量は前者に比して劣るも、樹齡の點に於て紅皮種は僅に二十年の壽命であるが、白皮種に至つては三十年に及ぶといふ。

(三)火桑 一名早桑の稱があり、廣く浙西の養蠶家が特に稚蠶用として一部この早生種を準備することは流石に蠶業の本場と聊か羨望の感なきを得ないであらう。火桑の苗木は一見梨の

苗木に酷似し、樹皮暗褐色を呈して居る。此の火桑を人家の周圍若くは之に隣接する桑畑に植付けることは其の利用上然らしむる所であるが、中には柿の樹と見紛ふばかりの大樹が尠くない。それといふのは此種は細い枝條に葉肉は厚くして柔く、且つ葉柄と桑皮との固着力が強い。それに家桑に比して新梢の伸長は短少なるを特徴として居る。随つて之れが仕立には通例拳式を採らず、その摘葉に就いても他種のやうに伐條することなく、皆手にて摘採してから梢端は必らず數葉を残して置くのが常である。火桑の特に多いのは蠶種製造に速成飼育法を行ふ餘杭地方で、此方面に於ける火桑の仕立方は家桑と大差ない。

### 三 育苗と其產地

當初苗木より觀察するに、先づ其の育成法には實蒔接木法と壓條法とが行はれて居るが、前者に就き專業的な産苗地として古來有名なるは浙江省海甯、石門及桐鄉諸縣の一帯に互る地方で、此地方の育苗業は支那蠶業上に到底その名を逸することの出来ないものゝ一つである。此處の苗木は省内は固より隣の江蘇安徽を始め遠く山東直隸及河南諸省に供給せられ、現に一九二四年長安驛から長安廣利桑秧公司の手に發送せられたる數量を見るも、天津向二七萬株、三二五棚芝罘向一〇萬株、二〇〇棚及南京向三千株、六棚等大約四十萬本に近い數に達して居る。大體此地方の生産年額は大約五十萬本、金額にして六七十萬元といふ輪廓であるから、地方産業としては馬鹿にならない。此の産苗地と言ふのは詳しく言へば周王廟チウワンミョウ及天花蕩チエンカウダウの二地を中心市場



として西は長安鎮、東は謝橋から北は石門に亙る一圓で、育苗業の盛なることは殆ど農家の主業を爲して居ると言ひ得るであらう。何故ならば此邊の耕地は通例米を作つたあとには桑苗が植付られ、苗圃の次には米を作るといふ具合に米と苗木との輪作が行はれて居るのを見て、其一班が窺はれよう。そこで苗木の育成法を説明するに、先づ此地方で使ふ名稱から明にして行くと、苗木は桑秧と呼ばれ、之を作るまでに次のやうな區別をして居る。

廣秧 實生苗にして、通例カンウと呼んで居る。これは専門に他に賣る目的で栽培される。

野桑 廣秧を苗圃に植付けた即ち實生苗二年生のもの。

家桑 野桑を翌年接木したる苗木。

毛桑 野桑に接木せず其儘苗木とするもの。

即ち前記家桑と毛桑とが苗木として賣出される譯であるが、先づ順序として廣秧から述べて見よう。實生苗即ち廣秧を作るには、先づ其の種子は桑湛の熟したるものを取つて、策に入れ、水中に掲ぎ廻し、之を天日に乾燥したるものを、陰曆の五月頃播種する。苗床は幅六尺位の畦を作り、之に人糞を施し、斯くて種を下ろしてから、之を足にて踏み付けたる後、藁を苗床に敷いて發芽を保護する。次に下種後二旬を経たる頃、井水を撒いて藁を除去すといふことである。

翌年の舊二月頃この苗を取つて四五十本を以つて一包とし、その二十包を一捆、凡そ千本として、之を廣秧行といふ問屋に賣るのである。廣秧は周王廟附近に最も多く生産せられ、此處には廣秧行が七八家あつて各地育苗家に實生苗を供給して居る。それから普通廣秧を買入れ若く

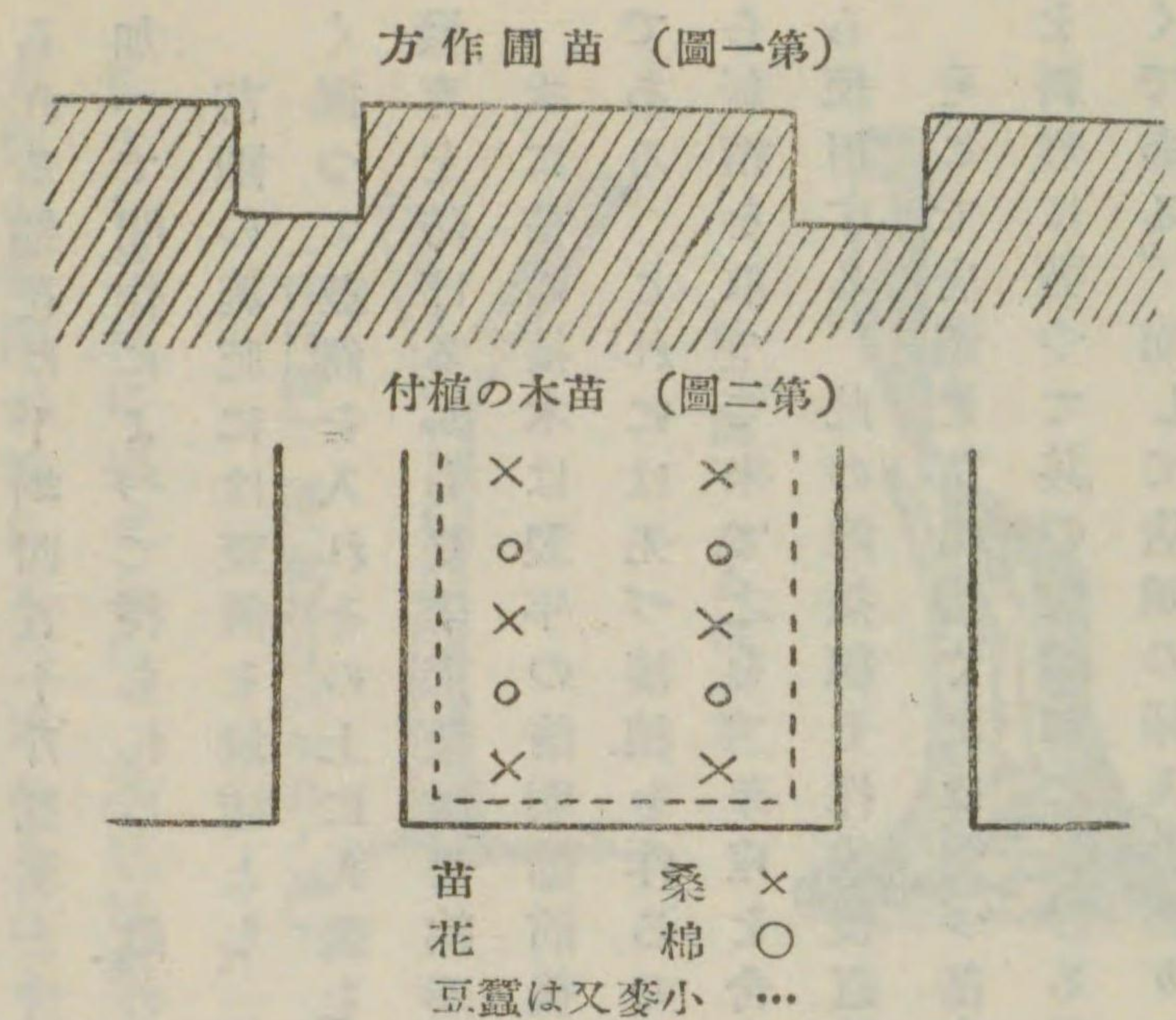
は自ら栽培し、之を苗圃に植付けて苗木を作るまでの順序は前述の如く米と輪作するから、自然耕地の利用は次の如くに行はれて居る。

第一年目 稻作、秋末稻を刈りたる後苗圃を作る。

第二年目 桑苗の植付、春季苗圃に廣秧を植付く、但しこの年には苗の株間に棉花を栽培し、又畦の周端に小麦、蠶豆等を間作する。

第三年目 桑苗の接木、春季接木を施し、翌舊正月頃苗木を採る。この年は間作を行はず。

第四年目 稻作、但し苗木を採らない時は兩槍といふ兩枝のある苗木に仕立てる。  
苗の植付に付いて先づ苗圃は秋末稻を刈りたる後に



(第一圖の如く)凡そ四呎の間隔を以て深さ一〇呎、幅七呎位の溝を掘つて畦を作るのである。そして掘り取りたる土塊は之を普通桑園に搬出して肥料とするのを暫見受ける。斯くして翌年四月初旬實生苗を植付けるので

あるが、その年は苗からの収入は得られないから、間作として先づ秋末畦の周端に一線小麦又は蠶豆を栽培する。次いで春季清明節前後に苗の植付が行はれ、その植付方は(第二圖の如く)畦に

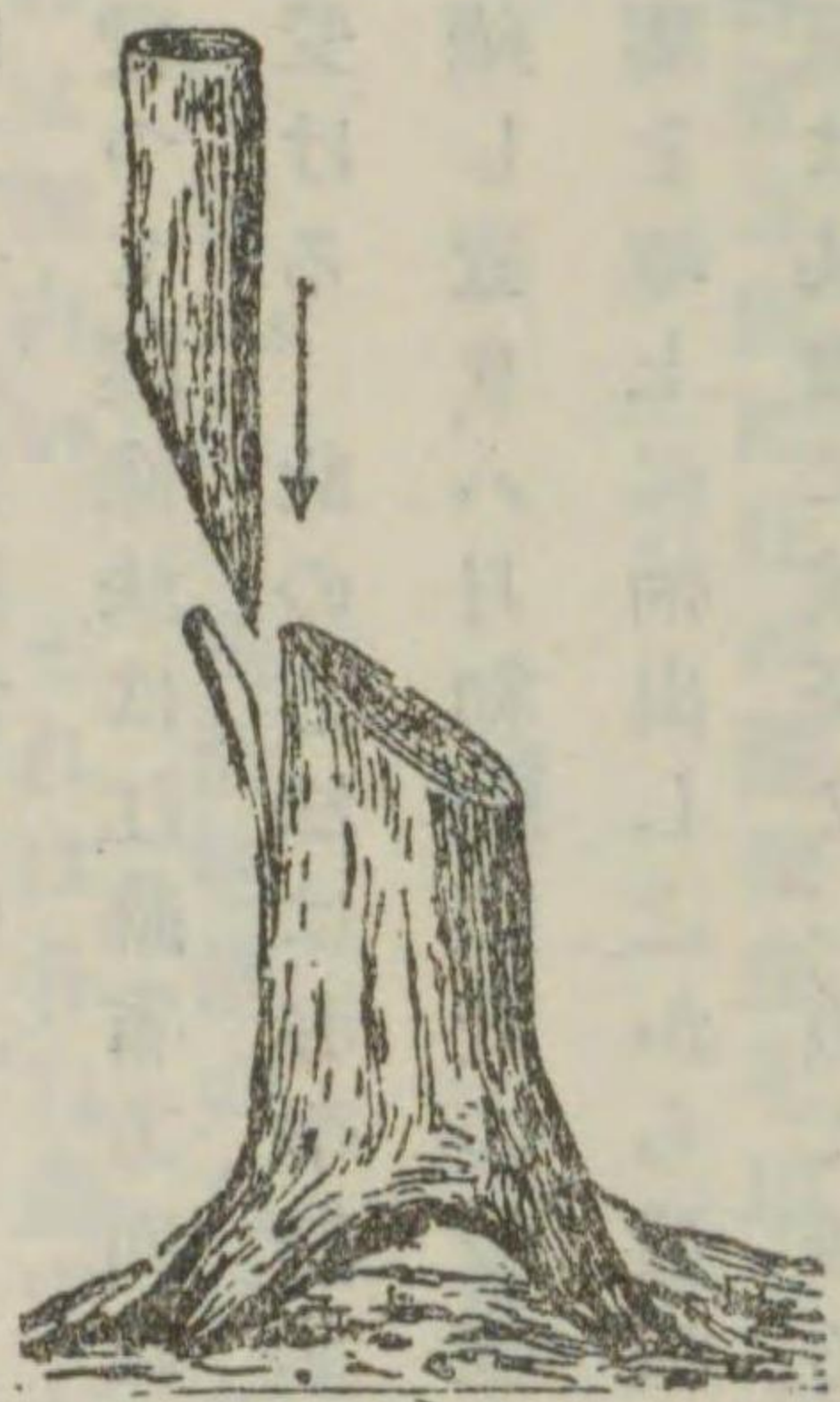


凡そ一呎半の間隔で二列に植付け株間の距離は凡そ一呎である。そして株間には舊四月頃に至つて棉花を播種する。一畝(約我が二百坪)に對する植付数は約二千本にして、また一畝より得られる棉花は平均四五十斤見當と言はれ、その價格百斤凡そ十八元其他小麦又は蠶豆の收入を加へて、間作によつて得られる一畝の收入は十數元と見込まれて居る。

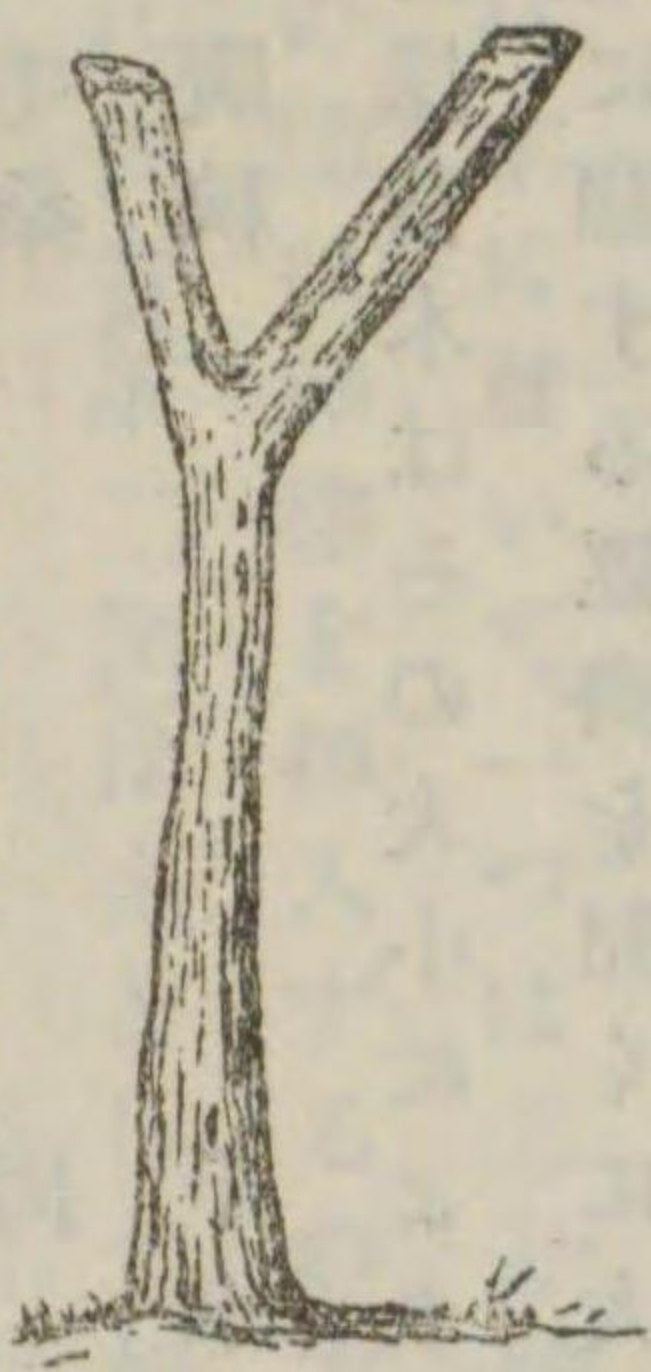
苗圃の施肥には豆餅を最適とし、一畝に就き豆餅三四枚價格約十二三元を投じ、苗の列間を淺く掘つて豆餅を入れ、その上に人糞を施して居る。斯くて桑苗を餘りに伸長せしめると棉花の發育を防げるから、夏季末桑枝を輪形に圓めて終ふ。

次に苗の接木は翌年の清明節前後に行はれるが、其の方法は一種の根接法とも言ふべきものである。これには先づ接穂を作るのであるが、之を店頭(ライネド)又は扞頭と呼んで居る。店頭は桑園から新梢を取つて來て、之を二芽宛を含む部分に幾つにも切斷し、之を三四日間土間に放置してから使用する。此の際接穂を採伐後直ちに使用すると水分が多過ぎて成績は良くないと言ふ。

そこで店頭を苗に接ぐには、先づ苗の根元を掘つて、根を現はし、幹と根の接續する黄色の部分に斜形に剪つて其の尖端部に於ける樹皮を爪先にて裂き之に接穂を挿入すること(第三圖)の如くである。而して店頭の挿入を終りたる時は直ちに土を覆ひ別に挿入部を緊縛しないから、此仕事は比較的簡單である。従て普通接木の作業は三人のものが一組になつて、先づ一人が根元を掘ると次のものが接木を施し、それから最後のものが根元の土を覆ふて行く順序で、一日に一干本の接木はた易くやり遂げて終ふのである。この接木苗は翌春賣却するまでには幹の周圍



(第三圖) 苗の接木法



(第四圖) 兩(槍)植付三年目ノ苗

二三寸に成長し長さは三四尺のところまで切つて終ふ。尙其年に苗を採取せず其儘成長せしめる時は、根際より約二尺五寸位の高さに於て兩枝に分たし、長さ五尺位の苗木とする、之を兩

槍(第四圖)と呼び、植付後三年目の苗木で、値段が一番高い。

更に毛桑、即ち接木せざる苗木は苗圃に實生苗を畦に三列として一畦三四千本に密植栽培する。此の苗木は嘉興硤石方面に需要され、是等地方では桑園の補植としてこの毛桑を植付け、翌年之に据接を行ふが、其の方法は次項に述ぶるであらう。

轉じて苗木取引は前述周王廟及天花蕩の二地を集散市場とする。周王廟に出廻るものは皆大圓桑紅皮及尖葉桑白皮の湖桑で、就中前者の廣く省外に需要さるものは長安驛より發送される。それから後者の天花蕩は通例魯桑と呼ばるゝ苗木の集散市場で、此處の苗木は前者に比し遙に倭少にして

長さ一二尺に過ぎない。之れは始ど皆江蘇省の無錫常州地方に需要されて居る。即ち江蘇省方面の桑園が孰れも浙西のそれよりも樹勢の倭少なるは一つには此の苗木の相違から來る。取引の時期は舊正月月中旬から二月迄の間に行はれ、産地には桑秧行といふ問屋があつて此の手を経て買賣される。此時期になると、需要地の常州無錫及丹陽地方には桑苗の市が開かれる



が、賣人は其市に先だち、船を持つて天花蕩に仕入に來るものもあれば、また産地の商人が需要地へ販賣に出掛けるものもある。産地に於ける買賣は苗圃の現場を實見したる上、値段は百本建を用ひ、通例二百本を一個に蒲包し、其の相場は年により高底あるも大略左記の如くである。

家桑接木苗	百本	二〇〇元
兩槍(同四年生)	同	八—一二、〇〇
毛桑	同	六—〇、七〇
廣秧	千本	一、〇〇

前掲苗木はその大小により四尺物、五尺物等によつて價格に多少の相違はある。尙又此の育苗業に關する經濟を聞くに、大體一畝に對する苗木の収入は凡そ五十元にして、之に要する生産費は二十五元見當といふ。

變つて壓條法は江蘇省方面に互つて廣く補植用に行はれ、就中洞庭山及無錫地方に最も多く見受ける。此の方法は春季摘葉の爲め枝條を伐切する時先端に數葉を附けたる二三本の枝條を残し置き、六月初旬頃此の枝條を地上に横臥して之を淺く埋没してから先端及先端に付ける桑葉を地上に抽出し之から發根せしめて獨立せる桑樹を仕立てるが、此際母樹との連絡を切斷し或は其儘に成長せしめて居る。母樹は之を本桑と言ひ、之より壓條によつて取つたものを子桑と呼んで居る。壓條法の盛なる蘇州府下洞庭山地方の桑園は之が爲めに甚だ密植となり、各株の間隔は甚しく不規則に雜然たる状態を呈して居る。此地方では接木法は桑樹の仕立に五

六年を要するが、この壓條法による時は二三年で充分であるといふ。元來浙江省の農民は大抵自ら接木法を心得て居るが、江蘇省の農民に至つてはこの技を持つものは甚だ稀であり、自然江蘇省方面に此の壓條法を用ふるものがある次第である。

#### 四 接木と仕立方

陽春三月の候清明節の前後に浙江の田舎をさまよへば隨所桑園の中に接木の施せるを見るのは面白い。それは各自農家が年々補植用として實生苗を植付け、之に据接をやるからである。この接木法には二通りの型がある。といつても挿穂の作方は同様である。然し嫁接を行ふべき砧木に就いて、一つは之を切斷して其個所に接木をやるのと、他は砧木の樹皮を人形に裂いて其の間に挿穂を挿入する方法である。普通前者即ち第一法は多くは二三年生の若木に適用され、後者第二法は主として相當年齢を經過せるものに對して行はるるを原則とする。第二法による時は嫁接を失敗しても樹勢や樹命に支障を來すことなく、數年掛りで徐に接木の完成を遂げ得らるる譯である。

そこで挿穂は手近の桑樹より適宜葉芽を持つ新梢を採つて凡そ二寸の長さの長さに剪り取り之を斜に裁ち、それから裁斷面の脊面に當る部分も滑かにする爲め、薄く樹皮を削ること第一圖の如くである。次いで第一法による砧木は太くても幹周六七寸のものに行ひ、之を切斷する個所は根元に於て或は二三寸高或は一、二尺高といふが如く一樣ではないが、之を水平に切斷したる後



其の切斷面の一端を樹皮に若干の材質を持つやうに之を裂いて、その間に挿穂を第二圖の如く凡そ一寸の深さに挿入するのである。そして此の挿入方は穂の截斷面を樹皮に面着するやうに挿さねばならぬ。斯くて其の箇所を藁を以つて堅く縛し、切斷面から水液の出ぬやうに其面に泥を塗り再びこの全部を藁で縛して覆ふのである。反之第二法は接木を施すべき桑樹の幹若くは枝の適宜の箇所

第一圖



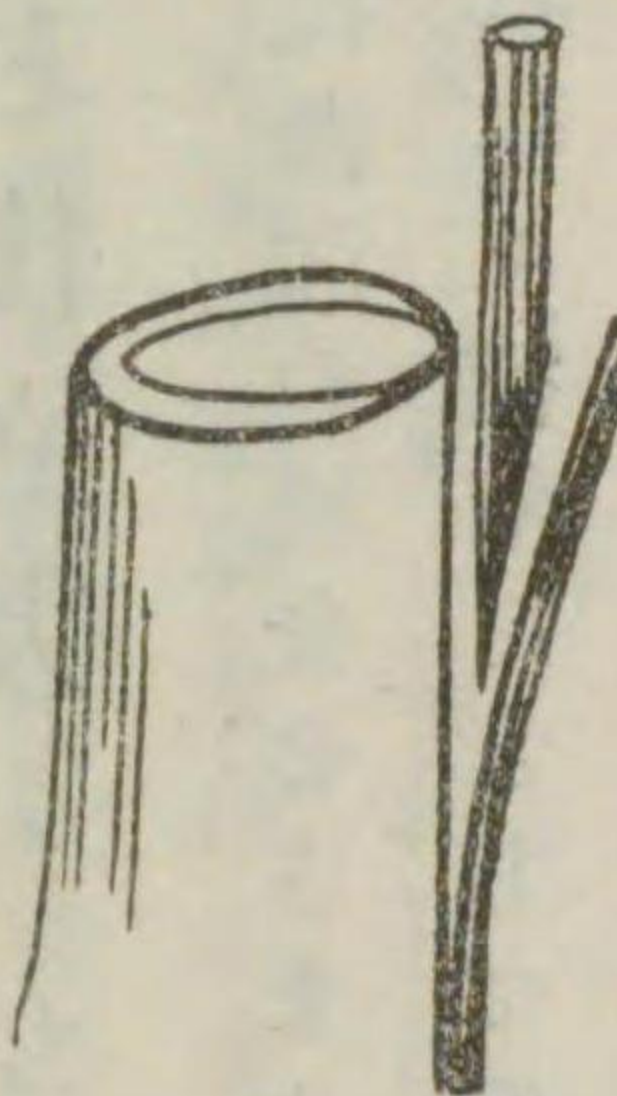
第二圖



第三圖



第四圖



施し、その箇所には恰度圓形の竹籠を被せたやうに、竹を以てその周囲を編みて、挿穂から發生する新芽を牛に喰はれぬやうに保護するのを暫見受ける。斯様に接木法は地方的に其法を異にし、海甯嘉興地方は主として第一法を探り、また杭州から餘杭地方は殆ど皆第二法によつて居るが、這是此地方が既述の如く先づ實生苗を植付けて然る後接木を施すからである。

桑の仕立方並に桑園の造成に就いても、地方により夫々趣を異にして居る。先づ蘇浙の代表的桑園とも言ふべき浙西地方から見ると、杭州餘杭及德清等の一帶に亙る廣大なる栽桑地帯には概ね樹齡十年以上の揃つたものが多く、拳式による高刈仕立は見るからに氣持が良い。桑園一畝地モウヂ凡そ我が二百坪以下做之の植付数は百四五十本乃至二百本見當で、株の距離は五六尺の間隔を保つて規則正しく植付けてある。然し拳式といふも拳部の位置や分岐の條數は一定せるものではないが、拳部は大抵五六尺以上の高さにあつて、中には春季拳部より伐條の際特に横に伸長せる枝條の一本を残し、翌年は之を土臺に上空に向けて數枝を發生せしめるものもある。斯様に仕立方及整枝にはなるべく空間の利用に意を用ふるが故に、葉盛りの頃樹下は薄暗いまでに良く繁茂して居る。此の情景は海甯地方に至るも變りないが、桑樹は所謂紅皮種となり、拳式もあれば無拳式もあり、海甯から嘉興に近づくに従ひ漸次若木を多く見受ける。そして嘉興及桐鄉縣地方になると、桑園に蠶豆を始め煙草を間作するものが尠くない。此種桑園になると稍粗植となつて一畝地に百四五十本を數へる。然し浙西地方全體を通じて桑園は殆ど皆専門的と言ふべく、間作桑園と見らるるものは稀である。

この桑園の天地とも言ふべき浙西地方に對抗する江蘇省の中心地たる無錫常州方面に至つては様子もガラリと變つて拳式中刈仕立の桑園が茫々と展開して居る。此地方の拳部は二三尺の高さに置かれ、自ら密植で一畝地の植付数は凡そ三百本である。それに栽植は浙西地方は平面的に畦を設けずに植付けるものが多いが、後者に至つては幅六七尺の低い平畦を造り、其兩



側に二列に栽植するものが多い。詰りこれは蔬菜の間作若くは河泥の施肥方法の相違による。斯く江蘇省の栽桑か浙西地方と其趣を異にする原因は詳かではないが、先づ第一に苗木は既述の如く浙江は湖桑の紅皮白皮の兩種なるに、無錫常州地方は石門縣天花蕩産の魯桑を栽植することや、土質から言つて太湖の南に面する浙西地方は高地なるが、太湖の東北部に當る此地方は土地低く桑根は浅いと言はれ、栽植に肥地は粗植、瘠地は密植なる原則により且又新場所として勢ひ桑樹の造成に急なるが爲めであらう。斯くて此の地方の栽桑は浙西に較べて若干遜色あるを免れない。

轉して錢塘江の南に當る所謂浙東の代表的蠶業地たる紹興の嵒縣新昌地方に於ける桑の仕立方は高刈といふも蘇浙平野のものよりは遙に老大で、高さ五六尺の箇所より分枝され、それより高位に拳式を持つた大樹が尠くない。随つて株の距離は廣く二三間の間隔を持つ間作桑園が多く、純桑園に至つては之を嵒邑から東郷方面に見るのみである。間作としては麥を主とし、其他煙草蠶豆である。更に粗植なるは恰も麥畑に桑樹の間作せられたる如きものがある。それで繭の出廻頃に此地方に出掛けると、最早青々と茂つた桑樹はすつかり裸となつて、その代りに刈取られた小麥か桑枝の一面に吊り懸けられ寸度變つた風致を添へて居る。即ち江浙兩省に於ける桑園の形態は紹興地方の巨大なる高刈仕立の間作桑園と浙西に於ける高刈純桑園、それから無錫常州地方の中刈仕立との三様式に大別され、是等が代表的蠶業地として夫々特徴を有し、其他地方は前者の孰か一つに屬するものと見られる。

## 五 桑園の分布

蘇浙の桑園は省内各地を通し普遍的に存在せずして、寧ろ太湖を中心とする地帯を主とし、其他僅か二三地方に點々濃厚の密度を以て偏寄つて居ることは屢述せる所である。之に就き傍ら蠶業の地域を明確にすべく、桑園の分布を窺ふに、先づ順序として早場所の紹興地方は殆ど曹娥江流域に限られ、それも桑樹を見るは曹娥鎮から溯江して漸く上浦邊からで、此處より分岐する支流に沿ふ湯浦王壇等の溪間地にあつては人家の周圍や畦畔に栽植されて居るに過ぎない。本流筋に戻つて三界鎮附近から上流地に向つては漸次桑樹を増すが、然し嵒邑に近くまでは山岳重疊の間兩岸に沿ふて帶のやうな平地に桑と麥との間作桑園を見る程度である。嵒縣新昌平<sup>だ</sup>に入つては嵒邑附近に互つて桑樹は頗る多く、此處を中心に四方に分散して居る。その最も熾盛なるは東郷と呼ばれる黃擇鎮及新昌縣城方面で、奥の華堂に至るまで立派な桑樹が立つて居る。然し其の栽植は主として人家の附近に限られ、浙西平野に見るやうな一望千里の光景は見られない。東郷に次いで桑の多きは北郷南郷及西郷の順序であるが、之を總じて紹興地方の桑園状態は恰度本邦の蠶業地に見るやうに散在し、其の栽桑地は耕地面積の二三割を出でないであらう。何しろ此處の山間は耕地に限りあつて、米麥の一部を移入に仰く有様なれば平地は固より傾斜地と雖も是等の耕作に迫られ、且又有利なる煙草栽培が行はれ、之が爲に桑園の増加を抑制されて居る。甯波より紹興府城を過ぎて西興に至る所謂紹興運河の一帯は水田打ち續



き蕭山縣管内に這入つても、殆ど桑を認めない。蕭山縣の栽桑地は此の運河を離れ、錢塘江に近づくに従ひ水田なく、江に面せる茫茫たる沙地の平野は一面青々とした桑園か、左なくば植棉地に蔽はれて居る。その東沙及西沙と呼ばれる地方が最も熾盛で、桑樹は江蘇の無錫地方に似て拳式は低く仕立ててある。この對岸は海寧地方で、桑不足の場合などには此處より盛に對岸へ輸送される。次に蒲陽江流域の諸暨縣は前述嵯縣新昌地方と同様に純桑園を見ることは比較的稀であり、更に錢塘江の上流富陽桐廬及蘭溪地方は新場所として囑目されて居るが溪間地のこととて遽かに其の増植を期待されない。

愈々本場の浙西平野に入つて濃厚なる桑園が何處まで擴つて居るかと言ふに南端杭州海寧地方は波打つ錢塘江に斷たれ、北端湖州方面は太湖に達し、それから西方の餘杭、武康、德清及長興諸縣は安徽省境の連山に盡きる、此間の平野は何處まで行つても地平線上殆ど桑の連續である。この濃厚なる密度は東へ押し、南潯、桐鄉及硤石方面に延び、續いて江蘇省境に近づくに従て漸次薄らぎ、東南隅も平湖、海鹽に至つて疎らとなる。斯くて省境に沿ふ平望や楓涇等を過ぎて江蘇省内に入れば殆ど消えて終ふ。此の熾盛地に於て平野を縱横する水路の兩岸及農家の附近を中心として高地は皆桑、低地は水田である。そして桑園は恐らく耕地の三四割を占めるであらう。

飛んで上海近郊の龍華には浙江系桑園を相當見受けるが、其の範圍は狭く、其他南翔及崑山にも多少養蠶は行はれて居る。然し上海に接する地帯は一面の栽棉地と言ふべく、鐵路より桑樹

を見るは蘇州も過ぎ次の驛站滄墅關附近からで、無錫に近づくに従つて著しく濃度を加へる。此の方面とは別箇に蘇州即ち吳縣管内には西方太湖に突出する洞庭山地方に頗る盛な栽桑地帯が横はつて居る。然し此地方の栽桑状態は浙江系統に屬するもので、例年豊富なる桑葉の一半は太湖を渡つて對岸湖州南潯方面に供給される。無錫常州地方に於ける栽桑地帯は無錫常熟、江陰及武進の四縣に亘り、中心の無錫を最高密度として四方に展開して居る。その東路は蕩口、常熟縣城に延び、北路は江陰水道を中心に揚子江に達して居る。就中青陽鎮より江陰縣城に至る水道の北半は特に開鑿せられ、その土壌は兩岸二三十尺の高さに堆積して居るが、其の一帶桑樹の長く連る光景は偉觀の一たるを失はぬ。西路方面は鐵路から見ても横林から常州驛までは依然たる濃度を保ち、常州より奔牛を過ぎれば漸次其の度を減じ、拳式中刈仕立も無錫地方のものより一層低く、且つ尠からず新植を見る。更に南路は和橋及宜興縣城に至るまで太湖に沿ふて一望の桑園である。之を要約して無錫常州地方に於ける栽桑状況は無錫を中心として四通八達せる水路に沿ひ、其の兩岸は殆ど例外なく桑園を形成し、兩岸を離れては多くは水田又は麥畑である。其の栽桑面積は之を浙西地方に較べては未だ遠く及ばないが、兎も角も此地方は器械製絲業の發達によつて急激なる増植を促進されたもので、之を古老の言に聽くに、無錫地方に於ける一望千里の桑園も今から數十年前までは未だ寥々點々たる狀況に過ぎなかつたと言ふことである。

更に新場所の宜興、溧陽及金壇地方に於てその廣大な平野は一望殆ど麥の地平線を爲し、桑樹



を見るは殆ど村落附近に限るが、山手の安徽境に入つては相當に多く、桑は浙江系に屬して居る。此の地方より北進して鎮江南京地方に至つては濃厚な栽桑地帯の點在を見ないが、近時傾斜地に隨所新植を見る有様である。然し鎮江の下流約二十哩に太平島といふ大きな島が江中に挟まつて居るが、此の全島は一面桑樹で蔽はれて居る。其他長江を渡つて海門通州を始め所謂江北地方と南京より安徽省に入つて丹陽鎮を始め此の方面は將來栽桑地として殘されて居る地方である。

## 六 桑園の管理と施肥

桑園の手入を始め野良の仕事は丁度桃の花咲く清明節普通四月上旬頃から始まる。古來この節句は本邦で言へば彼岸の墓參に當り、此期に田舎に行く、田園に散在する墓側に立つて働哭して居るのをよく見受けるが、近來此の日を一名植樹節と稱し、學校なども休業して植林をやることになつて居る。それから農家では此の節句に新柳を折つて之を門柱に挿し飾る式例で、中には柳と桃花とを一束にして飾るものもあり、支那の農家にも此のやうな田園趣味に相應しい風流がある。詰り農家は長い冬眠よりして此の節句から農耕にいそしむ譯で、桑の芽を吹く(開花といふ)のも此の時分からである。即ち桑園の施肥耕耘は清明節の頃一回、それから春季摘採後の六月及秋末と少くとも年三回は必ず手を入れる。之に就いて先づ言ふべきは天與の肥料たる河泥である。「桑は河泥少きに興らず」と言ふが如く、桑園が運河の兩岸に存在する一半

の理由は此處にある。兎に角江南地方は上海と蘇州とが殆ど水平を爲す有様なれば、此の平野に錯交する運河の流は極めて緩かである。故に水底に茂生する水草や有機物によつて堆積する所謂河泥が肥効に相當の價值を持つことは言ふまでもない。(第五編第二章第四項參照)而かもこれは桑畑の直ぐ近くに無代價で得らるる便宜よりして最も廣く賞用され、桑の殆ど唯一の肥料たる所以である。

従つて河泥の採取は専門の仕事として營まれ、多くは江北人の專業に屬して居る。彼等は自ら船を備へ、中には之を家とするところの貧民の徒である。採取の道具と言へば長い竹竿二本を銚のやうに組合せ、その各先端に筴状のものを附し、此の間に泥を挾んで船に汲み取るのである。河泥が船に滿つると、之を施すべき桑畑の岸に至つて船から岸へ板を渡し、河泥を肥桶に移して天秤棒に擔ひ畑へと運搬する。斯く採取から施肥までが江北人の仕事になつて居るから桑園の管理者にとつては世話はない。船一隻の容泥量は固よりその大小によつて異なるが、普通之を表はすに肥桶の個數により、例へば一船十六擔入と言へば十六回「かつぎ」即ち肥桶三十二箇分を意味して居る。大抵一船十六擔入若くは二十擔入、二十五擔入のものが多く、その大小によつて一船當りの値段が異ふことは勿論である。肥桶は略ぼ本邦のものと變なく、之と同様糞尿の賣買の如きも矢張この擔數によつて計算される。河泥の收容には船の中央部を充て、長方形に一船十六擔入のものを測りたるに長五尺、幅四尺及深一尺五寸の容積を示した。一日の採泥量は普通夫婦二人掛りて施肥の手間共前記十六擔入五船を得る割合である。



河泥の施し方には二通りある。一は肥桶から直に桑畑に打あけ河泥を以て桑畑一面に蔽ひ、浙西地方は大抵之によつて居る。この方法による時は降雨の爲に流出する恐はあるが、施肥の時期は主として雨の少い秋末を選び、暖暑の候は河泥が早く乾き過ぎるといふので、なるべく此期を避けて居るし、他面雑草發生の防止となる。通例一畝地に對する施泥量は十六擔入十船、即ち肥桶三百二十箇分の割合であり、其の値段は一船凡そ二十仙なれば、一畝地に對する施泥料は凡そ二元で足りて居る。次に他は各株の根元を掘つて一株毎に河泥一桶宛を施す方法にして主として無錫地方に行はれて居る。随つて一畝地の植付數を三百本とすれば、河泥は一五〇擔を要し、二十五擔入六船となり、一船の値段は施肥の作業に手間取るが故に一船四十仙といふから一畝地の施泥料は二元四十仙となる。

一般に秋季に於ける施肥は枝條の伸長を促し、春季の施肥は桑葉の發育に效能あるものとして、少くとも年三回はやるが、その内少くとも一回は河泥を用ひ、其他の肥料には人畜糞、豆餅(豆糟)及油餅を最も有効とされ、また蠶糞、堆肥及綠草等も相當使用されて居る。先づ人糞は一擔十株宛の割合に施し、一擔十仙前後である。豆糟は一畝地に二枚を要し一枚四十斤の値段一元五十仙を唱へ、此種金肥は嘉興湖州地方を除いては未だ廣く用ひられない。綠草は河泥と等しく河底に生長する藻草にして養魚の飼料にも充てられ、一船積長十尺、幅六尺、高五尺、三四十仙を要し、これは蠶糞と共に水田の施肥として最も賞用されて居る。而して河泥を除く是等の肥料に至つては農家により適宜のものが使はれて居る。けれども河泥を得るに道なき山手の紹興地方

に於ては概ね人畜糞や堆肥の類で、就中牛糞が桑肥として珍重され、變つたものでは石膏の粉末が普く用ひられ、其の値段は百斤凡そ一元五十仙である。

農事の閑散を見て耕耘除草(割草)には能く意を用ひ、年間その回數は大體採葉期の前後に深耕各一回、除草は七八回から多きは十數回に及んで居る。之に要する勞力は一畝地に付き耕耘には三人、除草一人を要する割合である。故に年間耕耘二回、除草八回とすれば十四人を算し、其の賃銀は日傭賃一人四十仙として五元六十仙である。桑葉の收穫は稚蠶期にあつては家の手近にある桑樹より摘葉し、火桑も亦た伐條をやらぬが、壯蠶期に至つて湖桑は拳部より條桑を悉く剪去して終ふ。随つて收繭期の桑園は枯木梢然たる觀を呈すが、整枝も此期に行はれ、株直しや枝條の取捨によつて樹姿の整調を計つて居る。尙ほ殘桑の利用に就いて特に言ふべきものは湖州地方に於て秋末之を掻集めて冬期羊の飼料に充て、居るが故に、この枯葉を羊葉と呼ぶ。

## 七 收穫と桑園の收支

蘇浙の桑園は恰も果樹園を見るやうに周到なる管理並施肥によつて枝葉の伸長は良好であるが、一面その鬱々たる繁茂は此地方の養蠶が主として春蠶に限られ、未だ本邦の如く濫穫に遭はざるの事實を看過することが出来ない。若しも將來夏秋蠶の勃興を見るに至れば、現在のやうな施肥を以てしては等しく其の茂盛を期することは望み難い。現に湖州地方に於ては夏蠶



は翌春桑葉の發育に支障あるものとして之を手控へて居る。従つて收穫量から言へば遙に本邦のそれよりも劣り、大體に於て夏蠶の比較的旺盛なる無錫地方は一畝地に付き春葉八百斤、夏葉二百斤を併せて千斤と見るべく、浙西地方は之より稍々多く、先づ千二百斤見當と見て大差あるまい。勿論これは土地の肥瘦により上地は千五百斤から下地は五百斤に満たぬものもあり、それから天候によつても相違を來すが、然し病蟲害は甚だ稀に、晩霜の如きは殆ど絶無である。據つて之よりして桑園の收支計算を試み、桑の生産費を研究せむに、先づ蘇州地方の狀況に就いて省立女子蠶業學校の調査せる所によれば、一畝地に要する諸費用は(一)資本に於て一畝地の價格は平均八十元にして利息は普通一割と見て、其の投資は八元を見積り、次に(二)勞力は農夫一人にて八畝地を耕作し得ると言はれ、其の日傭賃三〇仙、年一〇八元として一畝地に對する勞力代は一三元五〇仙、(三)施肥は冬の河泥、春の人糞其他を入れて肥料代は六元、及(四)公租七元の四項を合して二八元二〇仙である。之に對し副収入として薪木用に賣却される桑枝は一畝地凡そ二元を算し、差引二六元二〇仙の支出となる。故に其の收穫量十擔として桑百斤の生産費は二元六十二仙といふ數字を示して居る。然し此の數字は斯様に桑園の經營を他人に委任する場合に要するもの計算にして普通養蠶家が自ら桑園の管理に當るものの實際生産費は遙に之より低廉なること勿論である。依つて左に浙西地方を標準に之が推算を試みやう。(一畝植付二四〇本)

地代 七元〇〇仙 小作料九項參照

肥料 七、四〇 冬季十二月河泥二元、發芽前(三四月)人糞二四〇本に對し二、四〇仙、及採葉後

(六七月)豆糟三、〇〇仙

勞力 九、六〇 人糞、豆糟を施すに要する勞力六人、耕耘除草一六人、及摘葉整枝等四人、計二

四人、四〇仙替

計 二四、〇〇 (一畝地收葉量十二擔、一擔當り二元)

即ち葉桑一貫匁の生産費は一、二仙五厘に當るが、此の内施肥及勞力の一半は大抵は自家の提供に係るものなるを以て、金錢の支出は概ね僅少であり、實際生産費は上表よりも一層減すべく、而かも薪木用の桑枝や間作物の副収入を見積る時は桑葉一貫匁の生産費は恐らく十仙以内に止るであらう。例へば嘉興地方は間作として蠶豆の栽培が相當盛に行はれ、一畝地より一石(六十餘斤)の收穫があり、其の収入は凡そ五元に達して居る。

## 八 桑の賣買と桑値段

桑葉の生産費は概略乍ら上記の如き低位を示すが、之に大體的判斷を下すも、土地の價格及農業勞銀の安い支那にあつて特に技工を要せざる一般農作物を始め栽桑の如きに至つては其の生産原價が甚だ低廉なることは察するまでもない。それにも拘らず普通桑葉賣買に於ける桑の市價なるものは之を生産原價或は繭の價格に比較して常に割高の傾向を示して居ることは、聊か奇異の現象と言はねばならぬ。然し之が理由としては支那蠶業の一特徴たる桑葉取引



の盛なること、言ひ換れば桑葉に對する需要の旺盛に歸着するであらう。而して一般に副業として飼育量も比較的少量なる支那蠶業に於て尙且つ桑葉を購入するものが多い原因に至つては、思ふに蠶桑の業が頗る古く自然三千年來の間に其の國民性よりして栽桑業も分業的に發達して一般家畜の飼料同様に一種の商品として取扱はるるに至つたものと言ふべく、其他原因として次の諸點を擧ぐるであらう。

一 桑畑を所持する地主階級は桑園の一部を以つて自ら育蠶に當るも、其の大部は之を桑葉の儘賣却する方有利なること。

一 育蠶技術の拙劣により飼育成績は甚しく安定を缺くが故に豫め自有桑園を限度に一定の掃立を爲して所期の繭を得るが如きは到底困難である。従つて蠶兒の發育順調なる時は忽ち桑不足に陥り、他より補給を受けねばならぬこと。

一 稚蠶及桑葉取引の發達により、豫め蠶種若くは桑の準備なきものと雖も隨時育蠶に當り得る爲め、投機的養蠶を行ふものが尠くないこと。

是等事情と相俟つて特に蘇浙平野は四通八達せる運河により、桑葉の輸送は至便であるから壯蠶期此の地方に入ると、到る處に桑を載せた小舟を見る狀況である。而して桑の取引方法は先物賣買と現物賣買の二つに分けることが出来る。先づ先物取引の時期は通例舊曆年末に行はるるものが最も多い。それは年關に迫つて遽かに資金を要するものが、その調達手段として桑の賣却を契約するからで、契約金額の一半は手附金として契約成立日に之を受授し、殘の一半

は受渡期に決済する慣習である。そして其の契約方法には二様ある。一は所定の桑園より隨時摘葉し得る權利を賣る譯にて、之による時は稚蠶用の若葉と雖も摘採して差支ないのである。他の一は豫め壯葉一擔の價格、受渡數量及受渡期日の條件を以て契約する方法にして、其の受渡期(交葉といふ)は通例陰曆による立夏(五月上旬頃)に荷渡するを慣例とする地方が多い。

此の先物賣買は村落に互つて廣く行はれて居るが、次に現物賣買は村落よりも都市に多く行はれて居る。これが取引機關として青葉行なる桑問屋が存在し、毎朝此處を市場として直接賣買兩者が桑葉を受授し、青葉行は兩者より口錢を徴るものもあれば、或は賣人が賣却方を委託し、青葉行は之を需要者に掛賣し、成繭を賣却したる後に決済するなど、この問屋によつて桑を賣るものと、求むるものが圓滑に調節せられて居る。即ち之に就いて餘杭地方に於ける青葉行には左記の如き取引慣習が行はれ、更に紹興地方に於ける青葉行の口錢は四分即ち買入額一元に付き四仙の割合で、之を買入より徴收する慣習である。

一 値段は頭葉(春蠶用)及二葉(夏芽共大洋計算)十進法を以つてすること。

一 買入に對しては桑葉買入額に口錢一割を加算し、其の掛金は頭盤に支拂ふものは九五掛(即ち五分引)とし、二盤に支拂ふものは九八掛(二分引)とするも、二盤以後には値引を行はず、更に陰曆六月末日迄に支拂はざる時は爾後月二分の利息を申受けること。

一 買入に對し現金拂のものには、頭葉二葉共、口錢を徴らざること。

一 賣入に對しては桑葉賣却額の八八掛を支拂ふ、即ち口錢一割二分として、この中には警察費







日	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十
二十一日	二十二日	二十三日	二十四日	二十五日	二十六日	二十七日	二十八日	二十九日	三十日	三十一日
八〇—五三	六〇—四八	六〇—四八	六〇—四八	六四—五八	六四—五八	七二—六四	六四—六〇	七二—五五	五六—四七	五六—四四
七二—六八	六四—七二	六四—五六	八〇—六八	八〇—七二	七二—六八	七六—六四	七六—六四	六〇—五四	五八—五〇	五〇—四七
六四—七二	六四—五六	六四—五六	六八—六四	七二—五二	六四—五六	六四—五六	六四—五六	六八—五六	五八—五〇	五〇—四七
四〇	八〇	五七	八七	四四	九八	七五	三二	一、四五	八一	一、五四

更に桑葉相場の一般的傾向は蠶作と密接不離の關係を有し、葉價は蠶兒發育の良否によつて著しく左右されると同時に葉價の騰落によつて蠶兒を窺知し得る状況である。例へば之を一九二四及二五年に於ける主要地の實例に徴するに、先づ一九二四年度に於ては浙江省は各地を通じて市場取引は葉價百斤三元二三十仙に生まれ、紹興地方は壯蠶期に入りて桑不足に最高八元五十仙の高値を告げ、之が爲めに給桑は充分ならずして成繭は絲量減の憾を免れなかつた。また蕭山地方は三元臺より漸騰して四元八十仙に進み、次いで桑葉の出盛に稍々下押し四元三四十仙を示せるが壯蠶期には五元六十仙に騰つた。續いて杭州地方は壯蠶期に入るも需要は起らずに大體三元前後に終始したが、嘉興地方に至つては五元六元と奔騰し、盛食期には七元より最高は八元五十仙までに暴騰を告げた。之が爲めに桑葉買賣の思惑にはづれて數名の倒産者を生じ、中には桑葉千八百擔の空賣買に失敗して夜逃せる者があつたと傳へられる程であつ



た。之に反して江蘇省の無錫常州地方は當初條桑百斤二元に始まつたが蠶兒の發育不良に減蠶多く、之が爲めに盛食期に入るも需要は頓と起らず日に慘落して僅に七八十仙を唱へ、更に期末に至つては一元に付き二三百斤の相場でも希望者なき有様であつた。然るに翌一九二五年度に於ては浙江の各地を通じ葉桑二元二三十仙に生まれたが、三四元を最高に需要期に入つても仲惱みの姿にあつて、前年高値を示した嘉興地方の如きも精々三元を唱ふるに過ぎなかつた。處が無錫常州地方は浙江省とは反對に先物賣買は例年通り一元五六十仙を示したが、二三齡期には二元見當、四齡期は三元となり、次いで五齡の初めには少しく反落して二元臺を示せるも、上簇近くの五月二十二三日頃から日に急騰を告げて遂に五元臺に上り、甚しきは七元を唱ふるに至つた。之を葉桑の値段に換算するに、通例條桑百斤から葉桑は凡そ六十斤を得る割合なるが、斯様な高値になると、受渡に枝梢の太いのが混つて來て、中には五十斤に止まらぬものもあり、條桑百斤五元と言へば浙江省地方の九元に當る高値である。そして此の年無錫の蠶作は尠からず桑不足が祟つた。

### 九 地價公租及小作料

桑相場の變動は浙江省よりも江蘇省に於て甚しき傾向を見るが、這は後者が新場所として投機的養蠶家のより多いことを語るが、之には更に浙西平野に連る蠶業地は養蠶掃立の遲速により桑葉の需給に有無相通するに便なることが一因を爲すであらう。而して之れが緩和は桑園

の増植に俟たねばならぬが、本項には其の根本を爲す田畑に關する事情を明かにしたい。此の點に關し先づ土地なるものの意義から言ふと、支那は歴來土地に賦を課するものは天然物を生産する土地に限られ、否らざる荒地や宅地には之を免ぜられるのが原則であつて、賦課地には田又は地(畑)其他種々なる名目がある。大清會典の規定によると、凡そ地を墾するものを田といひ、田は亦地とも言ふと定め、田と地には區別なく、賦課の上から見ても同様に取扱はれて居る。然し地方によつて例へば南方では高田を田と言ひ、低田を地と呼び、また北方では水田を指して田と稱し、其餘は皆地と言つて居る。其他各種の生産物によつて山地、草地、蒿草地、蘆地、乃至鹽場の名稱があり、それから土地の所有別によつて民田或は民地、官田、莊田、屯田、祭田等種種あるが、此の内民田といふのが、人民の之を所有し、地券により自由に典質し得られ、これが即ち普通の意味に於ける田畑である。そこで地積を測る單位は古來歩弓なるものを用ひ、これは長さ五尺の兩脚規で、その形が弓のやうなところから名付けられたものであるが、この方五尺を一弓又は一步と稱し、二百四十弓を一畝、百畝を一頃と定められてある。然しながら度量衡制度の極めて不統一なところであるから、その單位たる一尺の大小は各地によつて相違し、一地方の一畝を以つて他地方を推算することが出来ないのである。然し大體に於て一畝と言へば、蘇浙地方にあつては我が約二百坪、英の六分一英町見當と見て大差ないやうである。之に就いて上海工部局の規定する所に依れば、一畝は七二六〇平方呎とし、一〇平方呎を一方イフワンと稱して居る。

斯様に支那に於ては昔から今日に至る迄田畑が若干あるか正確なる數字は全然不明であつ



て、之を測量することを丈量と言つて居るが、丈量は部分的に行はれたることあるも、未だ嘗て一州縣を通じ、或は全省に互つて行はれたことはない。若し之を行ふとすれば、人民の激怒に觸れ、地方民の擾亂を醸すべく到底政府に之を測定する能力はないのである。蓋丈量による地積の改定は直ちに賦額に増減を生じ、其間酬吏の乗ずる所となり、古來「人民の清丈を恐るる水火の如し」と言はれて居る有様である。故に人民の土地に關する規定に就いては、古來大した變革はなく、例へば某地は水田にして地積若干畝その賦額銀若干、米若干との規定は殆ど傳説的に存在して居るものと見るべきである。

即ち田賦の規定と其の賦率は規定によると、土地はその種類及收穫の多寡により、之を上中下の三則に分ち、各則を更に三等級の九門に分つとせられて居るが、賦率に付いては別に標準率とも見るべきものがなく、唯某地は古來上則上田と稱せられ其賦は全地積に對して幾何と定めてあるに過ぎない。而して蘇浙に於ける田賦は銀糧と漕米の二種に分たれ、錢糧は銀錢を以つて納付し、漕米は米若くは麥を以つて納め、其用途は中央にある文武百官及軍兵の祿餉に充てられたものであるが、後年に至つて漕米も銀錢に換算して納めるやうになつた。先づ前者の錢糧は上忙と下忙の二期に分れ、上忙の納期は陰曆四月、下忙は十月、それから漕米は十二月と年三期に分れて居る。之に就いて参考の爲め無錫の村落で手に入れた納稅證を左に掲げやう。

貴字 號

年 上 忙

版 錢 上	申 糧 忙
無錫縣知事公署爲征收錢糧事今據某區某圖甲花戶某完納	
癸亥年忙下計年應征上年舊熟並庚申銀肆分貳厘整	
除經拒收外合給即申收執	
民國	年 月 日給
遵照省令每忙銀壹兩征收銀幣二元五分並帶征百分之五手數料一角二厘五毫又呈准每兩帶征銀元五分撥充地方經費計二元二角五厘從啓征日起限兩個月內清完逾限者按照二元五分之數加收二十分之一共計二元三角五分、再逾限兩個月加足十分之一共計二元四角七分五厘	

漕 米	版 申
無錫縣知事公署爲征收漕糧事今據某區某圖甲花戶某完納	
癸亥應征實在成熟並屆除被米五升六合整	
癸亥應征實在成熟並屆除被米五升六合整	
民國 年 月 日給	
遵照省令米一石征收銀五元並百分之五手數料二角五分又呈准每石加徵地方費五分共計五元三角從啓征日起限兩個月內清完逾限者按照五元之數加收二十分之一共計五元五角五分再逾限兩個月如定十分之一、統征五元八角	







の未だ充分でない無錫地方に於ては平均一畝地年七元、紹興地方は十元内外を示し、浙西地方は凡そ五六元といふ。

### 一〇 桑の病蟲害

桑の病蟲害に就いて専門家の見る所では本邦に存在する種類は概ね之を認むるのみならず白眼蠶、黃蠶其他新奇の種類被害を發見して居るが、既述の如く蘇浙の蠶業は主として春蠶に限られ、此の期間桑の病蟲害によつて收穫に注目すべき被害を招くが如き事例は殆ど絶無であり、旁々所謂夏芽の茂盛如何は深く問ふを要せぬから、病蟲害に就いて當業者は殆ど意を拂はざるものの如くである。現に私は多年此の地方を縦横に馳驅せるも、かの本邦に加害猖獗を極むる天牛の如き、未だ之を目撃した經驗を持たない。先づ害蟲と言ふべきは人家の附近に植ゑられた貧弱な桑樹に就いて介殼蟲、葉捲蟲、尺蠖及小蠹蟲等を見る。それから間作桑園の多い紹興地方に於ては既に春蠶を終へて桑樹は悉く摘採され、麥は刈取られて滿地青色なき折柄僅に嫁接の箇所より生ぜる若芽に毛蟲其他害蟲の群れるのを屢々見受けた。けれども運河に沿ふ純桑園にあつては春季此種害蟲を見るは稀である。病害に至つても、之を認めるは矢張夏芽の發生以後からで、就中夏蠶の比較的盛な無錫地方や蠶業の最も古い湖州地方に於て萎縮病赤透病等を認める。随つて將來夏秋蠶の勃興を見るに至つたならば是等の病蟲害に對しては、現在の如く無關心たるを得ないであらう。

## 第三章 蠶種製造業

### 一 蠶種の系統及種類

舊態依々たる支那蠶業に最近漸く一味の新味を加へつゝあるものに蠶種及び其製造業がある。蓋支那蠶業の改良發達に關する識者の意見は恐らく何人と雖も先づ病毒に犯され切つて居るところの蠶種の改良を以て第一着とするであらう。現に蠶種改良の聲浪は過去十數年來漸次高まりつゝあつたが、其の具體的事業は茲兩三年に至り漸く頭緒を得て、今や其の前途に若干の光明を認めたるかの觀がある。即ち中國合衆蠶桑改良會及び江蘇省立女子蠶業學校を始め其他機關による改良種の製造高は最近年額框製約五十萬枚を算し、就中女子蠶業學校を中心とする事業は現在最もよく農民の信頼を博し、製造額も年々増加の勢を示して居る。けれども一方祖先傳來の衣鉢を繼ぐ餘杭及び紹興の蠶種製造業は其の業態が徹頭徹尾非化學的——神祕的——古典的——であるにも拘らず、今尙ほ養蠶家の之を信仰すること頗る厚く、浙江省の廣汎なる地域に互つて牢固たる地盤を擁し、未だ改良種の如きも到底其の牙城に肉迫するを許さない。漠然たる推定ではあるが、江浙皖三省の蠶種供給高は之を我が二八峨付の框製に換算し大凡千一百萬枚の數字を示し、此の總額に對しては前記改良種も未だ百分の四強といふ微々たる割合を占むるに過ぎないのである。而して之れを全體の上より見れば中部支那に於ける蠶種製造



業は(一)餘杭及(二)紹興の二大製造地と(三)無錫地方の自家採種、それに(四)改良種を加へて四つの系統に分つことを得べく、之れが分野は主要次のやうである。

蠶種系統別

推定生産高

需要地

餘杭製種地	三〇〇 <small>萬枚</small>	餘杭、德清、杭州、海寧、桐鄉、石門、並に嘉興、湖州地方の一部
紹興製種地	二〇〇	及江蘇省南京、江北地方。安徽省
無錫自家採種	四五〇	歙縣、新昌、諸暨、蕭山、及湖州、嘉興地方の大部
湖州自家採種	六〇	無錫、常州及宜金溧地方の全域に互る
夏蠶自家採種	六〇	湖州雙林、南潯地方
改良種	五〇	江浙各地の夏蠶用自家採種
計	一、一二〇	蘇州、無錫、南京、鎮江及江北地方。安徽省

即ち浙江省は湖州の一部を除き養蠶家は皆餘杭種若くは紹興種孰れかの蠶種を購入して育蠶に當るに反し、無錫を始め江蘇省の江南地方は養蠶家が各自採種することは興味ある對照である。這間の事情に就いては先づ浙江省の養蠶は古來座繰製絲業の一過程とも言ふべく、收購を終るや直ちに繰絲に着手するが故に、自ら採種に暇なきことや、育蠶に慎重なる彼等は蠶種の買入に吝かならざること等の諸點に歸因するであらう。然るに繭の儘賣放つて繭質の良否には無頓着なる無錫地方の養蠶家にあつては、未だ蠶種の選擇に意を拂ふやうな考へはないし、また自家採種は支那古來の風習ではあるが、更に一因としては此の地方の夏蠶飼育が自家採種の

慣習に密接な關係を持つて居る。といふのは夏蠶種には未だ冷蔵法や人工孵化法の利用を見ない今日にあつて、その蠶種を得るには必らず春蠶期に夏蠶種の一化期を飼育し、之より採種して夏蠶飼育に當らねばならぬからである。同時に斯る事情の下に差當つて江蘇省方面へは改良種を普及せしめ得る餘地多々あるが故に將來此地方にも蠶種製造業が獨立せる生産業として發達せむとする兆候を見る。

斯様に蘇浙地方に於ける養蠶家は孰れも年々歳々同一種の飼育を繰返し、本邦に見るやうな所謂品種問題は未だ起るに至らぬ。故に蠶種の種類に就いても品種を系統的に區別することは出来ないが、先づ繭色から見ると殆んど全部白繭種と言つて差支へない。無錫地方に出廻る白繭の中には點々金黃繭の混入を見るが、それも萬粒中に二三粒を算するに止まり、纏つた荷口の黃繭種は皆無である。次に化性から言へば年間飼育は主として春蠶一期であるから勿論一化性が大部分を占めて居る。然し夏蠶も亦た各地を通じ若干年ら飼育され、これは言ふまでもなく二化性である。それで夏蠶のことを通例二蠶と稱し、その一化期を春蠶期に飼育するものは之を前者と區別するに頭二蠶と呼んで居る。更にまた多化性もあるにはある。殊に無錫地方に於て此種の産繭は初秋頃までに相當市場に出廻り、八月頃登市するものを桂花繭子、九月頃に出廻るものを菊花繭子と唱へ居る。之に就いて桂花蠶は四化性にして菊花蠶は五化性であるといふ。尙又蠶種を眠性から區別すると春蠶は悉く四眠蠶なるに反して二化性たる夏蠶は大抵三眠蠶で、之を三眠子と呼んで居る。斯く飼育さるゝ蠶種は單一ではないが、然し既述の如



く總額より見て其の八九割までは春蠶の白繭、一化性、四眠蠶で占めて居る。故に此處で品種の説明を要するは此の白繭に外ならぬが、之に關する類別は産地名を冠し或は繭の形状また或は蠶體より見て夫々その特徴を採つて名稱を附するに過ぎない。例へば一般に蠶體の白色無地なるを白皮と稱し、縞を有するものを花蠶ハナカと言ふが如く、そして是等の蠶兒が同一箔に混然と飼育されて居るものが多い。依つて左に通俗的な分類を掲げやう。

一、蠶體又は繭形による類別

紹興系統桂圓種 一名大圓頭とも言ふ。繭形大にして圓きこと球の如し、紹興西郷及諸暨縣に多し。

同 長圓種

繭形大なるも前者の如く球状ならず、紹興東郷及嘉興に多し。

同 中圓種

繭形前者と同様なるも著しく小形となる。紹興北郷及蕭山縣に多し。

同 種 種

原産地は湖州にして紹興に移入したるもの、紹興北郷、蕭山縣及湖州一帯に多し、七里種ともいふ。

餘杭系統白皮種

蠶體無地白色なるを以て此名あり、繭は中形、白色なるも之に笹色を帯ぶるものや縞目を持つものを混入す、海甯、杭州地方に多し。

同 玉蠶種

蠶體の頭部特に青味を帯び、一名青皮種とも稱す、繭は小粒にして稍圓味を持つ。

同 烏龍種

蠶體黒色にして縞を有す、之に黃繭白繭の二種あり。

湖州系統種

湖州府下太湖に面する一帯に多く紹興種と同一系統なるも繭形前者より稍大形なり。

無錫系統錫圓種

繭形は最も小粒に形状蓮の實の如く一名蓮心種といふ。江蘇省の代表的種類なり。

同 溧陽種

小形の多い江蘇産にあつて繭は大粒なるが、近時著しく減少して其の跡を絶たんとす。

改良種系新元種

元は即ち圓に通す新圓種なり、紹興新昌の原産にして紹興系統より出づ、江蘇方面に需要さる。

同 大元種

即ち大圓種は紹興の原産にして前記長圓種より出でたるものならむ、浙江方面に需要さる。

同 諸桂種

紹興系統の桂圓種より出でたるもの、原産地諸暨縣、但し以上三種は本邦支那種の逆輸入と見るべし。

同 一元蠶種

日支一代交配種、即ち赤熟に諸桂を掛け合せたるもの、絲量に富み、織度太きを以て震澤地方の座繰業者に迎へられ、一枚一元の高値を拂ふ故に此名あり。

其他 龍角種

原産地寧波、蠶體の頭部に一對の角状突起物を有するを以て名けらる。

同 金黃種

繭形無錫繭と同様にして繭色は黄金色、無錫地方の原産なるべし。

同 綠繭種

一名綠嘉興とも稱し、嘉興海鹽地方の原産、純然たる綠色繭なり。

二、護種の處置による類別

淡種

蠶種を冬季石灰の溶解液に浸したる後茶湯にて洗滌したるもの。

鹽種

前者の石灰に代つて「ニガリ」の溶液に浸せるもの。



## 三、種繭飼育による類別

熱火種 餘杭の如く加熱高温飼育によつて速成的に仕上げたる種繭より得たるもの。  
冷火種 稚蠶を除いては補温することなく普通育による種繭より得たるもの。

而して本邦に輸入されて所謂支那種と稱せらるゝものは大抵紹興系統に屬するが、斯様に各地方の蠶種は地方毎に夫々祖先傳來の系統を持つが故に、之に深き研究を進めたならば未だ世人に知られない品種の發見もあらう。然しこれは専門家の探究に委し、之より特色ある蠶種の生産狀況に就て述ぶるであらう。

## 二 餘杭製種地と生産額

浙西地方は各地夫々特産によつて立つて行く趣があるが、餘杭と言へば古來蠶種を以て天下に知られて居る。此地は杭州の西方六九里(五十四華里の意、浙西では里程を表すに九里を單位として二九里と言へば十八里、三九里とは二十七里を指す、大溪といふ河畔に沿ふ細長い町で、その上流は間もなく巒山重疊たる山地に入り、頗る眺望のよい所で、普通此邊では海甯嘉興の需要地方面を低地方川しもの意と呼んで居る。その製造地域は餘杭縣城とその西門及び北門外に互る所謂西郷、北郷方面にして遠く山際まで一望の桑園が連り、この一帯の農家は殆んど全部蠶種製造家である。之に次ぎ東郷方面にも若干の蠶種家はあるが、南郷に至つては石材の産地で養

蠶は殆ど行はれない。私はこの景勝地に接して、その山川の風土が蠶種製造に好適する條件を備へて居るものゝ如く思はしめたが、兎も角も他地方よりは至極養蠶に適して居ることは察するまでもない。それに育蠶に慎重なるにもよるが、此地方に於ける種繭飼育に違蠶を見るが如きは寧ろ稀有の例であるといふ。

即ち此の環境は餘杭をして浙西の主要蠶業地に對する蠶種供給者としての重要な地位を築かしめたものと言ふべく、餘杭に於て蠶種製造に従事するものは農家の七割を占め、その數は三四千戸に達すといふ。蠶種製造年額に至つては三十萬枚と言ひ或は五十萬枚と稱し、確たる統計を缺くが、之に關して當業者は餘杭蠶桑研究社なる同業組合を組織して居り、其の組合員數は凡そ三千五百人を算すと言ふから、假りに一戸當り平均製造枚數を百枚とすれば、總額は三十五萬枚に達する。處で、この種紙は赤色の厚い漉返しのような紙で、其の大きさは $18 \times 16$ 吋と略ぼ方形を爲すから、通例この一枚を一方と稱し、之を四つ切にしたものを一刻四分の一と唱へ、之が掃立量を表はす單位となつて居る。これは勿論平付で殆ど隙間のないやうギツシリ産付けてあるから一枚の産蛾數は二三百蛾、之を平均二百四五蛾と見て大差あるまい。而して此の蠶卵紙は全部餘杭の上流地新登縣に生産せられ、此地の王永利紙舗といふが一手販賣をやつて居る。同舗の言ふ所に依ればこの蠶卵紙は一束五百枚入の價格十二元見當にして一ケ年の取扱高は約千二百束(六十萬枚)を示し、其の販賣高は過去十年間に倍加するに至つたといふ。依て其の三割が湖州方面に送られ、殘餘の數量が餘杭の蠶種製造に消費されたと見れば餘杭種の年産額は



四十二萬枚の見積である。更に材を出殻繭に採りて之が推定を試みるに其の出廻數量は概算八百擔である。そして出殻繭の切歩は八〇「パーセント」に留るが故に、此地方に於ける種繭消費額は約一萬二百四十石と推せられ、之より一升の顆數百五十及一枚の産蛾數を二百四十蛾として計算すれば八千四百萬蛾、之を我が二八蛾付に換算すれば框製三百萬枚の産額に達するのである。

### 三 餘杭の蠶種製造家

餘杭種の年産額を約三十五萬枚として一枚の平均價格を二元とすれば生産金額七十萬元に上り、更に出殻繭眞綿等の副収入を加ふるを以て斯業は固より餘杭の主要なる生産業である。従て此地方の養蠶は概ね蠶種製造を目的に營まれ、換言すれば養蠶家即ち蠶種製造家なりと稱するも過言ではない。のみならず蠶種家の中には自ら種繭飼育を行ふことなく、他の生産者より蠶種を購入して之に自己の私票を附して轉賣するものもあり、或は他より繭を買入れて之を種繭に充てゝ居るものもある。然し蠶種家には特に蠶室の設備を有するものが皆無であるから、その生産には限あつて最大蠶種家と雖もその製造高七百枚(框製換算六千枚)を超ゆるものはないといふ。先づ全體から見ると三百枚以上を製造するものは約千戸を算へ、殘餘のものは三百枚以下であるといふ。また之を他方面から觀察するに彼等の言ふ所に依れば鮮繭十斤より蠶種五枚を得るのが標準であるといふから、假りに蠶種三百枚を生産するには種繭六百斤を要す

ることになるが、一般にこれだけの數量を飼育する養蠶家は支那に於て有數の大養蠶家でなくてはならない。今數多い製造家の中に名の知れた蠶種家並に其の商標及び販賣高其他を擧げると左表の通りである。

蠶種家名	所在地名	商標	供給數量
跑浪	利生胡村	地圖	一、〇〇〇枚
王錦伯	大平弄	竹春堂	一、〇〇〇
吳福鄉	山胡西村	洋春房	三、〇〇〇
鴻錦盛	三恒村	鴻翔鳳	二、〇〇〇
田永藝	謝石里	田豐偉	二、〇〇〇
陳裕亮	普陀灣	比石堂	三、〇〇〇
龐寶山	英竹山	天寶堂	一、五〇〇
憑寶山	同	天寶堂	二、〇〇〇
金生甫	丁子橋	金松梅	二、〇〇〇
吳應恒	城子市	吳翔鳳	一、〇〇〇
吳景林	天竺林	吳雲龍	三、〇〇〇
陳明和	大平弄	竹春堂	一、五〇〇
汪英	同	竹春堂	一、〇〇〇
蔡忿梅	天竺林	雙獅	二、〇〇〇



但し上表大蠶種家と雖も既述の如く上掲數量は之を悉く自ら製造する能力はないから、勢ひその一半は之を他の生産者と特約して之より買入れたるものに私票を附して其の需要を満たして居る。普通此種買入品を後門貨と唱へ、之を區別するに自家製のものに前門貨と呼んで居る。然しこの後門貨と雖も自家製の前門貨と同値を以て轉賣されて居ると同時に需要者も亦之に同等の信頼を拂つて居る。茲に於てか商標の信用なるものが蠶種家の生命と言ふべく、需要地に於ける養蠶家の信用を博すると否とでは營業上に非常な懸隔を見る。

餘杭蠶種家中に群を抜き絶大の信用と聲望を恣まゝにして居るものに吳福卿といふ製造家がある。この吳家は餘杭の蠶種業に長い歴史を持つ舊家にして其の製造額から言ふも西郷切つての大蠶種家である。そして吳福卿の蠶種と言へば養蠶家の評判は最も高く、その値段も需要地にあつては他のものより二十乃至五十仙高に賣られて居る。殊に吳家に對する顧客の間にあつてはこの蠶種は殆ど信仰化され、彼等は吳家の蠶種を飼育して尙且つ遠蠶を來したならば、それは最早神様に捨てられたものと考へて諦める程である。隨て吳家に對する蠶種の注文は殺倒し、豫め前金を以て豫約して置かねば手に入らぬ。それでこの蠶種は早くも秋季稻の收穫期に前金拂で契約するのが慣習であるが、而かも希望者の多い爲めに通例前金に對しその七八掛に相當する蠶種が割當てられるに過ぎない。例へば一九二四年此の蠶種一枚は二元五十仙に仕切られたが、前金百元を提供せる者に對しては八十元の蠶種が渡され、残の二十元は現金で返却されたと言つた素晴らしい景氣である。之が爲めに吳家は當然營業上甚だ有利なる立場に立つて居る。第一その蠶種代が半年も先から前金拂であるから、融資の上に利得のあるは言ふまでもなく、集金の費用も要らねば製品を賣残す心配もないのである。

吳家に次いで有名なるは比石堂の商標で知られる陳家を始め前表に列擧せる蠶種家達である。彼等は前門貨は固より、他の生産者のものを購入して補給する所謂後門貨に對してはその買値と轉賣値段との間に生ずる値鞘を利得することは勿論である。そして是等の大蠶種家は需要地に夫々の網張を持つて居る。例へば竹春堂の商標は海甯縣下の周王廟附近に迎へられ前記吳家の蠶種よりは一枚十仙高に賣られ、また雙獅の蠶種は硖石に近い沈蕩附近に顧客を持つて居る。斯いふ事情から蠶種家は自己の信用を得ることに深甚の注意を拂ひ、毎年上簇頃になると需要地に於ける得意先を歴訪して一々その配布せる蠶種に關し出來榮の如何を問ふのが慣例となつて居る。尤も此の訪問には更に來るべき次期に於ける自家に對する需要狀況を調査し、之より推定して豫め自己の製造額に手加減を加へて、なるべく賣残の生ずるを避け、その餘剩蠶種から蒙むるべき損失を免れむとする意圖が含まれて居る。

#### 四 高温育と採種法

餘杭蠶種家と需要地の養蠶家とは永年密接なる關係を保ち、其間の取引に興味ある風習が行はれて居ると同時に、また餘杭に於ける種繭飼育といひ、採種法といひ、總てが物珍らしい。私が再度の餘杭訪問は一九二四年五月十八日であつたが、折よくも此の日は餘杭種初荷の發送日に



當り、その夜半熱開を極めた取引の光景を見たり、或は眞暗な部屋の中に燭を執つて産付をやつて居る光景を眺めた私には遠く現代からかけ離れた往時の蠶業を彷彿せしむるの感を催さしめた。

先づ第一に此處の種繭飼育は高温の下に非常な速成法が講ぜられて居る。何しろ掃立から上簇までが僅に十八日乃至二十日間、上簇四日、それから蛹期六日といふ風に一般養蠶地方が一ヶ月掛つて繭を作るのに、此處ではもう蠶種を作り上げて終ひ、需要地に於ける繭の出廻る頃には餘杭種は賣出しに出掛けるといふ早さである。然らば此の速成法はどうするかといふに先づ桑には早生種の火桑を準備し、室内に火鉢を据えて七十乃至八十度の温度を保たしめて居る。この火鉢の上にはブリキ製傘形の蓋を附し、蠶種一枚に火鉢三個の割合といふ。次に一般支那の育蠶法は極めて密飼であるが、此處では餘程薄飼に、普通のものに比し約三倍の蠶座を與へて居る。そして桑葉を思ひ切り澤山飽食せしめると、大體一齡二日半、二齡二日、三齡二日及び四齡六日、それに各眠期一日と通例十八日間遅くも二十日間には上簇して終ふ。この四齡期に入つてはもう氣温も大分高くなるから此の期からは炭火を用ひずに緩火を加へて居る。この装置は恰度摺鉢のやうな火鉢の底に糲糠を入れ、中央に大きな一塊の薪を置き、之に「けし炭」を満たして上部を灰で蔽ふのであるが、これは三日間は保ち煙の立つやうなことはないといふ。即ち一種の埋薪法とも言ふべきものである。此の火鉢の数は四眠兒四斤に對し一個の割合に當てがい、上簇四日目に繭を搔き種繭の處理に着手する。

先づ種繭は毛羽を剥き、薄皮繭や爛繭は選出するが、此際同功繭は之を種繭に充て、除去することがない。寧ろ彼等に言はせると、此の玉繭の中には必らず雌雄兩蛾があるとして遠慮なく使ふといふ。斯くて種繭十斤を蠶箔一枚に並べて蠶架に上せ、室内の温度を八十度位に高めること三日間、次いで蠶箔二枚を三枚に擴げてから火鉢を取り去つて温度に手加減を加へる。といふのは此地方の蠶種家は種繭量多きは二三千斤から、少くとも二三百斤、平均五六百斤に達して居るから、一時に發蛾しては到底間に合はない。で大抵五日位の間に順次蠶箔から蠶蛾を拾取つて採種する譯である。蛾の發生は夜間に最も多いから、翌朝の八九時頃に蠶蛾を拾ひ取る。この取扱には一般支那人が良く使用する芭蕉扇を使用して居る、これは芭蕉の葉で出来た團扇で、之に蛾を載せ、他の蠶箔に移して交尾せしめる、交尾時間は朝の八九時から始まつて數時間、午後の三時か三時半になると之を割愛するが、この際は左手に芭蕉扇を持ち、右手にて母蛾の腹部に觸らぬやう先づ母指と食指とにて母蛾の翼を掴み、雄蛾を高指と無名指との間に挟み、割愛してから、母蛾を團扇の上に相當の數だけ載せて産卵室へ運ぶのである。愈産付に就いては先づ蠶卵室から説明すると、この室は入口や窓には黒幕を張り、其他光線の這入る隙間は悉く塞いで室内を暗黒にし、それから産卵臺は高さ三尺位の架子に竹棒を渡して葦簾を敷いて蠶卵臺とし、この上に方形の蠶卵紙を連續して一列二十枚乃至三十枚を竝べ、二列若くは三列にし、各列各紙の間は總て隙間なく接續せしめ恰度一枚の廣い紙のやうにし、其端には青竹を二つに割りたるもの、又はL形のブルキ板を當て蛾の紙外に這ひ出ぬやうにする。それから室内の四隅及中間



には産卵臺と同様の高さの火鉢を置き、木炭で室内を温めて居る。そこで産卵を午後三時から始めるに、前記の團扇に載せたる蛾を各蠶卵紙の上に叩き落して竝べるのである。この産付作業は相當に熟練を要するもので、通例經驗者を傭ふてやるが、兎に角午後の三時から始つて、早く夜の十二時乃至は一二時に至り、産卵を終るまでは、茶を喫みに室外に出る位のもので、殊に夜中の仕事であるから、工賃は一夜二元といふ高率な賃銀である。この職人は左手に團扇と蠟燭とを持つて、紙面に萬遍なく産付するやう、絶えず蛾を検査して移動せしめる。この一人の受持数は一側即ち二三十枚のもので、此際使用する燭は西洋蠟燭では油の垂れる虞があるから、嘗油堅燭といふ柏樹の實から取つた支那在來の燭を使用して居る。斯くて産卵を終へたものは臺下に置きたる後之を取出して五枚宛合せて天井の竿に掛けて居る。私はこの暗室に於て燭光が黒い人影を照らす光景をまのあたり見て、如何にも神秘的に感ぜずには居られなかつた。

### 五 餘杭種の取引(發包の賑ひ)

蠶種製造の非科學的な方法と相俟つて、蠶種の取引事情も一風變つて居るのは面白い。この取引は全くお祭を見るやうな騒ぎである。嘉興、王店、硤石及長安等需要地の蠶種客人と稱する蠶種取扱商は餘杭種の出來る頃(五月十五日前後)になると、餘杭に續々入り込んで來る。是等の商人には蠶種の賣買を營業とするものがあり、また各村落を代表して仕入にやつて來る、その數は例年一千人を下らぬといふ。そして城内や村落の蠶種家を見廻はり、種繭を拜見などして、甲

家に百枚とか乙の家に二百枚とか豫め注文して歩く。斯様に注文によつて産付するものを定生、白皮種と稱して居るが、此の注出品が出來ると受渡は餘杭全區域に於ける蠶種家全體が決つた場所で一定時日に一勢に行はれる慣習である。これは何故かといふに、若し受渡期に制限がないと蠶種商人は一刻も早く蠶種を持ち需要地に乘込み、我先にと賣抜けやうと激甚なる競争が起つて來る。そうなる採種の遅れたる蠶種家は賣却に不利を蒙ることになるから、受渡期を一定の時日に一勢に行ひ、その時刻までは蠶種を絶対に餘杭から持ち出すことを禁ぜられ、この蠶種の發送を指して發包又は大包と稱して居る。それからもう一つ此の取引に特色と言ふべきは蠶種の値段は公定價格で賣買されることになつて居るから、蠶種商人が之を注文する際には價格に就いて個々に交渉する必要はない。この公定價格は前述最大蠶種家たる吳富郷なる人によつて決められるといふことである。これが村落蠶種家の親分といつた格で、毎年吳氏が各地から來た客人と交渉して安方(一枚幾何と定め、一九二五年は一枚二元五十仙と決められた)すると全體の蠶種家は否應なしに此の値段で取引されるのである。この取引には現金取引も行はれるが、多くは一枚二元五十仙に付き手附金として一元を支拂ひ、殘金は六月頃蠶種家が得意先に出張して收金する習慣である。

そこで一九二五年の發包は恰度私が餘杭に着いた五月十九日午後十二時に行はれることになつた。この日の夕刻頃から各地より來た蠶種商人は注文先から蠶種を受取り、午後十二時になつてから、始めて一勢に之を持ち出すことが出來る譯である。



偕て夕刻近くになると、千人からの客人は東門より西門に通ずる街の旅舎や茶館に陣取つて蠶種の搬入を待ち受ける。そして彼等は午後の十二時迄は此處を動くことが出来ない。蠶種家と客人との間には豫め某所に於て待受け受渡することを約束してあるから、午後の四時頃から續々と此處を指して蠶種家がやつて来るが、景氣付いて来るのは暗くなつてからで、蠶種を風呂敷包に背負ひ、或は籠に入れて天秤棒に擔ひ、手には夫々家號を記した提灯を下げて、陸續と此の街にやつて来て、八九時頃になると狭い街路は忽ち人波で埋つて終ふ。支那流の形客で言へば、人山人海といふ雑踏で、宛然提灯行列を見るやうな光景である。殊に東門と西門には前記の吳富郷氏、研究社長、跑浪、副社長、吳寶榮氏、其他の幹部が數名の巡查と共に入口に立ち塞いで、蠶種を持つて来るものに就いて、研究社證の有無や、誰某に賣却したるやを一々確めて通過せしめ、這入つたが最後十二時迄は蠶種を門外より出させぬやうにして居る。そこで蠶種搬入者と巡查との間に時折小競合が始る。それを前記の顔役が鎮めるといつた有様で、全くお祭のやうな騒々しさである。

面白いことにはこんな人騒ぎの中で客人と多數の蠶種家とは多くは顔染みで、客人は蠶種をどしどし受取り、中には手附金を渡して居るのも見受けることである。

斯くして夜の十二時が過ぎると漸く警戒の網が解かれ、客人は其夜の裡に早船を仕立てるものもあり、或は翌朝五時の自動車で發つものもあり、荷物は運送店に託して、杭州發の一番列車に間に合せ需要地に送達するのである。それで發包日の翌朝杭州驛のプラットホームや貨物

室は此の餘杭種の行李で輻輳を極める。行李一個は蠶種二百枚を入れるが、此日午前九時發の嘉興行列車だけでも例年四萬枚(框製凡そ三十六萬枚)が輸送されるといふ。即ち劈頭この發包に送られた荷物は之を早幫餘杭種と稱し、此の蠶種が最も高價に賣れる。先づ仕入値の二元五十仙に對し賣値は三元乃至三元四十仙見當である。然し早幫餘杭種は發包の初日のみでは搬出が出来ぬから次日までに及んで居る。同時に前記吳福郷氏の蠶種は次日に發包される慣習である。

次に發包二日が済むと今度は餘杭の蠶種商や蠶種家自身が未賣の蠶種を携へて海甯縣下の硤石に賣込みに出張する。之を送包と呼び値段は前者の發包より二十仙方の安値である。彼等は蠶種を五枚宛重ねて之を縦に左右兩側より内へ折込みて四ツ折に疊み、之を幾つも重ねて風呂敷に入れ硤石や其附近の蠶種商にして餘杭にやつて來ない者に之を賣込むのである。この硤石に對する送包に次いで殘荷は更に浙西の各地に賣り歩くのである。そして各地の蠶種取扱商は之を農家に掛賣し代金は絲行が絲の買入を開始する頃に至つて集金する狀況である。例へば嘉興の南にある王店なる一鎮に就いて言へば同地附近のみにて餘杭種の賣行は例年一萬枚に達すると言ふことで、同地の蠶種取扱業者は前年餘杭種の價格を每方三元同小橋灣物之より二十仙高と定め掛金の支拂期は夏至迄とし、その期を過ぎると利子を申受けるとの規定を申合せて居た。斯様に餘杭種の販路は杭州嘉興間の鐵路沿線地帯を主眼とし、其他湖州及蘇州の南部地方に需要さるゝ數量も尠くない。そのみならず更に南京、江北地方及安徽省等



の新場所に販路を有し、此地方へ供給する數量は年額十萬枚を下らぬといふ。然し此方面との取引は前者と全く其趣を異にし、冬期又は翌春餘杭市にある四戸の蠶子行と稱する問屋の手に取扱はれて居る。其の値段は前者よりも遙に安値ではあるが、是等蠶種は浙西地方への賣殘品か、左もなくば玉繭を用ひる劣等品の捌け場所となつて居る。

## 六 餘杭蠶桑研究社

餘杭種の製造は斯くも特殊な速成法が行はれ、而かも蠶室から産卵を終つたばかりの蠶種を取出して未だ黒色にも變らぬ中に需要地に送られ、これが所謂早幫餘杭種と銘打つて何故に最も歓迎されるであらうか。其の理由に至つては需要地の養蠶家は餘杭種は早ければ早く出来るもの程蠶種の出来が良いといふ信念を持つて居るからで、且又之には相當の根據がある。といふのは高温育によつて上簇の遅れたるもの程蠶兒は強健でないし、更に段々品が遅れたものになると玉繭の使用割合が非常に殖えて来る。殊に甚しきは單繭を絲に繰いで玉繭のみで種を作り、其の跡の出殻繭から眞綿を探るといふ勘定高い蠶種家もある。或はまた葉節貨と唱へて數人のものが相寄つて十斤とか五斤といつた零碎な繭を出し合つて之から採種した所謂寄せ集め物もあれば、或は七眠子と云つて四眠蠶と三眠蠶種とをゴツチャにした混種がある。詰り此種の不良品を警戒する爲めに需要者は早幫餘杭種を希望して居るのである。而して餘杭の中で最も多いのは白皮種で、製造者はこの優良なるを稱するに純白皮種若くは白皮多絲種な

ど、銘打つて居るが、此等の種繭を見るに繭は大形にして豊かな長圓形を呈し、相當立派な拜見を持つが、繭層は稍薄き憾がある。そして此の中には一部中央に縊れ目のあるものや、笹色を帯びたものが尠からず混在して居る。然し彼等の言ふには是等は皆同種類で、本邦在來種のやうに胴締を有するものは雄繭であり、笹色を帯べるものは出来が良いからだと説明して居る。之に對し最も多く白皮種を飼育する海寧地方の産繭を見るに、中緊あるものや笹繭を混入することには變はないが、繭形は著しく小形に緊縮のある繭を結ぶ。この兩者の相違は前者の特殊なる高温育によるは勿論なるが、更に蠶座面積の粗密に於て餘杭地方は蠶箔一枚に對し四眠兒二斤位の割合なるに、海寧地方は約四斤を容れ、其他護種の處置に就て前者は淡種、後者が鹽種を探ること等が繭形の大小を來す原因と看做されて居る。

然しながら餘杭種は品種として精選されたものでなく、寧ろ雜駁の謗を免れない。それに其の生産状態は如何なる點から見ても時代遅れがして居り、未だ之に改良氣分を認められない。けれども近時外界に刺戟されて一九二三年に餘杭蠶桑改良社なる同業組合の成立を見るに至つた。尤も其の刺戟といふのは近來新場所として擡頭せる紹興の蠶種家の爲めに地盤を脅威されむとする情勢に鑑み、之に對抗すべく生れたものである。即ちこの研究社は餘杭城内の蠶種家を網羅し、其の社員に經常費として毎戸年二元を課して居る。現在社員數は一八一三人を算し、之に對しては餘杭蠶桑研究社證なるものを交付し、この證なきものには蠶種の製造及其の行商を禁じて居る。そして研究社の目的とする趣旨は餘杭種は從來海寧嘉興地方に能く信用



を博して居るが、近來動もすれば不良品の爲めに折角の聲價を失墜せんとする傾があるから、之を矯正して斯業の維持發展を期するにある。殊に之が爲めに同業者は既述葉箭貨、七眠子及柞蠶混種等の不良種を絶対に排斥すべしとある。後者の柞蠶混種とは此地方の山間には柞蠶を屋内で柞葉を以て飼育するものがあり、之と家蠶との混種を指したものである。斯く研究社の現狀は取立て、言ふべきものがないが、若しも將來此の機關を中心に品種の改良、病毒検査の實施を見るに至つたならば餘杭種の面目も一新を來すであらう。

### 七 餘杭種の生産費

一九二五年の春私は餘杭城市に發包の賑ひを見た翌日西郷の村落を歩き廻つた際村人は今年のやうに一枚二元五十仙では一箇月も寝ず番に働いて合つた話でない、それに注成品が得意先から文句を付けられ返されるやうなことがあつては堪らないなど、零して居たが、この蠶種製造は經費が比較的多く掛つても有利の仕事のやうである。大體種繭に對する製造量は、種繭十斤に對して蠶種五枚を得る割合である。さすれば種繭十斤に就き十二元五十仙の收入となり、繭で賣るよりは遙に金高が嵩んで居る。それに副收入たる出殻繭は一箱種繭四十斤見當、十二元見當で、これは眞綿原料として當地方に於ける主要なる副業の一つであり、この蠶種業は餘程有利なる事業の如くに觀られる。試に其の生産費に付き華友陳氏の調査せる百蛾當りの生産費は次の如くである。

桑代二七・一仙、勞銀三四・八仙、器具什器及蠶種其他九仙及販賣費八・七仙、合計七九・六仙。之に對し出殻繭の收入二八・九仙を差引き原價五〇・七仙。

即ち之を框製二八蛾付一枚に換算して一四・二仙といふ安値に過ぎないのである。餘杭種一枚の原價凡そ一元二十仙に對し産地の賣値は發包物の二元五十仙を最高としてその平均賣上を一枚一元七十仙と假定しても一枚に付き五十仙の利得となり、餘杭の大蠶種家が例年二三千元の純益を擧げて居る所以である。そしてこの餘杭の旺盛なる蠶種製造業が近代的に面目を改める日は支那蠶業の俄然發展すべき時であらう。

### 八 紹興種の産地と産額

轉して古來有名なる餘杭種に對抗し比較的新顔として浙西市場に乗出して來たものは紹興種で、此種は純白鮮麗の繭を結ぶことによつて浙西の一部に尠からず嗜好されて居る。而して紹興種の産地といふのは曹娥江の上流嵗縣新昌平に於て南郷と呼ばるる地方で、西港といふ一支流に沿ふて居る。此處は其の支流に沿ふて幅二哩、長さ凡そ二十哩に亘る帯のやうな溪間地を爲し、其の山紫水明の郷土は本邦の蠶種製造地に比較するに、先づ信州の上田若くは安曇地方の景勝を想像したならば、略之に當るであらう。然し緯度から言へばズツト低く、浙西蠶業地帯の最南端と言ふべく、氣温の高い地方であるから、餘杭のやうな速成的飼育を行はなくても、蠶種は前地と同時期に登市を見る。先づ此地方に於ける蠶種製造の主要部落を見るに、嵗邑(嵗縣城)



から南下して馬岫藕岸及天鎮の村落から之より新昌縣管内に入つて溪流を傳ひ、梅渚澄潭鎮と進み、嶸邑より二十哩を距る最奥の黃婆灘までか製造地帯で、上流地に入る程山は迫つて花剛石の河原が現はれ、其の景色を加へる。そして澄潭及梅渚鎮は此地方の中心地で、道路に沿ふた一本町であるが、商業は賑はつて居る。

此の南郷一帶に於ける養蠶家は繭にて賣るものは殆ど稀に、皆蠶種製造に當つて居るから製造家は夥しき數に達して居る。然し各戸の製造高は餘杭よりも更に少く、毎戸五六十枚乃至六百枚、之を平均百枚見當で、千枚以上に達するものは僅に數指を屈するに足らない。其の製造年額は先づ四十萬枚から五十萬枚の間と言ふ。然し此處の蠶種は餘杭種よりも小形に、大さは十四吋平方の平付で、その産蛾數は百五十蛾と見て大差あるまい。之に用ふる臺紙も亦た餘杭の紅色紙に對し紹興種は白色の厚い和紙で、蕭山縣龜山鎮に之を仰いて居る。更に餘杭の例に倣つて出殻繭より之れが生産額を推定するに、紹興に於ける出殻繭の出廻量は年額五百擔乃至七百擔の間にあつて、平均量六百擔を基礎に、其の切歩八〇、一升の繭を百五十粒及蠶種一枚の産蛾數百五十蛾としてこの計算は約三十八萬枚に達し、その二八蛾付框製換算は凡そ二百萬枚といふ數字を示して居る。即ち餘杭に次ぐ蠶種製造地として斯業の旺盛なるを知るべきである。

### 九 紹興種の製造法

餘杭種と紹興種とはその體裁を異にすると共に採種法に於ても取引法に於ても前者と別箇

の業態を爲して居ることは興味である點である。先にも述べた通り紹興種は美しい色澤形状乃至織度から言つても我が當業者の意に迎合され、本邦で所謂支那種なるものは紹興種(長圓種)といひ、諸桂種(大圓種)といひ、孰れも此處の流を汲むものである。元來紹興の産繭地は最も早場所にして且つ優良繭を以て知られて居るが、就中南郷地方は桑の發芽は一層早く、四月初旬に掃立て、月末には上簇を了し、五月十日から二十日頃までには大抵蠶種の製造を遂げて居る。

採種法は先づ紹興繭の特性たる厚い毛羽を除き、汚繭を選別するが、矢張り玉繭は之を使つて居る。種繭は長い麻絲に一粒宛繭の一端を通し、長さ丈餘の輪狀を爲す珠子繫とし、之を竹棹に掛けて發蛾を俟つのである。それで屋内に澤山の竹棹を渡し、此處から無數の繭が五六尺の長さになり下つて居る光景は見るからに奇觀である。或はまた珠子繫の繭を圓い蠶籠の上に蛇輪狀に敷き並べて居るものもある。發蛾せるものは順次雌雄の別なく、拾取つて之を莖席の上に移して交尾せしめる。交尾は凡そ一時間に止つて母蛾を産卵室へと移す。蠶卵室の設備は餘杭の暗室とは反對に、却て採光の良い場所を選び、産卵室は床より高さ三尺乃至三尺五寸の高さに架子を設けて之に莖席を敷き、その上に廣く産卵紙を敷くことは餘杭と同様である。産付の作業は矢張り夜間に行はれ、之が技術は餘杭もそうであるが、紙面に萬遍なく隙間のないやうに産付けることが必要である。紙面に班があつたり或は卵數の多過ぎて折重れるものは同功繭其他を使用せる劣等品と看做して需要者は斯様な蠶種を嫌ふが故に製造者は此點に注意を拂ひ、紙面の空間を満たすまでは何遍となく産蛾を取替へ、或は二重産卵のものは小刀を以



て削り取り、更に甚しきは空欄の個所に白扱子ホワイトと稱する糊を以て卵を貼付するやうな細工が行はれる。

## 一〇 紹興種の取引

紹興種の取引に付き先づ特筆すべきは斯業の中心地たる澄潭鎮に例年五月中旬から月末に亘つて毎夜蠶種の市が立つことである。之を一九二五年に於て初日は五月十五日に始まつて月末に終つて居る。而かも此の市に於ける取引は毎日夜半の十二時から翌朝六時といふ變つた時刻に行はれて居る。それといふのは蠶種家は夜半産卵を終へると、直ちに之を市に持ち出して賣るからである。初日の市は最も賑ひ、値段も亦た一番高く、同年は一枚九十仙に生れた。然し相場は時を経るに従ひ日毎に漸落するのが常で、その二十六日には僅に一枚六十仙を唱ふるに過ぎなかつた。この市が立つ時になると、澄潭鎮の本通に並ぶ店舗は殆ど残らず蠶種取扱店に充てられ、是等の店舗を使ふものは店賃として蠶種一枚に付き二仙の手數料を支拂ふ慣習である。蠶種市の取引高は毎夜平均一萬枚として半ヶ月の期間總額十五萬枚に達すといふ。然しこれは澄潭附近に生産さるる全部の數量ではない。蠶種を此の市に賣却するものは自身需要地に行商に赴かぬ者や或は知己親戚等の關係がない爲めにその手引を持たぬ者である。之と同様に市に於ける買人も亦た土地の者で、此處へは餘杭と異つて需要地からは商人が入込んで來ない。即ち買人と言ふのは蠶種家にして自家の製品に加へて市場品をも仕入れ、若くは

單なる商人にして之を仕入れ、需要地に行商して一儲けせむとする連中である。

轉じて紹興種の販路は二つの方面に分れ、大體餘杭種とは繩張を異にするが、一部には競争の立場にある。その一つは錢塘江の以南の地方に於ける蕭山縣を首班に富陽及諸暨方面で、この所謂浙東地方へは流石の餘杭種も姿を見せない。もう一つは浙西地方に於て七里絲の地域に亘り、就中烏鎮ウツンを中心とする一帯が紹興種の牙城で、紹興蠶種家にしてこの烏鎮の名を知らぬものは殆どない。殊に馬忝ウツンに於ける馬家は紹興隨一の大蠶種家として知られ、例年蠶種市場買入高は八千元に達し、更に馬氏の一族は兄弟六家から成り、その六家全部が烏鎮向の蠶種製造に當り、その製造額も約六千枚に上るといふ。そしてこの長男の家は烏鎮に居を構へ、蠶種はこの手を経て附近一帯に配布されるといふことである。此の烏鎮に次ぎ新市、双林、菱湖、湖州及嘉興方面を販路とし、後者の嘉興を除いては輸出向七里絲の産地で、紹興種の歡迎されるのは紹興種の繭が純白なからである。それから澄潭の市が開けると、紹興の蠶種家及蠶種商は蠶種を凡そ二百枚宛、蓋のつける圓形の竹籠に入れて續々需要地を指して船で曹娥江を下るものもあれば、或は陸路三日を費して、彼等の多くは先づ蕭山縣の龜山鎮へやつて來る。そして様々な店館に陣取つて蠶種一枚一元二十仙乃至一元四十元で賣捌き、此場合店主に對して賣上金の一割を手數料として割く慣習である。そしてまた中には恰度繭の出廻頃村落に亘つて蠶種を入れた圓籠を天秤棒に擔ひ呼聲を立てて蠶種を賣歩いて居るのを私は暫見受けた。



## 一一 無錫養蠶家の自家採種

餘杭及紹興の蠶種製造業は兎も角も獨立せる立派な生産業の一つとして特色ある發達を遂げて居るが、其他地方に至つては營業としての蠶種製造業を見ることが出来ない。中部支那の最大繭市場たる無錫地方に於てさへ養蠶家は孰れも自己の成繭より採種し、加ふるにその方法は甚だ原始的である。即ち無錫地方に行はる採種法を見るに、先づ種繭には自己の獲れる繭の中より優繭を選出して之に當てる。故に違蠶を來せる年柄には之を他に上作であつた養蠶家から購求する。その値段は普通繭價よりも割高なるは勿論で、例へば一九二四年無錫の繭相場は當時一斤五十八仙なるに、此種の種繭用は一元に付き一斤二兩百八十匁即ち一斤に付き八十九仙の割合で買賣されて居た。

種繭は先づ毛羽を除いて之を半斤とか一斤とか、自己の要する數量を秤量し、種繭一斤より産付せるものは之を一斤種と稱し、種繭半斤ならば半斤種(八兩種)と云ふが如く、蠶種の數量は之を要せる種繭量を以て表はす慣習である。之によつて一斤種を框製二八蛾付に換算するに大體四枚半と見るのが近似せる見當であらう。次いで種繭は紹興の採種法と同様に珠子繫とするが、一户の種繭量は概ね二三斤に過ぎぬから珠子の長さも一二尺に過ぎない。それに既述の如く此地方は大抵夏蠶を飼ふからその二化性の一化期を同時に採種し、この種繭は別の珠子繫とし或は春繭と同一の珠子繫に赤色紙の小片を挟みて區別するのを見る。更に産付には普通木

綿の布片が使はれるが、これは木綿といつても使い古しの襪襦で、白地もあれば紺物や縞物もあり、本邦ならば雑布刺にするやうな汚い布地であるには驚く。この布地に産付ける蠶蛾を指して此地方では俗に蠶蛹子と呼ぶが、これは蛾の容姿が「こもり」に酷似して居るからで、其の採種法に對照して如何にも似合はしい名稱であらう。過る一九二四年の暮第二次蘇浙戦争で、無錫から江陰に互る地方に戦線が展開され、この一帯の住民が家を捨てて避難せる折柄この空家に入り込んだ軍隊の爲めに、蠶種は厨房用や銃器の掃除に使はれて終ひ、當時此の田舎に蠶種缺乏が宣傳されたのも興味ある話である。斯様に江蘇省地方は概ね農家が育蠶の一部として自ら採種するが故に、この零碎なる出殻繭は無錫南門外を集散市場として出廻量も千數百擔に達する有様である。そして之から推定せる蠶種製造額は框製實に四百五十萬枚の數字である。

## 一二 各地の護種及貯藏

自家採種たると蠶種を購入するものとを問はず、養蠶家は殆ど皆收繭と同時に翌春用の蠶種を準備するが、之を貯藏するに夏の酷暑には風涼の場所に吊下し、秋冷の頃からは衣裳箱其他に收めて居る。そして此間催青期までに蠶卵の保強、發蟻の齊一を期する爲めに種々の方法が講せられて居る。先づ無錫地方に於ては臘月冬至の日に至つて蠶種を家根の上に三日三夜曝らして霜にあてる。此の場合蠶種を石灰の溶液に浸するものを淡種といひ、ニガリで處理するものを鹽種と呼ぶことは既述の通りである。此の護種法に詳しく説明を加ふるならば、淡種とは



冬至の頃に石灰を桶の水の中に入れ攪拌して白色の状となし、暫らくしてその石灰の沈澱して上部の澄みたる溶解液を甕に移し、この中に蠶種を浸す、然る後煮沸せる熱湯に茶葉を入れて冷まし、この茶湯が熱からず冷たからざる程良い加減になつた時、これで蠶種を洗滌する方法である。之に對し鹽種とは前記石灰の溶液に代ゆるに殺菌力の強いニガリを使用する方法であるが、更に地方により種々なる處置が行はれて居る。例へば海寧縣下長安地方では冬季石灰粉末の液を藁を以て蠶種に振り掛けたる後之を天日に乾し、また嘉興地方にあつては陰曆十二月十二日がお蠶の誕生日であるといふので、この日に上記の處置を施したり或はニガリの溶液に數分間之を浸して居る。また海寧縣の王店地方では舊五月五日の端午節には燒酒に農黄を入れて飲む風習であるが、この日に此の酒を口に含みて蠶種に吹き掛けたり、或は嘉興縣下の屠甸地方では清明節に蠶種を河水に浸すと聞く。

### 一三 新興の改良種

之を蠶種より見たる中部支那蠶業は各地養蠶家の年々飼育する蠶種は殆ど一定不變なるを以て本邦のやうな品種の錯雜を見ることなく、地方毎に繭は特徴を有し、延いては夫々特色ある生絲を生産するの便を得て居る。けれども蠶種の内容に至つては何等の改良進歩を見ざるのみならず、微粒子病の蔓延が甚しく、僅に強健なる蠶兒より採種し之によつてその命脈を保つといふも過言ではあるまい。そして之が改良の聲は各種機關によつて頻りに唱導されたるにも

拘らず是れまで改良種<sup>カイシン</sup>の普及は遅々たるを得なかつた。これは固より前記各項に詳述せる在來種の優勢なる生産によつて改良種の普及を防げられて居ることは言ふでもないが、更に有力な一因としては購繭者としてその力に俟たねばならぬ肝心の製絲家が甚だ冷淡であつたことを看過し能はぬ。而して此種改良事業に關しては特に後章に詳述すべきも、試みに一九二四年に於ける改良種の製造高を見ると、中國合衆蠶桑改良會一四〇、〇〇〇枚、江蘇省立女子蠶業學校一六、〇〇〇枚、省立無錫育蠶所二、〇〇〇枚、南京金陵大學一六、〇〇〇枚、浙江省立原蠶種製造所三、〇〇〇枚、省立甲種蠶業學校二、〇〇〇枚、其他五、〇〇〇枚等を合して計十八萬四千枚を算した。

その中にも江蘇省立女子蠶業學校の製造高は急激なる躍進を遂げ、一九二八年には同校及其の關係團體の製造高は約十四萬八千枚に達し、之が爲めに總額五十萬枚を超ゆるに至つた。此の女子蠶業學校が斯くも頭角を現はせるは校長鄭氏の人格的手腕や無錫製絲家の後援乃至同校が女生徒たること等の諸點が最も與つて力ある。それは先づ同校を控ゆる無錫地方が逐年繭質劣化の傾向を呈するに至つたことは、原料繭を是非共無錫附近に仰かねばならぬ事情の下にある無錫製絲家にとつて其の蠶種改良は切實なる問題として考へられて來た。斯る氣運に際會して女子蠶業學校の製造せる蠶種は他の機關による改良種よりも好成績にして能く農民の好評を博し得て、之を學堂種<sup>オウダン</sup>と呼び漸次需要を加へて來た。一方之に力を得て同校の推廣部は其の生徒及卒業生をして農村に稚蠶共同飼育及育蠶の指導に當らしめたが、元來支那の育蠶は家婦の仕事たる關係から之が指導に當る者は男子よりも女子の手に俟つことが最も當を得



て居る。是等の有力なる事情は期せずして同校の名聲を高め、遂に無錫製絲家の財的援助を得たことが、その發展に與つて力ある。斯くして一九二七年には新に學校卒業生三名及無錫製絲家二名の合資によつて資本金二萬元の大有蠶種製造所の設立を見るに至つた。そして學校に近接せる地積に六千元を投じて最新式の蠶室を建設し、同年の製造高は四萬八千枚を算した。而かも蠶種は前金拂にて全部賣約濟みの盛況を告げて同所の事業は創立勿々より相當の利潤を擧ぐる有様であつた。而して此種機關に關する詳細は後述第十章に譲り本章には今や改良種の製造は科學的方法の下に新なる獨立生産業として勃興せんとする氣運にあることを記すれば足りる。而かも其の製造額は非常な勢にて増加すべき形勢にあるが、其の一半が在來蠶種製造家の手を付けなかつた夏秋蠶種を目標として居ることは看過することの出來ない事實である。斯くて改良種の製造業は支那蠶業に對する曉鐘であることを知らねばならぬ。

## 第四章 養蠶業

### 一 養蠶に對する農民の觀念

現今我が日本に燦然たる蠶業の開祖が支那であることには何人も異論ないであらう。傳云ふ黃帝の代に養蠶が始つたといふ故事を眞とすれば、支那の蠶業は實に四千六百有餘年來連續と相繼いで居るのである。現に支那の國定歴史教科書にも開卷に元始神農氏は民に農法を教ふると共に「有熊氏が育蠶法を授けた」といふ記事を載せて居る。固よりこれは蒙昧な神代に於ける模糊たる傳説に過ぎないかも知れないが、兎も角も支那蠶業が最も古い歴史を持つことは疑ふべくもない。而して此の太古の蠶業は浙江省に入つて湖州を中心とする浙西一帶に有終の果を結ひたるものと言ふべく、換言すれば浙西地方に發達を遂げた其の育蠶並に機械は往時爛熟せる支那文明の一部とも見るべきである。隨つて浙西蠶業は支那蠶業の代表として種々賞賛に値する點があるが、之を一言その蠶業は祈禱、信仰乃至迷信的育蠶法である。この地方では蠶を敬稱して寶々若くは蠶寶々と呼んだ方が通りの良いことは既に述べたが、或はもつと碎けて蠶姑娘（お蠶嬢の意）と唱ふるなど、蠶を以て神體に擬して、強烈に之を崇信し、之を取扱ふに奉仕的態度を持つるものの如く、彼の蠶室に他人の出入を厭ふ祕密的慣習の如きも他人に之を見せることが蠶神を冒瀆するものとの觀念から來て居る。然らば彼等が信仰する蠶神とは何物



を指すかと言ふに、抑々蠶神の傳説は「元始天尊が人間の寒苦を憫み給ひ、馬鳴王菩薩を化して蠶身となし、また王女をして生を人間に託せしめて有熊氏の元妃と爲させ給ふて、人間に育蠶の法を教へ、年に一度蠶の口から新絲を吐かせ、以つて人間の寒苦を濟ひ給へり」といふにある。従つてこの蠶神には蠶花五聖とか其他諸神があるが、その主なるものを擧げると先づ大聖蠶皇天子を始として、化蠶馬鳴尊王、育蠶有熊元妃、蠶室地支之神、蠶官蠶命之神、蠶花利市之神、把蠶大姑元君、把蠶二姑元君、把蠶三姑元君、蠶官順利將軍、百無禁忌之神、千筋萬兩之神等の諸神で、南潯には之等を祠る蠶神祠といふ廟がある。即ち蠶を以つて神體と看做し、之を鄭重に取扱ふものは收穫が多く、之をないがしろにするものには收穫が少いといふのが彼等の信仰である。

然るに人間には欲があつて桑葉のないのに育蠶を行ひ、桑價が高くなれば、蠶を水中に放棄し或はこの取扱を粗忽にし、爲めに神罰を受くるの保し難いといふところから、地方によつては三眠になると、飼育中に於て犯し易い罪名を擧げて、この赦罰を乞ふべき旨を認めたる靈符を店から買求めて廟の道士を招じ、その靈符を焼く風習が行はれて居る、今その靈符にある赦罪の個條を擧げて見ると次のやうなものである。

- 一、春蠶繭を狼藉輕棄するの罪
- 一、蠶を便所其他汚穢の場所に置くの罪
- 一、蠶身を六畜の飼料に供し又は水中に放棄するの罪
- 一、蠶箔に字の書いた反古紙を糊付するの罪

- 一、大眠の蠶兒を抓傷するの罪
- 一、給桑の度合を失する罪
- 一、他人の來往によつて冲犯する罪
- 一、失火燭忽の爲め燒傷するの罪
- 一、蠶室を不潔不淨にするの罪
- 一、天蠶出火(三眠)に給桑量を輕少にする罪
- 一、蠶家に咒詈のある罪
- 一、小供が蠶身を以て釣餌とする罪
- 一、蠶身を疏失し鼠傷する罪
- 一、蠶多く桑少くして魃地に棄つる罪
- 一、天蠶を路傍に捨て之を踐む罪
- 一、天蠶を上簇するに之を捏傷するの罪
- 一、回山採繭の時機を誤る罪

これは即ち蠶の供養であるが、之によつて見るも如何に農民が敬神の心を以て慎重に育蠶を營むかを窺ふに足る。或る田舎で老婦は私に告げて言ふには、養蠶といふものは「靠普薩と運氣」によるもので、先づ菩薩様を信仰することが肝心であり。それからは運次第なものであるとの意を述べた。そこで若し彼等は神を信じて、蠶作が悪ければ、運氣不好(運が悪い)で、片付け



て終ひ、そこは諦が早い。従て飼育期は諸事を忌むは勿論日常の交際を避けて中には入口に「蠶房重地、閑人止歩、無論親友、一概免入」と書いた參觀拒絶の貼紙をして居るものもある。餘程進歩的な農家でなくては育蠶状況を減多に見せて呉れない、それどころでなく飼育期中の農家は要塞堅固であつて、外部からその片鱗さへも盗見することが出来ない具合である。何故かと言ふに蠶架は草荐ツラヤシで囲み、更に蠶室の入口には菰を下ろして終ひ、そのみならず此の時期には農家の庭を入れて一丈位の高さに葦簾張を爲し、この出入口にも戸を設けてある。これは蠶兒の成長するに従つて仕事も大きくなり、軒下で給桑もやるやうになるからヨシズで扉を構へて蔽す譯である。斯様に育蠶期は親戚始め隣近所の往來を中止して終ひ、此期に人家に出入し得るのは、村の小供と犬位のものである。若しもこの中に這入つて行つて「蠶を見せても差支ないではないか」などと言はうものならば『お前には差支なくとも、こちらにとつては年に一度の養蠶だ、早く出て行け』などと、劔もほろほろの挨拶を喰はされることは稀ではない。

浙西農民の蠶に對する信仰的觀念は育蠶の上に尠からぬ好果を與へて居ることは察するまでもないが、其の反面頑迷固陋の性質と相俟つて改良種の普及並に育蠶技術の指導奨勵に障害を及ぼすことは争はれない。同時にまた下らぬ迷信も之に伴つて居る。序に此の迷信に就いて二三の例を挙げると、彼等農民の信仰するは普薩といふ神様を祀れる廟で、これは大抵の村落に存在して居る。育蠶期中彼等は様々な日にこの廟に進香參拜するし、或はまた「蠶花茂盛」とは蠶作の豊收であれかしといふ標語であるが、田舎の蠶具店には掃立用の鵝毛に添へて蠶花蠶花と

呼ぶ造花一組を賣つて居る。この造化は簪のやうな形で、之を掃立の際女の子の頭にさすと豊收を得らるといふ。更にまた稚蠶用の蠶箔は年々紙張をするが、此の際蠶猫といつて五寸方大の赤色又は青色紙に猫が鼠を唾へて居る圖を描いた版畫を貼付するがこれは一種の鼠除けである。この版畫も一仙銅貨に四枚で蠶具店に賣つて居る。同時に此の際村の廟から一枚四十字位の喜捨をして育蠶豊作の祈禱文を木版せる紙を貰ひ受け、之を前記蠶猫と共に蠶箔に貼付する風習がある。試みに其の祈禱文に曰く「清信奉爾供神保第子。即日投誠伏爲。于今年某月某日。本庵啓建蠶花醮壇。法僧三寶取異。年々育養春蠶勝意絲幾多。收入口平用伸政。蠶室方位十二禁忌共垂明證。馬鳴玉菩薩……伏惟鑒納。保蠶文祝」とある。

實際浙西方面に於ける蠶業視察は稀に物の解つた人間を除いては門前拂を喰はされたり、猛犬に吠え立てられて其の實地踏査は並大抵ではない。然るに轉じて江蘇省の代表的蠶業たる無錫地方に至つては時適々頑迷な老婦から參觀を拒絶される位で、大抵は嫌な顔を見せることなく、殊に無錫の近郊に至つては寧ろ喜んで見せて呉れるといふ具合である。それに無錫附近は養蠶が最も盛で、各村落戸毎に飼つて居るが、彼等の住宅は多くは九尺二間の陋屋であり、蠶室と言へば表通りに面した入口の土間を充てて居るから、外部から通りすがりに覗き込まれる有様で、自然之を陰匿する術もない。此の點は頗る平氣であるが、然し繭價などには抜目のない程鋭敏で私はよくこの老婦から繭價を尋ねられたり、何の用事で來たかなどと質問を受けるが、養蠶を見に來たと答へれば不審相に老婦は『上海からやつて來たでは嘘かし盤費盤費旅費旅費が掛るで



あらう」と言つた調子である。それだけ此の地方の飼育状態は浙西地方に比して粗放的と評する外はなく、養蠶に對するこの兩地方の相違は先づ知悉して置かねばならぬ點である。

## 二 養蠶の規模

そが祈禱的育蠶法は更にまた之を技術方面から觀察すれば彼等のいふ天と風とによる育蠶である。此の場合に天とは氣候の温暖を意味し、風とは大氣の乾濕と解釋を下したらば良からう。即ち蠶作の豊凶なるものは祖先相傳の技術を越へては一に天候に支配さる、といふのが彼等の觀念である。例へば不作の年柄には暫々之を「天空一天熱一天寒」(天候不順)によると言ひ、或は「北西の風に崇られた」などとその原因を天候に歸して居る。支那の農諺にも「三月三日晴、絲綢賤、蠶訊豊」と之を譯せば陰曆三月三日に晴天ならば、養蠶は豊作で生絲や反物は安いと云ふ意味であり、又曰く「四月天難做蠶要溫和、麥要寒」と即ちこれは陰曆四月の天候が溫和なれば養蠶は良いが、麥作には悪く、天公と雖も兩全を期することは六ヶ敷いと、の遇意である。之によつて見るも、彼等の育蠶が餘りに人為を加へない天然育に近いものと言ふべく、反面現代の科學的養蠶法から見てその技術が如何に拙劣なるかを語るものである。

随つて彼等の育蠶は豫め收穫を適確に期待する能はずして所謂養蠶經營は甚しく安定を缺いて居る。その結果第一養蠶の規模といつたところで、之を掃立量で示しても、收繭量で表はしても嚴格に言へばその當を得ない。勿論育蠶の規模は蠶室即ち住宅から略ぼ見當は付くが、然

し掃立量から言へば通例毎戸餘杭種二三枚、蠶量二三十匁から多きは十枚、蠶量百匁といふ大量の掃立をやつて居る。故に之を掃立量から見れば一般に大養蠶家の如くに考へられるけれども、その收繭量は數十斤見當に過ぎない。逆に其の大小を收繭量で示すにしても同量の掃立から、その豊凶の差によつて收繭量に著しい懸隔を來すから、八釜しく言ふならば、之によるも直に其の飼育量を付度することが出來ぬ。換言すれば養蠶家の掃立量は甚だ過大に失し、彼等は常にその有する蠶種は悉く之を掃立るばかりでなく、絲況好轉の折柄には新に春季蠶種商より蠶種を買入れて之に思惑を試みるものを加へる。然し本邦のやうにこの掃立量を根據に收繭額を豫想することが出來ない。當業者は掃立期に例へば七分作とか八分作といふが、これは蠶蠶の發生歩合を指したもので、一枚の蠶種でも年によつて蠶蠶の發生に相違を來して居る。續いて稚蠶期に極度の自然淘汰を見るが、兎も角掃立量は浙江省地方に於て前記餘杭又は紹興種二枚乃至十枚、無錫地方は既述自家製半斤種乃至三斤種の間にある。

翻つて收繭量はどんな見當かと言ふに、通例彼等か繭行(繭買入所)へ繭を持込む數量は一荷口浙江省地方は平均約二十斤、無錫地方は五斤乃至十斤に過ぎないが、これは勘定高い養蠶家の打算から收繭を幾回にも切賣するからで、之を以て收繭量とは看做せない。曾て此點に關して浙江省蕭山縣の狀況を調査せるに此の地方は比較的大規模の經營を爲すものが尠からず、通例二三百斤の繭を獲るものはザラにあり、大養蠶家になると五六百斤から稀には千五百斤の收繭を擧ぐるものもあると聞いた。同様座繰業の盛な浙西地方に於ても少しく熱心な養蠶家は



二三百斤を獲つて居るし、また無錫地方に於ける飼育量は平均蠶架二檯と見ても百數十斤の收繭量であらう。然しまた随分零碎な養蠶家も數の上からは尠くないから、之を平均して蘇浙地方に於ける一戸の飼育量は和貫十五乃至三十貫の收繭を目標に飼育するものと見て大過あるまい。

### 三 蠶室と蠶具

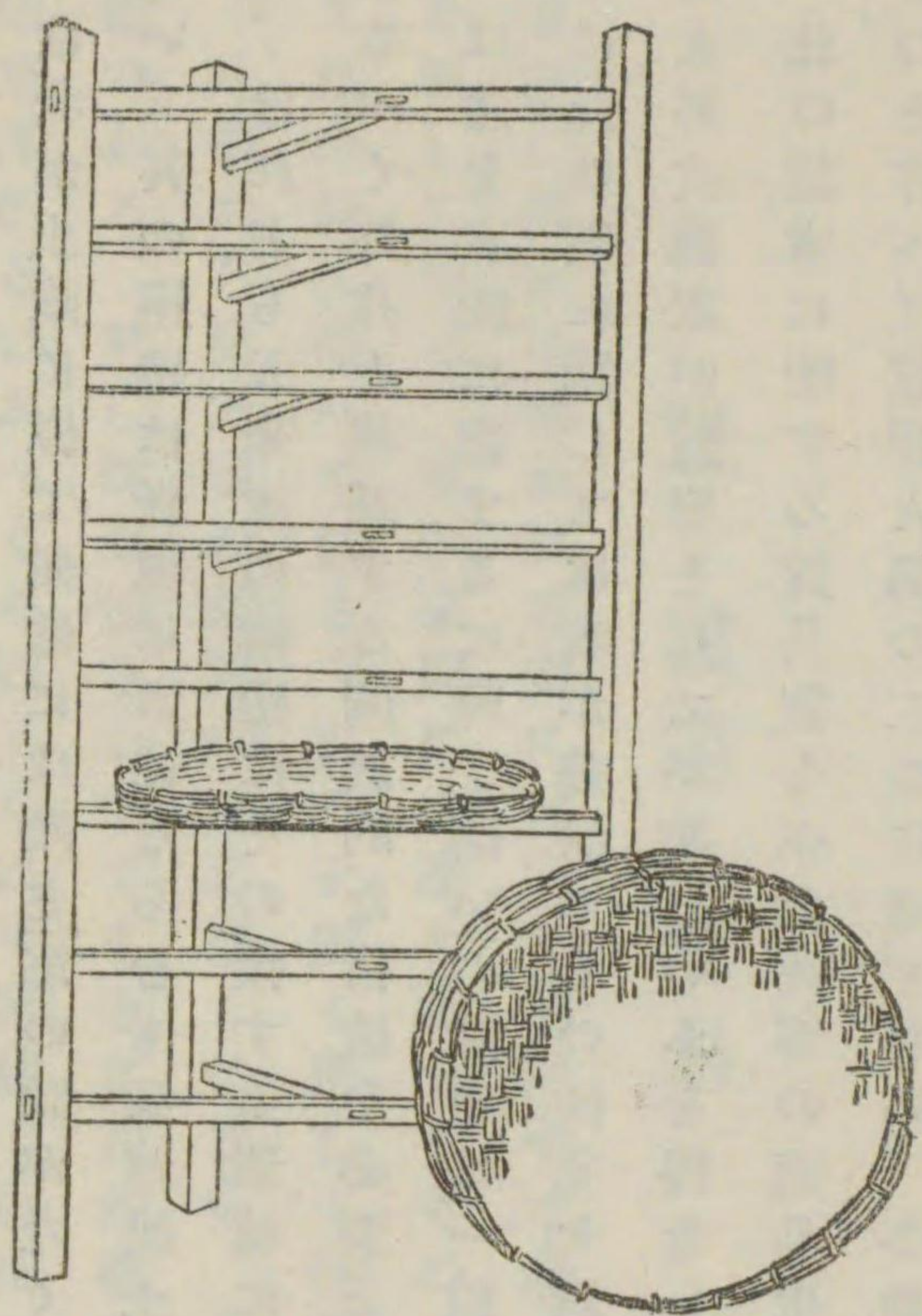
蘇浙の農家は概ね到る處に通ずる運河や水溝の畔を選び、其處に數戸若くは十數戸集つて部落を爲して居る。家の裏側には濠を繞らし、その周圍は雜木林や竹叢で圍み、家は之を脊にして東又は南向に構へて居る。表庭を廣く劃して作業場に充て、此處は煉瓦を鋪きつめたものもある。外觀から見た家の體裁は左迄悪くはない。屋根は大抵瓦葺であるし、粗末ながらも黒い煉瓦建である。然し煉瓦造といつても直に西洋建物を想像するは當らぬ。屋根や柱梁の組立は矢張東洋的といふべく、その多くは平屋建で、屋根を前方に突出して軒を作り、更に粗造のものは四壁に木柱を立てて本邦の壁に代るに煉瓦を用ひて居るものもある。一度屋内を覗くと、邦人のやうに床板を高く上げて疊の上に起臥する生活様式から見たならば全く納屋同然である。敷居を跨いても内部は庭から地続きの土間である。家の間取りは入口を這入つた直ぐの部屋が家人の居室であり、食堂兼客室でもある。脚の長い卓子オウソウを中央に橙オウソウ子オウソウ腰掛や家具、農具其他を雜然と並べてある。隣室には粗雜な木製寢床を据へ、また衣裳其他貴重品を收める櫃も此處に

横はつて居る。此の室内の殺風景にして不潔なる様子は潔癖の邦人には到底起臥に堪えそうもないが、然し其處に支那人の特徴たる簡易生活が窺はれる。飼育期になると家人の寢室や居室は『蠶寶々』の爲めに讓られて蠶兒と同居といふことになるが、之が蠶室として適するか否かを考ふるに、それには實地飼育に俟たなくては一概にその可否を論斷するを許さない。之を我が農家に較べて先づ第一に異ふのは採光換氣の不備な點で、前者の開放的なるに反し、支那の農家は我が土藏に似て側壁には殆ど窓の設がなく、その出入する表裏兩側に牖戸を設けるに過ぎない。其の構造は保温には佳ならむも、我が風土から言へば忽ち換氣の不完全を訴ふるであらう。けれども元來家の構造はその接する環境に順應すべく、本邦の如き多濕の地方にあつてはなるべく、外界と相通する開放的な構造を必要とするならむも、風土を異にする蘇浙地方にあつては之を實驗に徴するに障子圍いの蠶室は一般農家の蠶室よりは却て成績が良くない。要するに此の點に關しては我が農家とその住宅を蠶室に充てて不可がないと同様に、支那にあつては支那式農家が蠶室として不適といふを得ないであらう。

此の蠶室に配する蠶具類も亦た彼等の簡易生活から割出され至極簡便であつて、先づ金目かなめのものと言へば蠶棚と籠の二つに過ぎない。各地を通じ最も廣く使用される蠶棚は之を蠶架子と言つて上圖の如く三脚の木柱を以て組立て、無錫地方のものは十段、浙江地方は九段からなつて居る。其の一脚の横木は他脚の横木の中央に交又せる箇所、廻轉し得る装置となつて居る。この三角形の蠶架子は家居の邪魔にならぬやう室内の四隅を利用するに都合良く、また之を何



處へでも自由に移動することが出来る。而かも不用の節は之を疊みて天井裏に收め置き、その育蠶法から見てこれ位調法な道具はないであらう。加へて一度買へば長年の使用に堪ゆる謂はば末代物である。無錫地方ではこの蠶架子一個を一棹ゴウと稱して育蠶の標準單位と爲し、この



棹數を以て飼育量を示す慣習である。

この蠶架に載せる蠶籠は蠶匾と言ひ、その取扱の輕便なる點に於て前者と好一對を爲して居る。これは我が九州地方に用ひらるるものと同様な圓籠である。普通稚蠶期用のものを蠶絲ゴクと呼び、竹の皮部のみを以て編み、細い目を有するから年々紙帳りをして用ひて居る。之に反して壯蠶期用のものは竹の皮と肉とを交互に網代に編めるもので編目がない。大きさは各地一定せぬが、大形は徑四尺内外にして浙江地方では飼育量を表はすにこの枚數を以てする慣習である。此の圓籠も耐久なるに加へ農家にとつては單に育蠶用のみならず、穀類の容器に充てられ或はその圓形にして椽を有するを以て各種器物の蓋の代用に調法であるが、難を言へば重過ぎる點である。而して蘇浙地方は産竹に富み且つ手間賃も安いからこの圓籠と言はず、桑摘籠、繭籠等孰れも廉價

で得られる。

更に特色ある蠶架子、蠶匾に對する附屬品として本邦には見られない蠶具に草荐ワラコといふのがある。これは老大な筵で、縦は蠶架子の高さと同一程度で、凡そ一丈七尺、横は一丈四尺に及び、藁で編むが、間隔二三尺毎に竹の骨を加へて居る。これが用途は例の三角式蠶架の周圍を包みて屏風立の用を爲すものである。其の他桑切臺として組代りに堅く藁を束ねて竹の籠をかけた葉灯エイトンといふのも變つて居る。此種竹製蠶具は浙西地方に於て桐鄉縣城がその製造地として知られ、陽春掃立の頃此の地方に行けば蠶具を満載せる小舟と行交ふことが尠くない。今蠶具に就いて一九二四年嘉興南門外の某蠶具店で調査せる價格を左表に掲げやう。

一、掃立用具

驚羽及蠶花

一組 四十文

二枚の驚毛より成る、之に蠶花と云ふ簡單な造花一本を添ふ

一、給桑用具

葉 灯(桑切臺)

一箇 一〇仙

藁を束ねて幅四吋位に縦斷に立ち切り、竹の籠をかけたもの、圓形、徑一二吋

拔 籠(桑摘籠)

同 一六仙

徑一八吋、深き一四吋、桑二十五斤入

零 籠(同小形)

同 一一仙

桑十五斤入

一、蠶箔用具

蠶 絲(稚蠶期用)

一枚大形 二五仙

圓形、竹の皮にて編み椽邊あり。編み目ある故紙張して用ふ。

同 同小形 一五仙

第四章 養 蠶 業



蠶籠(壯蠶期用)	同 大形	五〇仙	蠶籠と同形、竹の皮と肉で編む、編目なし、大形徑四八吋、小形三一吋
同	同 小形	二〇仙	
一、繭容器			
繭斗 繭(竹製)	一箇大形	一二仙	繭四斗入、徑一四吋、深一五吋
同	同 中形	一〇仙	同三斗入、同一三吋、同一二吋
同	同 小形	六仙	同一斗入、同一〇吋、同一〇吋
一、蠶棚其他用具			
蠶架子(木製)	一 臺二、〇〇仙	三脚九段附	
草 荐(補温兼防風用)	一 枚 三二仙	竹を骨にして藁して編めるもの、長さ一丈四尺、高一丈七尺	

上表に據り試みに生繭百斤見當に對する蠶具類の投資を計算するに、蠶架子一檣、壯蠶用圓籠十二枚、稚蠶用三枚及草荐一枚其他桑籠繭籠火鉢等を加算するも僅に十二三元に過ぎない。

#### 四 飼育經過表

變つた蠶室に簡單なる蠶具を以てする飼育の實況を述ぶるに當つて、先づ參考に飼育日數、給桑回數及桑量其他の要項を纏めたる飼育經過一覽表を掲げたきも、肝心の農家から之に關する完全な材料は得るに由なく、之を蠶業學校其他機關のものに據る外はないが、是等は所謂新法を以て無毒蠶種を飼育するものの成績にして、農民の老法子(古法)とは固より同日の談ではない。據つて此種材料の中より比較的農家の飼育に近いものを選ぶに一九二五年江蘇省女子蠶業學

校の改進社が震澤鎮の田舎に民屋を借受けて模範飼育を行へるものを第一表に擧げ、同時に此際改良種を以て稚蠶共同飼育を行ひ、その三齡から之を一般農家二十餘戸に分譲して、爾後在來の土法を以て飼育せる成績を第二表として之れが成績を示すと左表のやうである。

#### 第一表 模範飼育の成績

春蠶新圓種蠶量五匁二分各齡經過表 (掃立四月十九日)

食 桑 中	一 齡	二 齡	三 齡	四 齡	五 齡	平均又ハ合計
食 桑 中	四日八時	三日三時	三日九時	三日三時	六日〇時	—
停 食 中	一日六時	一日二時	一日五時	二日五時	—	—
各 齡 日 數	六 日	五 日	五日八時	六日〇時	六日〇時	二六日四時
給 桑 回 數	三回	三回	三回	三回	三回	一三回
給 桑 量	一・一〇匁	三・〇〇	一三・五	三三・〇	一七・七〇	二六・五〇匁
對 蠶 量 二 匁 給 桑 量	二五匁	六三	二・四三七	六・〇九六	三・四〇九三	四三・五三匁
蠶 座 最 廣 面 積	一六立方尺	壘	一〇〇	三三	四二	—
平 均 溫 度	七・三	七・三	七・二	七・三	七・二	七・九
平 均 濕 度	六九・三	七〇・一	七五・三	七九・九	八一・四	七五・三
同 諸 桂 種 蠶 量 五 匁 二 分 各 齡 經 過 表 (掃立四月二十日)						
食 桑 中	一 齡	二 齡	三 齡	四 齡	五 齡	合計又ハ平均
食 桑 中	四日九時	三日五時	三日七時	四 日	七日七時	—
第四章 養 蠶 業						一三九



停桑中	一日三時	一日八時	一日三時	二日	一四〇
各齡日數	六日七時	四日三時	五日三時	六日	七日七時
給桑日數	三回	二回	三回	三回	三回
給桑量	一〇五〇匁	三九	二二八七	三三六	一四四〇匁
對蠶量一匁給桑量	三三	七九	二四七五	六八三	三七三五
蠶座最廣面積	一六立方尺	五	一〇〇	三二	四八
平均溫度	七・三	七・三	七・二	七・三	七・四
平均濕度	六九・三	七〇・一	七五・三	七九・九	八〇・四
成繭割合					
繭量	五・二	九三・八〇	一・〇〇〇	一〇・〇〇〇	一〇四・〇八〇
上繭	五・二	一〇一・〇五〇	一・一〇〇	一・一〇〇	一一・一〇〇
下繭	五・二	九三・八〇	一・〇〇〇	一〇・〇〇〇	一〇四・〇八〇
合計	五・二	一〇一・〇五〇	一・一〇〇	一・一〇〇	一一・一〇〇

第二表 三齡以後土法による飼育成績 (但收繭量は層繭込)

飼育者	種名	蠶量	飼育日數	收繭量	對蠶量一匁ノ收繭量	飼育者	種名	蠶量	飼育日數	收繭量	對蠶量一匁ノ收繭量
改進社	新圓種	五・二	二六	一〇四・〇八	二〇・二二	同	同	一〇・〇	三三	一八・〇八	一八・一四
同	同	一五・〇	二六	二五・一四	一六・三	同	同	五・〇	三三	九・一三	一八・〇六
同	同	五・〇	三三	七八・〇〇	一五・一〇	同	同	五・〇	三三	一〇一・〇六	一〇・〇八
同	同	一〇・〇	三三	一六・二二	一六・〇九	同	同	一〇・〇	三三	一四六・〇四	一四・一〇
改進社	諸桂種	五・二	三〇	一一五・一四	三三・〇五	同	同	一〇・〇	三三	一五七・〇八	一五・二二
同	同	一五・〇	三〇	三三・〇〇	二・二二	同	同	五・〇	三五	九一・〇〇	一八・〇三
同	同	一〇・〇	三三	一四四・〇四	一四・三七	同	同	五・〇	三三	九二・一〇	一八・〇八
同	同	一〇・〇	三三	一八九・〇五	一八・五	同	同	五・〇	三三	八五・〇八	一七・〇三
同	同	五・〇	三三	八六・〇三	一七・〇四	合計		二〇五・四		三、五四四・〇三	
同	同	五・〇	三三	九七・〇八	一九・〇八	平均		—		—	一七・〇八
同	同	一〇・〇	三〇	一六五・二二	一六・〇九	同	同	一〇・〇	三三	一七二・〇六	一七・一一
同	同	一〇・〇	三〇	一三六・〇八	一三・一〇	同	同	一〇・〇	三三	一四三・〇〇	一四・〇五
同	同	一五・〇	三〇	二五・一四	一六・三	同	同	一〇・〇	三三	一三八・一五	一三・一四
同	同	一五・〇	三〇	一一五・一四	三三・〇五	同	同	一〇・〇	三三	一五七・〇八	一五・二二
改進社	諸桂種	五・二	三〇	一一五・一四	三三・〇五	同	同	一〇・〇	三三	一五七・〇八	一五・二二
同	同	一五・〇	三〇	三三・〇〇	二・二二	同	同	五・〇	三五	九一・〇〇	一八・〇三
同	同	一〇・〇	三三	一四四・〇四	一四・三七	同	同	五・〇	三三	九二・一〇	一八・〇八
同	同	一〇・〇	三三	一八九・〇五	一八・五	同	同	五・〇	三三	八五・〇八	一七・〇三
同	同	五・〇	三三	八六・〇三	一七・〇四	合計		二〇五・四		三、五四四・〇三	
同	同	五・〇	三三	九七・〇八	一九・〇八	平均		—		—	一七・〇八

(註) 對蠶量一匁の收繭量は各戸平均新圓種拾五斤三十匁(二貫四百三十匁)諸桂種は十七斤九十匁(二貫八百十匁)にして一般在來種に比して頗る好成績なるは無毒蠶種蠶具の消毒、稚蠶共同飼育及巡回指導等の結果と知るべし。

前二表に對照すべき餘杭又は紹興種の土法による飼育成績を擧げ得ざることには隔靴搔痒の感なきを得ないが、在來種は飼育日數に於て改良種よりも著しく短期にして特に五齡期改良種は少くとも七八日を要するに在來種は普通五六日にて足りて居る。之に次いで舊來の育蠶法が甚しく密飼であること、兎角給桑を惜み勝な傾向を特徴として擧ぐべきであらう。而して土法により製造せる在來種を一般農家が飼育するに要する日數は通例二十五六日、上簇五六日と丁度一ヶ月を算し、各齡期の經過は大體次のやうである。



計	一齡	二齡	三齡	四齡	五齡	計
食桑期	四	三	三	三	五	一八
眠期	二	一	二	二	一	七
計	六	四	五	五	五	二五

計	一齡	二齡	三齡	四齡	五齡	計
食桑期	四	三	三	四	六	二〇
眠期	一	二	二	一	一	六
計	五	五	五	五	六	二六

### 五 催青と掃立

清明節も過ぎて春光麗かに桑の新芽が二錢銅貨大に伸長すると愈々掃立の準備に取掛る。此頃到着る處農家の庭先には新に紙張りをせる稚蠶用圓籠を天日に乾燥して居るのを見受けるが、之には字の書いた反古紙は決して用ひない。それから一方櫃の中から蠶種を取出し、之を内側にして四折に疊み、この際卵面の接觸を防ぐ爲に燈明の芯を一寸位の長さで切りたるものを處々に挟んで之を布呂敷に包み、更に布團綿の中に入れて置く状態である。布團綿と言つても彼等が日常使い古した布團の皮を裂いた儘のもので之を寢臺の上に置き、天候と桑葉の伸長具合により催青を一層促進せんとすれば晴天には之を屋外に出し、其の上に布團を蔽ひて日光浴を行ひ、夜間には身體に付けて體温を與へること三日にして發生すると言ふことである。或はまた書物によれば晝間労働せぬ婦人の脊上又は懷中に温むと聞くが、これは餘り行はれて居ないやうである。斯くて時折蠶種を點検して蟻蠶の全部發生するを俟つて掃立に移るのである。

一九二五年の四月二十三日であつた。私は杭州から小舟を備ひ養蠶地へ向つた。恰度其の日は陰曆四月朔日であつたから、夕刻近くになると、行く途すがら神詣で歸りの農民に澤山行合つたのであつた。見ると彼等は孰れも、手に一束の躑躅の花を携へて居た。この花は支那で陰山花といふが、農民は之を一様に蠶花と呼んで居る。これは「蠶花茂盛」などと言つて蠶の當るやうにと縁起を擔ぐ花で、之を家に持ち歸つてから愈々蠶種の掃立に取掛るのである。「つゝじ」のない處では蠶具店に掃立用羽毛と共にその造花を賣つて居る所もあり、つまり躑躅の咲く頃が支那に於ける掃立時期なのである。

その前年石門附近に於て私は掃立の實況を見たが、餘杭種は紙面に隙間なく産付けてあるから、無數に發生せる蟻蠶は薄氣味の悪い程眞黒くなつて群り、處々に塊狀を爲して居た。之を掃立するには、先づ桑葉を細長く切り、之を紙面に振りかけてから三四時間を経たる後紙張りせる圓籠の上に特に小蠶紙といふ和紙を敷き、その上に鵝毛を以て掃落すのであるが、その取扱は必ずしも丁寧といふを得なかつた。

變つて自家製木綿の蠶種を使ふ無錫地方に於ては掃立期は浙西地方よりは約半ヶ月遅れて四月中旬の頃、折柄東南風が吹いて來ると、何處の家でも蠶種を暗い場所から取出して牕戸を開き、天井から麻絲で竹竿を横に吊し蠶種をこの竿にかけて春風に當てゝ居る。續いて桑葉の伸長具合を見計ひ、浙西地方と同様木綿の蠶種を内側に四折に疊みて之を布團の間にに入れて催青するのである。すると大抵二三日にして發蟻するといふ。掃立の準備としては此の地方では